

319.02

I729k



0009909000

0009909-000

319.02-1729k

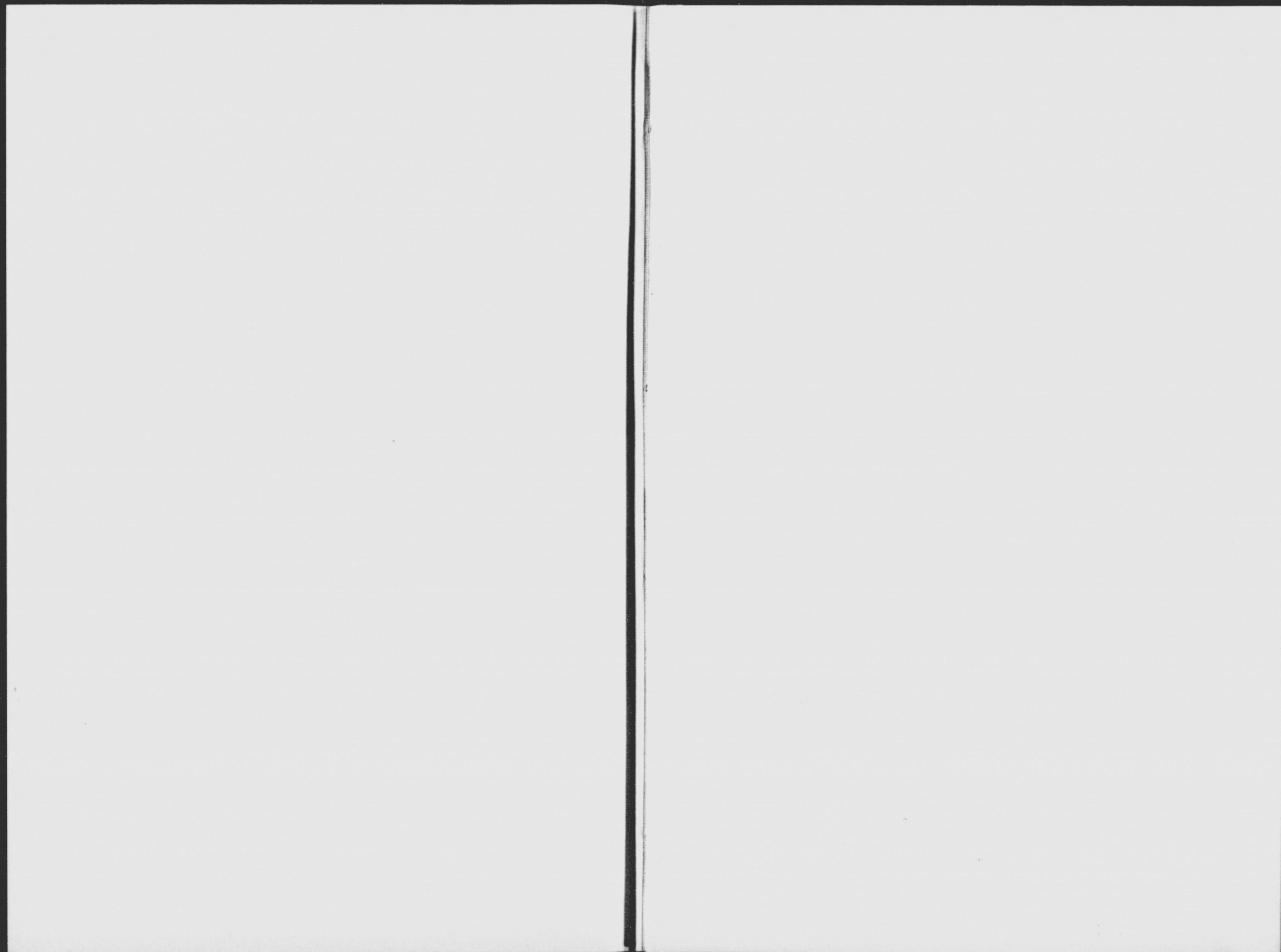
国際紛争史考

板倉卓造・著

中央公論社

1935

ABJ



K26N-17

板倉卓造著

國際紛爭史考

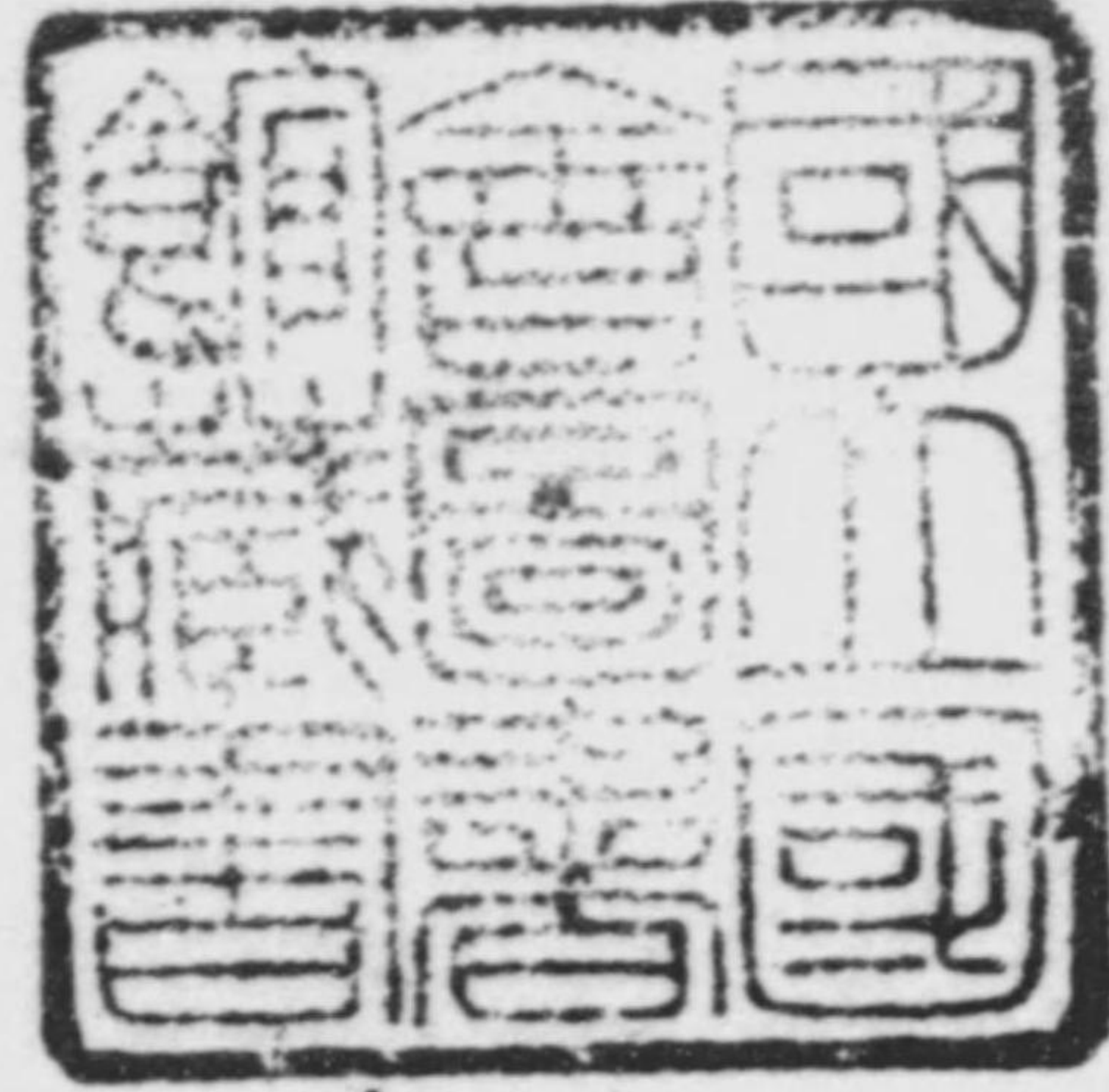
中央公論社版

319.02-I729k

序言

余の極めて親しい友人の一人が、曾て余の書齋の書棚を見廻して、「國際法なんて、随分無味乾燥な學問と思ふが、何かそれを寝轉んで讀めるやうな本はないか」と問ふのであつた。余は「それはある。少なくとも二種ある」と云つて、オッペンハイムの『國際法』二巻と、フォシューの『國際公法論』四巻を、書棚から取出して彼に示した。友人は先づオッペンハイムの著書を手を取つて、「これがそんなに手輕の本なのか」と怪んで聞くから、『其本の第一巻を讀むとき、第二巻の方を枕にし給へ、第一巻を讀んだら、今度は其方を枕にして、第二巻を讀み給へ。寝轉んで讀むには、其本とフォシューの本が一番便利だ』と答へたことがある。

此友人の尋ねる『寝轉んで讀めるやうな本』と云ふのは、無論、余が戲に答へたや



319.02
I729k

寄贈
總司令部民生局
殿



245373

うな意味の著書ではなく、わかり易く面白く書いたものを云ふのであることは申すまでもない。併し生憎彼の求める如き國際法の著書は、余の知る限りに於て内外未だ一冊もない。強ひて擧ぐれば國際法關係事件の先例集が、稍や其所望に近いものであらう。

専門の國際法研究者以外の人から見れば、國際法は或は無味乾燥の學問と思はれるかも知れない。否な單に我國際法ばかりではない。一般に法學に屬する諸科の學問は、極めて没趣味、殺風景なものとせられてゐる。況して日常生活と關係の遠い國際法が殊にさう思はれるのは無理もない。現に余は多年慶應義塾に於て、此學問の講義を擔當してゐる一人であるが、二三時間續けて講釋すると、それは余の講義下手にも因るのであるが、學生は聊か辟易氣味である。大學の學生にしてさうであるとすれば、直接用のない人達から敬遠されるのは怪むを要しない。それで余は講義の都度、途中で其題目に關係した内外の事件を多く引例し、實際問題と關聯せしむることに依て、學

生の國際法に對する研究の興味を失はしめざらんことを、常々教授上の心掛けとしてゐる。

本書は即ち余が講堂に於て引例する事件の若干を選んで、之に細説を加へたものである。或は誤つて興味本位に失したるやも知れず、聊か赤面なれども、若し前年の一友人が、國際法に關する『寢轉んで讀めるやうな本』を今日尙ほ求めてゐるとすれば、本書は少なくとも彼に於て一人の讀者を期待して可ならんか。

昭和十年四月十二日

板 倉 卓 造

國際紛爭史考 目次

日露戰爭關係問題……………一

倫敦「タイムズ」通信船の秘密……………三

- 一、其頃の無線電信……………四
- 二、一局は威海衛に他の一局は備船に……………八
- 三、『日本海軍の公認間諜』……………一四
- 四、威海衛の劉公島に立つ無線電信柱……………二〇
- 五、デーリー・メールの冒険記者を欺く……………二五
- 六、第二回港口閉塞失敗の發見……………三三
- 七、『此美しい小島』……………三五
- 八、露艦バーヤンに停船臨檢さる……………三九
- 九、秘密の情報を得て旅順口外へ急行……………四四
- 十、露艦ベトロポウロウスク沈没とマカロフ大將の戦死……………四九
- 十一、露國極東太守の布告と日本政府の制限令……………五五
- 十二、『タイムズは賣物ぢやありません』……………五九

ロシヤ義勇艦隊商船の軍艦變裝……………七四

- 一、紅海に現はれた二隻の露國假裝巡洋艦……………七四
- 二、横濱に向ふ英船マラッカ號……………七六
- 三、英國大に怒り露國遂に屈す……………八四
- 四、マラッカ釋放……………八九
- 五、其後のベテルスブルグとスモレンスク……………九三
- 六、商船を軍艦に變更する海牙條約……………一〇二

バルチック艦隊の英國漁船撃沈……………二〇〇

一、バルチック艦隊リバウ出發……………二〇〇

二、日本水雷艇の襲撃……………二〇三

三、日本水雷艇の正體……………二〇六

四、對露宣戰の危機……………二〇三

五、ヴィゴ―港淹留……………二〇五

六、ヴィゴ―より事件報告の電信二通……………二〇九

七、密偵の虚報露國海軍を誤まる……………二一三

八、始めて危機を脱す……………二一五

九、駐英露國大使の苦衷……………二一七

十、言葉の誤解から起つた行違ひ……………二二〇

十一、ヴィゴ―抑留者の數に不満……………二二七

十二、問題となつた英文協定草案の佛譯……………二二九

十三、英國艦隊の爲に包圍さる……………二六七

十四、巴里に開かれた國際審査委員會……………二七〇

十五、大團圓……………二七五

十六、北海事件に乗じて獨逸皇帝の策動……………二八五

世界大戰關係問題……………一九一

敗殘の獨艦ドレスデンの行方……………一九三

一、祕密根據地ローカス岩……………一九三

二、大西洋を南へ、南へ……………一九六

三、太平洋上絶海の孤島で勢揃ひ……………二〇一

四、コロネル沖の海戦……………二〇四

五、無線電信の偽電……………二〇八

六、フォークランド沖の海戦……………二二一

七、逃げ迷ふ敗殘の一艦……………二二四

八、死の如き荒涼の景……………二二六

九、マゼラン海峡の祕密……………二二九

十、南太平洋上の某地點……………二三四

十一、稍や見當がつきかけた……………二三〇

十二、流星光底長蛇を逸す……………二三三

十三、クライマックスの日が来た……………二三七

十四、ドレスデンの健氣な最後……………二四〇

十五、智利政府の抗議と英國外相の陳謝……………二四四

看護婦ミス・キャヴェル銃殺事件……………二五三

一、一看護婦の捕縛……………二五三

二、彼女は英雄の如くに死んだ……………二六〇

三、彼女の死は無駄ではなかつた……………二六六

英商船の獨逸潜水艇衝擊事件……………二七五

一、無警告撃沈の宣言……………二七五

二、英船長の銃殺……………二七七

三、商船の抵抗權……………二八二

『戦争犯罪人』問題のライプチヒ裁判……………二九〇

一、『戦争犯罪人』……………二九〇

二、獨逸引渡交渉……………二九三

三、裁判長シュミット博士……………二九六

四、英國の證人と獨逸の被告……………三〇三

五、其後の『戦争犯罪人』問題……………三〇六

外交慣例關係問題……………三一一

孫逸仙監禁事件……………三二三

一、ロンドンの亡命客……………三三

二、公使館の實權者馬大人……………三六

三、『此處は支那なのだ！』……………三九

四、怖ろしい夜が続いた……………三四

五、炭取りの上の紙片……………三七

六、闇に現はれた女の人影……………三一

七、嘘——支那外交の全部……………三五

八、それは美しい明月の夜であつた……………三九

九、夕刊グローブ紙……………三四三

十、公使館の裏口から横町に出た……………三四七

十一、不思議な手紙……………三五三

十二、ホーランド教授のタイムス寄書……………三五六

十三、ホーランド教授の引例二件……………三六二

倫敦支那公使館の事實上の主人公……………三六九

一、外交官として派遣された自國臣民……………三六九

二、自國人を外國公使として接受した米國……………三七三

三、マカートネーの勝訴……………三七七

政争に利用された英國公使……………三八三

一、英國公使サックヴィルの人物……………三八三

二、見知らぬ人から突然の手紙……………三八五

三、惡辣なる選舉戰略……………三八九

四、召還請求……………三九二

五、バルウアー事件……………三九六

六、英國怒つて公使館全員を引揚ぐ……………四〇〇

七、召還請求は合法であつたか……………四〇四

外交官の治外法權……………四〇七

一、瑞典公使の少女轍殺事件……………四〇七

二、獨、塊の米國に於ける陰謀……………四二

三、ドイツ大使館附武官の召還……………四一八

四、公使館員と家族の特權……………四三

獨帝のアグレマン取消事件……………四三〇

一、アグレマン……………四三〇

二、アグレマン取消……………四三一

三、貧乏學者の大使……………四三五

四、輕率非常識なる獨帝……………四四一

五、米國の金持大使……………四四七

國際會議の席順と外交語……………四五五

一、ライスウィック會議……………四五五

二、席順争ひと下手法ラテン語……………四五七

三、國名の『いろは』順……………四六〇

四、昔の外交語……………四六三

五、外交語としてのフランス語……………四六四

六、外交語としての英語……………四六七

七、英佛語の公認……………四六九

八、國際聯盟の公用語……………四七三

九、最近の用語問題……………四七五

國際紛争雜考……………四七九

一山師の放言事件(英米開戦の危機)……………四八一

一、カロライン號事件……………四八二
二、開戦の脅威……………四八五
三、一場の喜劇……………四八八

土耳其が拂つた侮辱の代價……………四九三

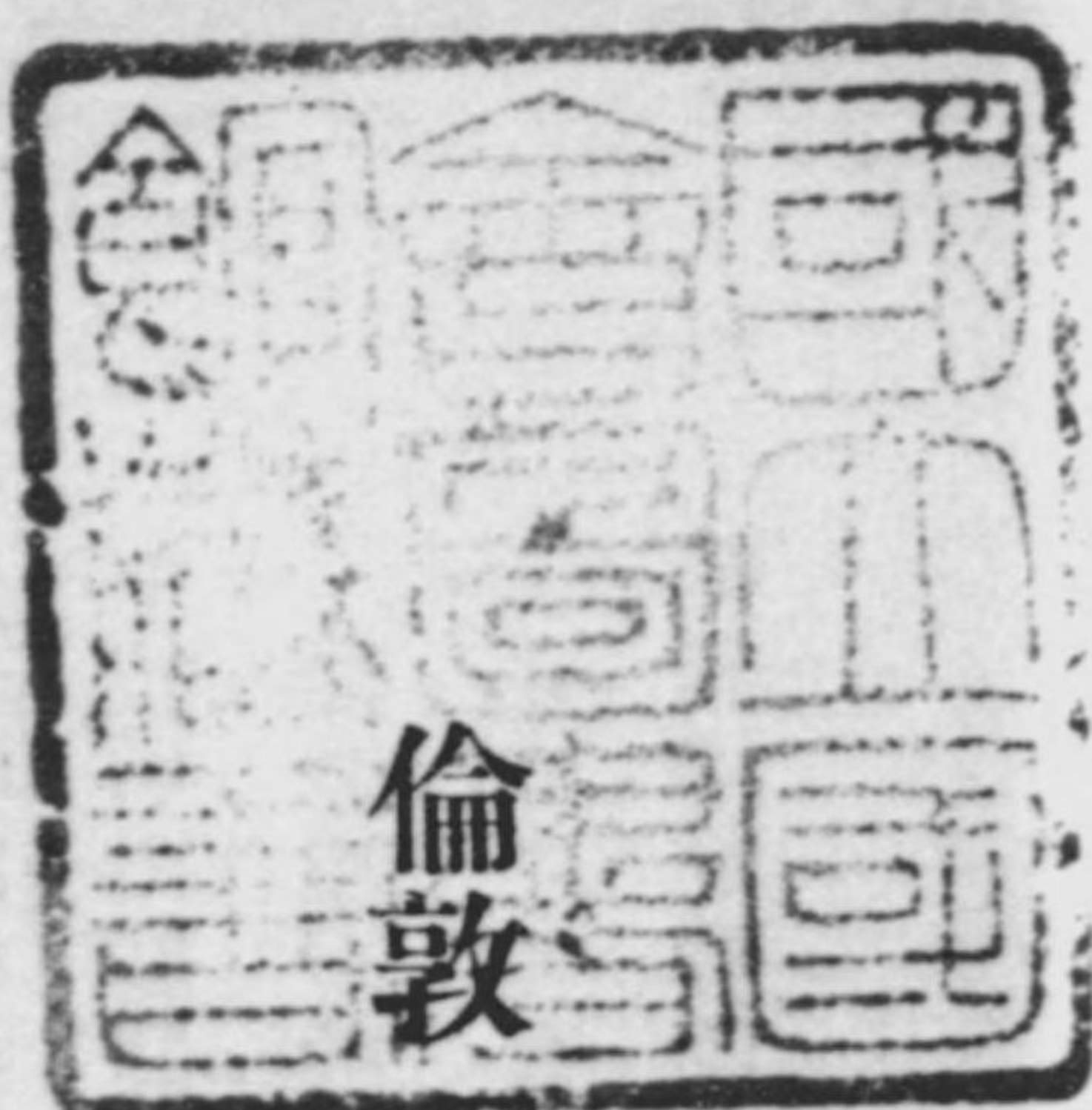
一、ユーモアを解せぬ獨逸の外交官……………四九三
二、土耳其皇帝天長節の夜會……………四九六
三、侮辱されたブルガリヤ……………四九八
四、土耳其が拂つた侮辱の代價……………五〇一

弱國に臨むときの國際聯盟……………五〇六

一、國境の小せりあひ……………五〇六
二、否か應か即答せよ……………五一〇
三、ブリヤン議長の得意……………五一四

國際紛争史考

日露戰爭關係問題



倫敦 タイムス通信船の秘密

日露戦争の當時、倫敦タイムスが汽船海門號を備入れ、之に其頃ヤット利用されたばかりの無線電信機を据付け、威海衛に根據地を置いて、旅順方面から仁川に至る海上を遊弋せしめ、新聞の海戦通信に一新機軸を出したことは、世界の新聞界に有名な話であるが、其通信船海門號は久しからずして露國極東太守から日本の間諜であるとして、見付け次第捕獲處罰すると云ふ宣言を發したので、遂に戰場を引揚ぐるの已むなきに至つた。新聞の戦時通信に従事する船を以て間諜と認め、之を嚴罰に處せんとした露國の宣言は、當時は勿論その後にも、内外國際法學者の間に、無法極まるものとして非難せらるゝ所である。併し露國が何を以てタイムスの海門號を日本の間諜と疑つたかは、今日まで全く不明であつた。然るに其海門號の秘密が最近に至つて暴露された。即ち之に乗込んで親しく通信に従事したライオネル・ジェームス本人が、二十餘年來の秘密を今こそ打明けると稱して、一切の事實を彼の自著中に發表したのである。此著一たび出でて、内外學者の著書は海門號事件に關する部分を訂正せねばならなくなつたのである。

一 其頃の無線電信

ライオネル・ジェームスは一九〇三年の夏、ロンドン・タイムスから米國出張を命ぜられた。此使命の眼目は米國陸軍と其軍事教練所の視察に在つたが、紐育に到着すると、時恰も國際ヨット競争の進行中であつた。當時無線電信は未だ搖籃時代を脱してゐなかつたけれども、紐育の新聞中には氣早やに之を利用して、シャムロック號（世界的に有名な英國紅茶王リプトンの愛乗した非常に快速なヨット）と其敵手たるアメリカ側のヨットの競争を報道する爲め、新聞社前に模型ヨットを列べ、無線電信に依り刻々その情況を報じてゐた。ジェームスは米國新聞の此奇抜なる思付きを見て、彼の念頭に不圖浮んだのは、無線電信と云ふものは或場合には新聞記者の仕事にうまく利用することが出来るかも知れないと云ふことであつた。そこで彼は色々違つた式の機械を比較して見た處、其時代に改良されてゐたものの中では、リー・デフォーレスト博士の機械が、他の競争者の群を抜いて新聞報道上に最良の成績を示してゐたことを知つた。

滯米中、彼はデフォーレスト博士が工風した無線電信の改良に關係してゐる或人物に會つて、同人からこんな話を聞いた。夫れはデフォーレストが獨特の工風を凝して、話を口頭のまゝ受取れる受話機を發明したと云ふことであつた。此話をジェームスに語つた人の説に依ると、前記のヨット

競争の報道にデフォーレスト式が最も成功した理由は、他の式の無線の起した妨害の爲め、若干の受信機を無効に歸せしめたに拘らず、デフォーレスト式は完全に通話を持続したに止まらず、他の一切の競争相手となつた機械が、一分間に精々五六語しか接受出来なかつたに反して、一分間三十語乃至四十語の割合で受信することが出来たからである。云ふのであつた。此事實は彼の腦裡に深甚な印象を刻し、彼は將來自分の専門の新聞記者の仕事の上に、之を應用する機會も到來するであらうと、他日の用意の爲に確と頭の中に入れて置いた。

其後、バルカン方面からロンドンに歸るや、彼は何時にても直に極東に出發の準備をして置くことの社命を受けた。當時日露兩國間の外交關係が極度に切迫した状態であつたからである。尤もタイムスの支配人モーバリー・ベルはまだ談判破裂は避け得るかも知れぬと一縷の望みを繋ぎ、又タイムス社としても更に一つの大戦争の經費を免れたいと云ふ考もあつたが、併し兎に角に彼は出發の準備と必要な豫備的手續を整へて置くことを命じられたのである。

彼は自分の職業上に何とか無線電信を應用する意圖を、どうしても忘れなかつた。極東に於て日本とロシアとの間に起るやうな戦争は、地圖を研究して見てもニュースの敏速なる報道に、此斬新な利器を應用す可き特殊の機會であるやうに思へたのである。併し其時支配人モーバリー・ベルに此問題を持掛けても、トント氣が乗らないらしい状態であつた。と云ふのは特別の經費のかゝるや

うな提案をすれば、彼が尻込みすることは明白であつたからである。又ジェームス自身にしても之を提案するに足るだけの的確な計畫は未だ持つてゐた譯ではない。唯彼はタイムスに四年間勤務してゐる間に、支配人に近づく最良の方法を覺えた。即ち單純な假想を提案して、之に大金を出せと支配人を急ぎ立てゝも夫は無駄であるが、併し苟も具體的な計畫であつて、又それが新聞紙としてのタイムスの聲價を高める可能性があることを見出せば、彼は立所に之に賛成すること請合ひであつた。そして彼が一旦承諾した上は、假令ひ私信中では相手をコツピどく罵倒したり、又は其事業の利益が少いとか、利益の上り方が遅いとか、口やかましいことを云つたりするけれども、然も必ず飽くまで相手の味方となつて、援助する人物であつた。

併し支配人ベルの承認を求める問題は別として、ジェームスは彼の計畫を進めるには、極めて注意深くやらねばならぬことを感じた。抑も此計畫たる新聞界に於ける一新機軸である。彼の考案にして少しでも外間に感付かれたら、忽ち萬事窮するのである。其時代に於ても戦時通信の競争は激甚にして、ロンドンの大新聞社は互に辛辣な競争をやつたものである。だから一寸した暗示でも與へたら最後、彼が斯く大事に秘藏して居る考案を、忽ち競争者に奪はれてしまふ恐れがある。又無線電信を應用する此計畫を實行するのは、此場合に唯の一社だけで、然も機會は此時限りであることを彼は十分知つてゐた。蓋し若し此計畫がうまく成功すれば、將來の戦争には此種の計畫は軍事

當局者の爲に嚴禁されることが必定であつたからである。夫れで彼は誰にも——タイムス社内でも親しい同僚達にすら此秘密を洩らさず、若し運命と彼の傭主等の同感を得ば、計畫を實行することの出来る手順を廻らす可く、二三日の餘日の間に之に取掛つた。

彼が極東の地圖や海圖や海陸軍の事情を懸念に研究してゐる最中、丁度リー・デフォーレスト博士が英國に来て居ることを聞いた。又博士がマジエスチック號で紐育へ歸らうとする所であることも知つた。そこでジェームスは兎も角も此汽船に同乗することにした。

半信半疑の裡に是等の日を送つてゐた恰も其頃、彼は舊友デヴィッド・フレイザーのことを想ひ出した。之より先きモーバリー・ベルはジェームスと細目の諸點を協議して、若し實際戦争が開始された場合に、彼の助手を一名又は若干名選定する方が宜しいと云ふことを力説してゐたのであるが、ジェームスがタイムス社に居る時、恰も宜し、以前ラムスデン騎兵隊にゐたラムスデン大佐がフレイザーを同伴して彼を來訪した。ラムスデン大佐は曾て南阿戦争中、在印度英人の間から募集した義勇隊を率ゐた頗る勇敢なそして俠氣に富んだ司令官であつた。其日大佐は若し戦争が勃發すれば、タイムスへフレイザーを推薦する積りで連れて來たのである。一體このフレイザーと云ふ男は銀行の書記から身を起したスコットランド人で、頑丈な面構へをしてゐた人物である。彼は銀行の用向きで前年印度に渡つたが、彼の地に行くや、忽ち印度の浩然たる風物に感化されて、何時の

間にか心が變つてしまつた。夫れで間もなく起つた南阿戰爭にラムスデンの騎兵隊に應募して出征したのであるが、彼が戰爭から歸つた時は、もう事務所の椅子などにジツトして居る気分は全くなくなつてゐた。彼は生れながらの新聞記者であつたのだ。ジェームスはフレイザーを見て彼の助手とするには丁度誂へ向きの人物だと考へたのである。(後年フレイザーは有名なモリソンの後を繼いでタイムスの北京特派員となつた。)

其時にはモーバリー・ベルも未だ不安心な気分であつたから、即座に經費を出すやうな意思もなかつたが、併し若しフレイザーが如何にかして日本へ行くことが出来たら、ジェームスが入用と認め次第、同人を雇入れることだけは承諾した。處が遺憾ながら其頃のフレイザーは、囊中頗る缺乏して二進も三進も行かない状態であつたし、おまけに其晩になつて極東の風雲俄に急を告げると云ふ報道に接したので、彼は取敢へず支配人を説いて、フレイザーを従僕として連れて行けば割引率で旅行出来るから、極東までの旅費だけ支出して貰ふことにし、支配人の同意を得た。

二 一局は威海衛に他の一局は備船に

さうかうする内に、愈々デフォーレスト博士と一緒にマジエスチック號が出發する日も迫つた。併し夫れには例の無線電信の祕密をモーバリー・ベルに打明けねばならない。一九〇三年十二月二

十一日の月曜日彼は少からず當惑した。實際その時機が未だ適當でないのだから、彼は非常に憚んだのである。處が運命は偶然彼に幸ひした。と云ふのは何事か支配人の決心を促したものと、如く、丁度彼が其日の晚餐のテーブルに着かうとする處へ、モーバリー・ベルから簡単な手紙が届いた。出来るだけ早く日本に出發しろと云ふのであつた。

十二月二十三日、彼はフレイザーを従僕としてマジエスチック號に乗りリヴァプールを立つた。立つに先立ち、未だ社の財政上の考から平和に戀々たるモーバリー・ベルはジェームスに向つて、若し極東の事局が其内に鎮靜すれば、紐育か桑港に到着した時、其處から呼び戻すかも知れないから其積りで居れと云つた。船がクインズ・タウンを通過してからは、彼は餘り『従僕』の顔を見なかつた。夫れはマジエスチック號は恐しい西南の強風に會つたし、又フレイザーは餘り船に強い方でなかつたからである。夫れに彼の船室が船の中で一番ひどい所であつたことは云ふまでもない。併し此『従僕』を同伴したと云ふことは、其半面に多分の愛嬌味を帯びてゐないものでもなかつた。其次第はかうである。船客名簿には『エル・ジェームス大尉、竝に従僕』とある。そこで之を認めたらアメリカの探訪記者達は、彼等の紐育到着の際も又米大陸横斷旅行中も、假令ロンドン・タイムス社の者とは云ひながら、一介の戦時特派員たる者が、従僕を引連れて居るなんてことはどうも解せない。夫れで此問題はアメリカの無数の新聞紙上で、或は嘲笑、或は諧謔の種子と爲つたので

ある。

扱てジェームスがデフォーレスト博士に會つたのはクリスマス當日のことである。ジェームスは長い間、胸中に秘めてゐた問題を試に打明けて見た。處が彼の豫想した通り相手は彼の投げた餌に早速飛び付いて来て、すぐ熱心に此問題に就いて談じ始めた。彼は此計畫の大事な意義は秘密裡に決行する點に在るから、お互の間に約定した計畫が若し他人に洩れでもすると、忽ち競争新聞社ばかりでなく、他の式の無線電信の競争を誘發する虞のあることを博士に懇々説いて印象させたのである。博士は易く此間の理窟を諒解したので、計畫は技師や機械がシャトルから日本に向けて送出されてしまふまで完全に秘密を保つことが出来た。其後この秘密は漏洩したが、併し其頃には彼等は後から追ひ驅けて來られても、到底追ひ着かれない程に前進してゐたのである。

デフォーレスト博士が彼に要點を説いて聞かせた色々の可能性を十分咀嚼した後、ジェームスは航海中の餘日を種々な今後の見込みに就いて工風を凝して見た。そして紐育も間近になり、天候も靜穩になつたので、彼は愈々フレージャーに秘密を打明けた。マジエスチック號が大晦日に紐育埠頭に繫留してゐる間、彼等が如何に多大な關心を以て極東からの報道を待つてゐたかは、想像に餘りある所である。而して報道はすぐに來た。タイムス社よりの電報に曰く、

『情報變りなし、行け。ベル』

ジェームスは豫て用意して置いた左の暗號電報を、シカゴで大陸横斷の列車と連絡する紐育發急行列車に乗込む前に急ぎ打電した。

『デフォーレスト式無線電信採用を望む。デフォーレストは二電信局用の機具を二百五十ポンドで提供する筈。送先きは日本。技師四箇月分の經費は七百五十ポンド以内。一局は威海衛、他の一局は備船又は朝鮮海岸。勿論アメリカ新聞の加入を許して宜し。提案御採用を得ば紐育レスポンド(デフォーレストの電信記號)と桑港サイベリヤ號内の私宛にイエスと打電せよ』

彼が桑港に到着した時、デフォーレストの件に關するモーバリー・ベルからの返電如何は、彼の運命を茲に決するものであつた。返電は來た。僅に二語、曰く『デフォーレスト取極めた』

此二語の暗號電報は彼に取つて非常に深長な意味を現したものである。第一にモーバリー・ベルは今や日露開戦の避く可からざることを確信するに至つたことだ。彼の無線電信の計畫はタイムス社の承認を得た。彼は紐育から打電した最初の提案中には、浮動無線電信局のことを不明瞭にして居る。同電文中に『備船』と云ふのは此浮動局のことを云ひ現す爲に使つた文字だ。夫れからそんな場所ではトテも目的には添はぬことを十分承知しながら、もう一つ朝鮮海岸に固定電信局を設備する代案を附加して置いたのである。

彼等の乗船サイベリヤ號が目的地に向つて桑港を解纜するまでに、僅か四十八時間しかなかつた

其間に、彼は大急ぎで据付け機械と技師の送出しをデフォーレストと打合せた。

桑港出帆の前日、彼は最後の爆弾をモーバリー・ベルの支配人室で破裂させた。支配人も今ではもう十分に計畫を納得したと考へたので、次の如き電報を打つたのである。

『御許可の電報を受取つて實行した。汽船絶対に必要なり。否應の返電、ホノルル宛頼む』

ベルは彼の計畫を許可した。彼等は二月末日まで協力した結果、次の組織を完成した。即ちジェームスは日本の海陸軍當局者と近付きになる爲め、一時東京に滞在して居る間に、フレイザーを威海衛に送り、受信局及び根據地係として留まらせた。他方、香港で千二百噸の汽船『海門』號を備船して、デフォーレスト式無線電信機を据付け、浮動發信局として威海衛へ廻送させた。フレイザーは色々な困難を打破して威海衛に固定無線電信局を設置して、其電信係としてアサーンとブラウンと云ふ二人の米國技師を置いた。東京にはジェームス自身の屬僚として、曾て濠洲海軍に屬し、殊勲章を持つて居るカフーン大佐がゐたが、同人はベル支配人が海軍從軍記者として採用した男で、日本の戰艦隊に乗込む爲め當局の許可を待つてゐた。

斯くて無線電信の設備を施した汽船が、愈々既成の事實となるまでの間、彼の計畫の祕密は完全に保たれてゐた。然るに當時多數の外國從軍記者が東京に集つて居り、彼等は世界の凡らゆる國々から來た者であるが、就中英米兩國の記者達が自然大多數を占めてゐた。彼等が遂にジェームスの

計畫を知るや、之を妨害せんとして種々の運動を試み、或は個人的に抗議したり、或は自ら模倣を企てたりした爲め、結局面倒な外交問題たるに至らしめた。ジェームス自ら記して曰く、

『米國公使の如きは、日本が獨りタイムスに對して特別の優遇を與へるのは怪しからぬと云つて、外務省に抗議を持込んだ。之に對して日本外務省は公海に於てタイムスの行動を取締る權能はない。又同社が如何なる計畫を企てても、夫れが日本の海陸軍の安全と利害の衝突を來さぬ限り、之に對する責任を負ふ理由はないと撥ねつけたのである。』

東京駐在の英國大使サー・クロード・マクドナルドは始終私に對して親切で又親密であつたが、公使は私が時間と傭主の金を浪費してゐるのではないかと注意して呉れたり、又私の同僚で日本に永住してゐたプリンクラー大尉(タイムスの東京通信員)も私が何か無分別なことでも仕出かして、彼の第二の故郷たる日本の利益を害するやうなこともあるまいかと心配して、其本心では私の計畫に反對であつたりしたが、併し此計畫の精神を嘆賞するだけの新聞記者氣質はプリンクラーにも十分あつた。

嫉妬心に驅られた同業者等は、私の船が若し日本側で報道されることを欲しない海戦を目撃した場合には、船は過失のやうにして撃沈される筈で、之は日本の或祕密な方面から聞いたことだなどと私に耳打ちした者もあつた。支那艦隊司令官であつた英國提督某の如きは、嚴めしい調子

で、私の行動は明に英國の嚴正中立を侵害するものであると暗示し、其積りで私を警戒しろと部下の艦隊に訓令したやうな有様であつた。

併し私は日本に關する限り、決して同國の不安など醸すやうなことを本旨として、此高價な冒險を始めたのではないから、そんな邪魔は凡て平氣で見居た。思へば日露戦争後既に四半世紀の星霜を閲した。過去二十有餘年の長年月に亙り、私が隠してゐた一大祕密を口外しても宜い時が今や到來したのである』(Lionel James, High Pressure, 1927, p. 237.)

三 『日本海軍の公認間諜』

彼の所謂一大祕密とは何であつたか。再びジェームス自身をして語らしめねばならない。

『私は東京に着くが早いかすぐに海軍次官齋藤中將と會見して、かう云ふことを彼に提議した。即ち表面では私の通辯と見せ掛けて置いて、實は私の通信の檢閲官たり、又東郷艦隊の爲の情報官たるに適當な日本海軍將校一名を、私の船に乗込ませることを提議したのである。簡單に判り易く云へば、私がタイムスへ迅速且つ獨占的なニュースを送る機會を與へらるゝ代りに、私の方からは海門號(同船は出さうと思へば時速十三浬は出た)を、無條件で日本海軍の通報機關の中に編入しても宜いと提供したのである。

日本海軍當局は慎重に考慮し、又度々會見の後、此提議に同意した。其契約は日本海軍大臣の署名のあるもので、意味は左の通りである。

汽船海門號に依つて發信する可き無線電信通報の件に關する海軍大臣閣下宛、本月十二日付の貴翰正に落手仕候。

帝國政府は兩國間に存續する最も良好なる關係と諒解とに鑑み、若し貴下に於て同封訓令書の内容に御同意被成候はば、貴下の御要請に何等の異存無之、且つ特別の例として之に應ずる意圖なることを貴下に對して御通知申上げ得るを欣快とするものに御座候。

此機會に於て、必要なる場合、貴下の電信機及び専門技師を帝國海軍の使用に供せんとする貴下の信實なる御申込を感謝し、又同時に貴下の必要と認められ候ことにて、現下の狀勢の下に於て小官等の爲し得る所のものに候はゞ、何事にても喜んで貴下に對し御助力可申上候間、御承知被下度候。敬具。

一九〇四年二月二十一日

日本帝國海軍中將 伊集院 五郎

タイムス社特派通信員 エル・ジェームス大尉殿

書中に訓令書と云ふのは、私に同伴する日本海軍將校に關する件及び日本の電信局との電信暗

號と無線電信に關するものであつた。

海軍大臣は私に此文書を手渡しながら、非常に懇ろな態度で、貴下の企ては嘆賞の外はない。又貴下の日本側に對する至誠は感銘する。我々は海軍作戰上に貴下の御助力の提供を受諾することに決したのである。而して其爲に日本海軍部内の無線電信専門家外波中佐を選抜し、檢閲官として又必要な場合日本艦隊との聯絡係として、貴下に同伴せしむることにしたと話した。さう云つて海軍大臣は私の幸運を祈つて引退がつた。其時齋藤中將は私の爲に訓令書を用意して置くから、明日再び來訪せよと云つた。そして再び別を告げながら中將は私にこんなこと云つた。

「君、此協定のことは誰にも洩してはいけない。我陸軍當局にも知らしてはいかん」
更に彼が私を驚かした一命令がある。

「當分の間はどんなことがあつても、決してプリンクリー大尉（タイムスの東京駐在通信員）に我々の取極めたことを知らせてはいけない！」

私は俗語に天を翔けると云つた勢で海軍省を退出した。自分は之から日本海軍の公認間諜になるのだと云ふことは少しも氣が付かなかつた。私の腦裡を支配した唯一事は、自分が準備を完了して、公使館の壓迫に會ひながらも、其準備した計畫を愈々實行に移して、タイムス社の自分に與へて呉れた信頼と、それから其信頼の結果、現に生じてゐる多大の出費や、又今後生ず可き出

費等の當然なものであることを立證す可き其鍵を、首尾よく獲得したのだと云ふことであつた」
翌朝、彼は齋藤中將と會見し、其席で次の打合せを済ませた。即ち彼は表面石炭を積込むと云ふ口實の下に、海門號を長崎に呼寄せせる事、但し同船は三月八日の朝までは同港を出發せぬ事。そして其前夜、外波中佐は彼の通辯の資格で同船に乗り込み、服装は勿論平服とする事。一方齋藤中將が極く特別な許可として取計らつて遣つた所に従ひ、艦隊從軍の前記カフーン大佐を同伴して、日本海軍の前衛根據地で彼を東郷大將に會はせる事、と云ふやうな手筈であつた。

『齋藤中將の考では、私（ジェームス）は外波中佐とは東京で面會せぬ方が宜いと云ふのであつた。夫れは東京には餘り澤山の人々が警戒の眼を光らして居るからで、外波中佐は長崎まで密航し、同地で平服姿で人に見付からぬやう、船に潜り込んでしまへと云ふのである。そして其時の打合せでは、私は自分の計畫を放棄したと云ふことを觸れ廻り、夫れを本當のことと思はせる爲に、出征中の日本陸軍第一軍に従軍方を出願する段取りであつた。そこで齋藤中將は極めて親切に且つ温情溢るゝ面持ちで、私の爲め「幸運を祈る」と云つて呉れた。

私は早速電報を打つて、海門號に石炭積込みの爲め、長崎に來航せよと命令した。私自身はカフーン大佐と同伴し、三月三日横濱發、同八日長崎着の郵便船に乗り込んだ。夫れは非常に愉快な航海であつた。

極東到着以來、私は初めて此不思議なそして人心を恍惚たらしむるやうな國土の美しい風光を眺めることが出来た。私等の船は瀬戸内海を通過して前後四日間の航海をしたのであるが、夫れは私の審美慾に對して間斷なき満悦を與へて呉れた。至る所に驚く可きほど無數の風光絶佳な島や、岩や、入江や、岬を持つて居るこんな美術的な國民が、事もあらうに、現代的戦争のやうな俗惡な非美術的なことをやつて居るなんて、私には殆ど信じられなかつた。

三月八日拂曉、我乗船は長崎に到着し、其處で水先案内に依つて、世界で恐らく一番美しい港に入つた。本投錨地點に近づくに従つて、邊りの風景は私に取つて更に一段の美觀を加へた。外でもない。僅か一鏈（一海里の十分の一）許りの眼前に、あの恰好のよい海門號が如何にも端然と、そして大海を平氣で乗切つて見せると云つた具合に、附近の石炭船や、日本船や、老朽船等を斷然威壓して投錨してゐたのである。見れば出帆旗は翩翩として檣頭高く翻つて居る。其上甲板にはフレージャーが白毛布の外套を見せびらかして、如何にも最近まで威海衛の英國艦隊にのみしたと云はぬ許りに立つて居るのを見付けることさへ出来た。

間もなく私等は「我等の船」に乗移つた。外波中佐は既に乗込んで居て、凡ての手順は全く完了してゐた。

海門號は全くジェームスの期待した通りの船であつた。乗組員は船長の外五人の歐洲人幹部を始

め、支那人水夫約四十人と馬來人の舵手四人であつた。船長パッサモアは當年五十歳位の顔色淺黒い老練家と見受けられた。彼は少々用心深い男ではあつたが、船乗りとしては上物であつて、其一番の缺點と云へば、支那海に面した或僧院の觀測所に居る一學者が發明したとか云ふ一種特別の晴雨計を、殊の外熱愛してゐることであつた。此複雑な器械は颯風を豫知するもので、パッサモア船長の元氣は其水銀の昇降と共に上下した。だから若し此晴雨計が、例へば汕頭の南方五百哩の邊に低氣壓の生じたことを示さうものなら、パッサモア船長は黃海の方にも、朝食の車蝦のカツレツなど、トテも口には入らないと云ふ有様であつた。併し此男にも至極尤もな一つの虚榮心があつた。夫れは彼が少年時代に英國近代の名女優リリー・ラングトリーと同じ庭で遊んだことがあると誇るのである』とジェームスは冷かして居る。一等運轉士マットンとは大分違つた性質の男であつた。彼はパークンヘッド生れで、其祖先は航海業者であつたやうだ。即ち英帝國をして今日あらしめるに多大の功勞のあつた階級の有力なる後裔であつた。他の乗組幹部等に就いては茲に特記す可き點もないが、皆揃つて勇敢な有爲の海員であり、タイムス社の爲に忠實によく働いた。

『外波中佐との交際に至つては誠に愉快なものであつた。勿論初の程は彼は幾分内氣で遠慮勝ちであつたが、お互に馴じんでからは、私（ジェームス）は齋藤中將がよく同中佐を選んで呉れた

と感謝せずには居られなかつた。外波中佐は何よりも先づ第一に眞面目な日本海軍將校であつた。彼に取つては任務と云ふものが一番大切なものであつた。併し任務は任務として、彼は實に愉快な友達で諧謔的氣分の滿々たる人物であつた。船橋に立つて居る所は正に四十男に見えるが、庇のある帽子を冠つた時は、未だ二十歳をチョット出た許りの青年みたやうであつた。私は私の善良なる友人外波君を通じて、他の何者よりもつと確に日本人の敬慕す可きことを學んだのである。相互に祕密を語合ふまでになるには多少の時日もかゝつたが、然も一度び此親密の關係が結ばれた後は、夫れはタイムス社に取つての一資産となつたと同時に、我同盟國に對しても貴重なものになつたことと信ずる。

私等は船口の下に六百ポンドの値打ある荷物と、夫れから私に取つては更に遙に貴重な或物を積んで、午後二時いよいよ長崎を出港した。私の内ポケットには日本海軍省發給の許可證が秘められてあつた。目的地は仁川である』

四 威海衛の劉公島に立つ無線電信柱

三月九日、海門號は向ひ波を蹴立て、仁川に向つて駛走しつゝあつた。

三月の月は海軍方面では先づ休養とでも云ふ時であつた。ロシア軍は開戰當初に受けた大打撃の

回復を急ぎ、日本側では其間に海軍作戰の補助運動として、頻に朝鮮侵入の歩を進めつゝあつた。併し東郷大將の艦隊が其間全く無爲に日を送つてゐたのではない。其枝隊は一定の期間を置いて旅順口の沖合に現はれ、長距離砲撃を加へて、同軍港内の沮喪状態を存續させんと試み、同時に間歇的の水雷襲撃や、港口閉塞等の壯舉が行はれたのである。

當時露國海軍が唯一の望を囑したマカロフ提督は、既に旅順に到着してゐた。彼の存在は露國艦隊に靈感的効果を與へ、破損した諸艦の修理も急速に行はれ、又旅順口の水道を測量して、先に日本側で沈設した障害物等も、水中爆破を以て取除き、三月二十日には港口はもう通過し得るやうになつた。露國艦隊が再び港外進出の出来るやうになつた其五日以前に、黒木大將は第一軍の鎮南浦上陸を完了した。大同江の結氷の破れ始めるや、日本軍は直に上陸を開始した。

海門號は十日の早朝、仁川港口を通過して、島や淺瀬の間を縫ふやうにして進み、正午頃、丁度一箇月前に瓜生艦隊の爲に撃沈された薄幸の露艦ワリヤークとコリーツの殘骸近くに投錨した。其處には一隻の日本警備艦と一二隻の水雷艇が碇泊してゐたから、先づ海軍省の手紙を携帯して居るカフーンと一緒に、外波中佐は軍艦に行つた。海門號には多量の貨物があつたので、翌日までは同港を去れる望はなかつた。

『外波中佐と聯絡を取り、又彼の同意を得て海門號を威海衛へ廻送し、鎮南浦を経て又仁川に歸

るとに定めた。外波は途中東郷艦隊の集合地を訪ひさへしなければ差支へないとの意見なので、私（ジェームス）は東京の日本海軍省に暗號電報で、船の行動を極めて詳細に報告した。蓋し私には海軍内の關係者に凡ての情報を、若し望むならば之を利用するに十分な時間の餘裕を以て、與へたのであるに拘らず、日本陸軍當局は海軍當局に反對して、私等の鎮南浦寄港を妨げようとしてゐたからである。海門號は翌十一日、仁川を去つて、十五日までは、鎮南浦に現れなかつた。三月十二日の黎明、船は山東角に達し支那の姿を初めて瞥見した。午後一時になるまで、威海衛には着かなかつたが、港に入る一時間手前から港内の劉公島に少くとも百呎ばかりの無線電信柱が立つて居るのを望み、又この柱の側に廣々した小屋が二棟ばかり建てられてあつたのが見えた。是は二人の米人技師アサーンとブラウンが萬事心得て、フレイザーの頼んだ請負師に仕事を急がせて出来上つた無線電信局であつた。

此無線電信柱の立つて居る絶壁の頂上まで、うねくねした立派な道路が出来てゐた。劉公島には非常に氣持のよい小さなホテルがあり、又相當の身分ある人々の爲にサーヴィス・クラブ（海軍俱樂部）と云ふのがあつた。此俱樂部は最初は支那道臺の官邸であつたもので、日清戦争の末期、日本に降服した提督丁汝昌が悶々の餘、自殺したのも此同じ官邸であつた。

明くれば快晴の春の朝であつた。乃ち早朝ジェームスはフレイザーと無線電信局へ歩いて行つた。

其處で二人は色々意見を戦はして見たが、結局この分なら決して悲觀的な状態ではない。技師アサーンはジェームスに請合つて、今の状態でも若し彼とブラウンの兩人で、四時間かけて海門號の無線電信の設備を仕上ぐれば、百哩位の通信は出来ると云ふのであつた。此話に大に力を得て彼等は丘陵を濶歩して下りながらかう決定した。即ち日本陸軍に従軍記者達の同行を許可されたら、早速フレイザーを従軍させることにし、ジェームス自身は海門號でコツソリ出掛け、當局が許可を與へ次第、直にフレイザーを鎮南浦へ放り出すことにしたのである。

アサーンとブラウンは其日上々の仕事をして、海門號は午後六時、出帆の用意が出来た。乗込んだのはジェームスの外に英國陸軍武官ヴィンセント大尉、フレイザー、ブラウン技師であつた。

『其夜、威海衛を去る七十哩の所へ行つた時、無線電信でニュースを一くさり發信したが、其日は格別の種もないので、長文の電信ではなかつた。で私（ジェームス）は居心地の良いサルーンに控へて、六時、電光がタタツ／＼と電報を打つてゐるのに耳を傾けて居ると、威海衛でアサーンが鉛筆を手にし、聽音機を耳にあて、あの小屋の中で受信してゐる姿が目に見えた。彼は此方から電信をうまく受取つてゐるだらうか？ 此電報こそは、有史以來、海戦の動亂地から無線電信で發せられた最初の戦時通信である。間もなくタタツ／＼と云ふ音響は止んだ、發信が終つたのである。先方でうまく受信したらうか？ 三分間の緊張した沈黙が続いた。するとブラウンが底

力ある聲で叫んだ。

「あれはアサーンだ——受信した」

此利那こそ實に偉大なる瞬間であつた。時は私等がロンドン出發後七十四日目、東郷提督が旅順口に最初の攻撃を加へてから三十日目であつた。開戦から一箇月と立たない内に、絶對的に新奇なそして其發達が最も廣汎に互る考案を實地に遂行する爲め、一切の設備を整へて、我等は今その現場に在るのだ。此考案を結實させる爲に、先づ頭の中で發芽させ、夫れから色々な不利な事情を排して、大切に培ひ育て上げねばならなかつたことを想起すれば、一九〇四年三月十四日夜、黄海の眞つたゞ中で聽取つたあの「受信した」と云ふ報告は、實に新聞事業界に於けるタイムスの偉大なる成功として、何人も之を認むるに異存はないであらう。之れまで仕上げる爲に、凡て其衝に當つた自分は、胸の高鳴るやうな満悦の思で、其夜、せゝこましい寢棚の中へ轉げ込んだことを、今でもハッキリ覚えて居る」

翌拂曉、船は徳嶼に到着し、大同江口へと舵を取つた。前方には軍隊を満載した日本運送船がいたので、パッサモリア船長は海門號を之に續いて進行させた。半分道ほど行つた頃、水路を警備してゐた一隻の日本巡洋艦が「止まれ」と信號した。

「此時、丁度少し以前に結氷が溶けて流れ出した流氷に恰も出會はした。右の日本巡洋艦から一

隻のボートを海門號へ送つたが、武装した一隊が乗込んで來た。乗込んだ士官は稍や面喰つたやうな様子だつたから、私(ジェームス)は彼の艦長の許に行つて面會しようと自ら進んで申出た。行つて見ると小柄な親切な艦長は私を迎入れて云ふに、彼の受けて居る命令は、許可を得てゐない船には、一切其處から北方へ進行させてはならぬと云ふことであつた。夫れに對して、私は此船は夫んな種類のものではない。外波が青山列島背後の根據地に居る日本聯合艦隊を訪問する事情がなかつたら、同人と一緒に此船に乗せて來る筈であつたと説明したら、艦長は夫れで満足したらしく、夫れでは進行しても宜しい。併し鎮南浦へ着いたら旗艦扶桑の細谷提督へ報告せねばならぬと云つた」

此許可を得たので船は航行を續け、水道を通過すること若干浬にして、午後三時鎮南浦に達し、其處で錨を下した。其時、恰も黒木軍の主力部隊が上陸の最中で、投錨地は運送船を以て充滿し、幾千と云ふ大部隊を驚く可き敏捷さと手際を以て上陸させて居る所であつた。愚圖々々して居る時間はないので、ヴィンセント大尉を上陸させた。大尉は黒木軍附の觀戰武官となつた。

五 デーリー・メールの冒險記者を欺く

ジェームスがヴィンセントを、とある怪し氣な茶屋へ連れて行くと、其處に目をギョロつかせて

ゐる一人のヨーロッパ人がゐた。夫れは別人ならぬデーリー・メールの従軍記者エフ・エー・マッケンジーであつた。彼は突然ジェームスの頸に飛び付いて來た。彼は兩の目を輝かせながら、ジェームスにこんな冒險談を聞かせた。「唯支那へさへ行つて、檢閲のない電信局を使ふことが出來たら、自分は本當の戦争記事を報道したいことがある。自分は有らゆる制限令を破つて平壤と更に其先きの方へも行つて、日本の前衛部隊とロシアのコサック兵との最初の衝突を實見した。自分は日本憲兵に逮捕されて鎮南浦に護送され、最近便で日本へ向け退去の命令を受けてるのだ。君、僕を連れて行つて呉れないか」と云ふのである。

ジェームスは、夫れでは喜んで仁川まで連れて行つてやらう。其處から君一人で何とかして釜山を経て、日本へ行けば宜いだらうと答へた。

「支那へ連れて行つて呉れまいか」

「いや、夫れは出來ない。第一僕は支那へは行かない。少くとも行くには未だ間がある。第二に僕は通信員は誰に拘らず支那へ連れて行かぬと云ふ約束を、日本に與へてるのだ」

するとマッケンジーの云ふには、
「君は勝手の出來る身分だから、支那へ行かうと思へば自由に行けるではないか。君が若し僕を手傳つて、此「大特種」を打てるやうにして呉れれば將來大に君の爲になることがあるよ」

ジェームスはマッケンジーの爲に、明朝正六時に棧橋の所に發動汽艇を用意して置いてやると約束し、ヴィンセントに別れを告げて、フレイザーと共に本船に歸つた。折柄大同江の潮流は非常に激しく流れてゐたので、動力の弱い汽艇で本船に歸り着くまでには可成り難儀した。彼等が丁度舷門に着いて夫れへ跳び移るが早いか、汽艇を繋いだ綱が切れた。夕暗をすかして最後に此汽艇を見た時は、ドン／＼海の方へ押し流され、運轉士は未だ發動機を動かすことが出來ない模様であつた。若し發動機が動かなければ、あの急流の中で運轉士と汽艇とはどんなになるだらうと、ジェームスは心配でならなかつた。其夜は到頭その汽艇を再び見なかつた。

翌朝六時一寸前、昨夜の汽艇がパツ／＼と白い煙を吐きつゝ海門號に近付いて來るのを見付けた。見るとマッケンジーが乗つて居る。扱ては汽艇は綱が切れて本船と離れてから、運轉士が發動機を動かすことが出來るやうになるまでに、一二哩も押し流されたのだ。そして暗夜の爲め海門號を見出せなかつたので岸の方に行き、其處で朝になつてからマッケンジーが夫れを見出したらしい。彼等が乗ると直ぐ様、海門號は錨を上げ、扶桑艦に敬意を表する爲め、本船の旗を下げて水路を下航した。途中尙ほ數隻の日本運送船を通り越して、十一時三十分港外に出た。船が徳嶼を出ると、ブラウンは昨夜ジェームスが書いて置いたタイムスへの長文の通信電報を打電し始めた。タツ／＼と云ふ音を聞いて、マッケンジーは殆ど氣が氣でないらしく心中少からず悶々の體であつた。

併しジェームス自身とても同様に心配があつた。と云ふのはブラウンが一生懸命で耳を澄まして聽入つて居るに拘らず、海岸の局から『受信した』と云ふ合圖がチツトも聞えない。之は一大事と思つたので、ジェームスは船長の所へ行つて相談した。其結果、若し船の進路を威海衛の方に變更すれば、同夜の十時頃には投錨が出来ることが判つたので、直に進路變更に決定した。併し船が中立國の港へ行くと云ふことをマッケンジーに知らせることは、責任上出来ない。マッケンジーは必死的な決意を抱いて居る男だから、若し威海衛へ着いたことが判つたら、船から海中へ飛び込み、岸まで泳いで行つて、其『大特種』と云ふ奴を、檢閲なしに中立國支那の電信局へ持つて行く位のことはやり兼ねない勢であつたからだ。そこでジェームスは其夜お祭り時のやうな晚餐をやり、マッケンジーを御馳走責めにして、船の行動などには氣が付かぬやうにしてやらうと圖つた。

處がマッケンジーもさる者、仲々その手に乗るやうな新參者ではなかつた。其日の午後、ジェームスが彼と一緒に上甲板を歩いて居ると、マッケンジーは船尾の Kompas の所で突然立止まり、『船は進路を變へたね。チヨツト前までは南へ走つてゐたのだが、今は大分西の方へ行つてゐるやないか』

ジェームスは出来るだけの自信を以て、
『いや、淺瀬を避ける爲め、チヨツト此航路を取らなけりやならんのだ』

と返事はしたものの、考へて見ればあの Kompas のことをスツカリ忘れてゐたのだ。少し許りたつてからマッケンジーはお茶を飲みを下へ降りて行つたので、ジェームスは一等運轉士のマツトンを探し出して、彼に問題を説明した。するとマツトンは一片の Cork を持つて來て隣りに問題を解決したと云ふのは、マッケンジーがお茶を終へて再び船のあちこち見廻つた時には、例の船尾の Kompas は眞南を指して居た。幸にもマッケンジーは日没には氣が付かなかつたので、ジェームス等は無事に難關を切抜けたのである。

其夜、彼等は豪華な晚餐を奮發した。そしてマッケンジーに彼が飲める限りのシヤムペンを勧め夫れでも足らねばカクテルや火酒類を以て盛りつぷした。マッケンジーにして見れば、過去二週間と云ふものは、日本の干海老と砂搗米ばかり食つて生きてゐたのだから、こんな御馳走にあり着いても良い譯であつた。だから海門號での此慰安は、彼に取つては一大快事であつたのだ。彼は床に入る前、二三分間風に當る積りで甲板へ上つて來た時、丁度左舷の方に當つて山東の燈臺の光が見えた。マッケンジーは立ち止つた。

『何だね、あの光は！ 僕は朝鮮海岸の燈臺は、日本人が皆消して居るものと思つてゐたが』
之は難問題であつた。併しジェームスは出来るだけ無雜作に答へた。

『皆消して居るのだが、あの一つだけは残してある。日本軍隊の上陸する間は、運送船の爲にあ

れだけは點燈して置かねばならないのだ。あれは青山列島の危険な島を通過する水路の目標になつてゐるんだよ』

此返事で十分だつた。瞬間の疑は消えた。二三分間してマッケンジーは長らく渴望してゐた綺麗な純白の敷布があると聞いて、早速下へ降りて行つた。ジェームスは彼が寝込んでしまふまで、一時間許りの猶豫を置いて、夫れから豫定の計畫通り彼の船室に外から鍵を掛けた。海門號の短時間の威海衛寄港が過去の一出来事となるまで、デリー・メール紙の戦時大特種の此持主は、前後全く不覺の状態でジェームス等の捕虜になつてしまつたのである。

ブラウンは勿論前以て威海衛のアサーンに彼等の行くことを通知して置いた。海門號が威海衛沖合に投錨したのは、夜の十時であつた。ジェームスはフレイザーに發信電報を持たせて港に送つた。折柄海は大きなうねりでもあり、又汽艇は餘り波浪に堪へるものでもなかつたので、彼に取つて固より愉快的航程ではなかつた。フレイザーは二三分上陸してすぐ引返した。午前一時三十分錨を揚げて船は再び出帆した。

推進機の動き出した音を聞くと、ジェームスはマッケンジーの室へコツソリ降りて行つて、扉の錠前をはづした。彼は扉の鏡板を通して、スツカリ疲れ果てた男の深い寝息を聞き取ることが出来た。

『事情止むことを得ずして、私等が彼に對して取つた其瞞着手段に就いて、マッケンジーが果して薄々ながらも知つてゐたかどうかは判らない。私等は此事に關しては、次の日も決して一言も云はなかつたのである。此書が若し彼の目に入らば、恐らく彼は私等の接待を前とは違つた考へで見ることになるだらう。併しさうは云ふものゝ、戦争は、就中戦事通信は、戀の如く手段を選ばないものだ』

とジェームスは後日その著書中に記して居る。

六 第二回港口閉塞失敗の發見

海門號は三月十七日に投錨地點に達することが出来なかつたので、同夜はボーデガ群島の避難所に假泊した。

『今度の航海中は始終日本戦闘艦隊に屬する數隻の軍艦と連絡を取つてゐたのであるが、然も極度の注意を以て取扱はねばならない情報を澤山持つてゐた。外波は私(ジェームス)の用心深いのを認めて、露國側に多少でも利益のあるやうな情報を葬つてしまふ點に於ては、私は外波自身よりも、モット几帳面だと云ふのであつた。日本海軍が自分に與へて呉れた信頼を、私は決して裏切ることはなかつたと思つてゐる。日本海軍が私等に就いて爲した決定は賢明であつた。何故

と云はば、海門號が彼等自身に取つて有用であることは、其後二三週間の内に、事實上に展開するに至つたからである。

外波は私等と同様に、見られるものは皆見んと甚だ熱心であつた。又彼は日本軍艦や、日本領事館との連絡を取つて、苟も情勢の變化を示す材料を集める機會を決して逸しなかつた。私等は或期間、外波に關する秘密を守つてゐたのだが、本船の最初の頃の航海中に、哨艦から哨兵の一隊が私等の船に乗込んだ時、其隊長の士官は外波が背廣服を着てゐたに拘らず、直に彼を認めて、哨兵等に「氣を付け」と號令したので、其秘密の大部分は失はれてしまつた。處が私の聞知した所では、東京の日本海軍省は我海門號の排斥を叫んでゐる競争者に對して、海門號は權限など與へられてゐるのではない。だから日露の何れかの側に於て、擊沈することを好都合だと認めたら、立所に無鐵砲の罰を受けるにきまつてゐると説明したと云ふことである。そんな事情であつたから、東京には早く私等が行衛不明者として報告されよと、毎日祈つてゐる戦時通信員が約百人もゐたのである。外波は今までに私の仕事や、其遣り方を能く觀取する時間が十分あつたので、彼は私の用心深い點に全然信用を置き、又それを彼の直屬長官等に報告したことを私は知つて居る。

三月二十五日の夜、私等は東郷大將が第二回の港口閉塞を企てた旅順口から短距離の地點にゐ

た。夫れはトテも昂奮的な經驗だつた。翌日私等は日本に對して最も價値ある助力を與へることが出来た。東郷は此最近の閉塞がうまく成功したものと信じてゐた。即ちセメントを満載した四隻の商船が、港口の通路へ沈められたのである。然るに此閉塞が失敗であつたのを海門號は發見したので、即刻無線電信を以て、其旨、日本艦隊に報告した。と云ふのは、同日の午後遅く、露國の戦艦艦隊が旅順口外十哩の沖に遊弋してゐるのを見たからである。

其日は新聞報道上に於ても亦偉大な日であつた。朝の間には前夜の作戦行動と、日本聯合艦隊の洋上に於ける活動振りを報道し、午後には露國の大艦隊が之れまで航行不能と信じられてゐた一主力艦隊さへ最早や修理されて之に加はり、洋上に出動してゐる狀況を報道したのである。「天皇陛下は君の今日の功勞に對して、勳賞をお授けになるだらう」と叫んだ時の外波と云つたら、トテも其昂奮を抑へんとして抑へ切れないやうな有様であつた。

翌日は艦隊間の戦争にうまく出會はずかも知れないと思つたから、其夜は一晚中、洋上に遊弋してゐた。午前二時になると、見張りに當つてゐた二等運轉士のクラブから、船橋へ昇つて來いと知らせて來た。私等の船は旅順口の探海燈の照明区域内に入りつゝあつた。そんな危険な區域へ、燈火も點ぜずに進入するなんて、全く氣味の悪い仕事であつた。測り知れぬ黑暗澹たる闇夜を貫いて、獨り探海燈の弧光が照り渡つて居る。何時如何なる時に、コツソリ忍び寄つた水雷

艇や、隠れた沈設水雷にやられてしまふかも知れない。私等は確實に砲火の危険のない地點まで砲臺に十分近寄り、夫れから私は船長に遇岩附近へ行くやう進路を取れと云つた』翌拂曉、東天漸く白らむ頃、海門號は遇岩附近に着いた。全く明け離れて水平線がハッキリした時、見渡す限り四方の海上、一隻の船影だに見なかつた。然るに間もなく西方に當つて一條の煤煙の立上るのを見た。夫れがやがて追々一列に續いて現はれた。此煤煙の列の中から、隼の如く水雷艇隊が突進し出し、後に續いて戦闘艦隊が疾驅して來るのを見た。威風堂々、戦闘旗を海風に翻へしつゝ、凜然たる東郷大將の戦闘艦隊が進航し來つたのである。すると一隻の通報艇がまつしぐらに疾走し來て大聲で呼び掛けた。外波中佐が之に高聲に報告してゐる間に、艦隊は其まゝ旅順口方面に航進し去つた。東郷艦隊は挑んでマカロフをおびき出さうとしてゐるのである。

海門號は艦隊の戦闘を見んとして、是等巨鯨の跡を懸命に追ふた。併し其日、戦闘は行はれなかつた。日本艦隊は二三時間示威運動をやつて西方へ去つた。海門號は威海衛の碇泊所へ大急ぎで歸航した。

『無線電信の状態は頗る面白くなつてゐた。技師達はデフォーレスト式検波器で、黄海方面の無線電信は残らず聴き取ることが出來た。之は外波に取つて非常に貴重な情報であつた。露國のポポッフ式無線電信は旅順口と何處か私等の附近に在る局——私等は芝罘と推定した——との間で

通信して居り、イタリイ船も亦妨害を試みてゐた。私は此イタリイ船が山海關に居るのか、又は仁川に居るのか判らなかつたが、芝罘の方が確かだと思つたので、外波は芝罘駐在水野領事に此旨報告した。すると夫れから四十八時間もたゝない内に、芝罘の方は沈黙してしまつた。で私は一體誰の咽喉ツ首が締めつけられたんだらうと、聊か好奇心を感じたものだ』

鎮南浦へ行けば日本海軍の人々に會へるし、海門號の爲に最も有利な場所を知らせて呉れるだらうと云ふ外波中佐の言に従つて、三月二十九日の午後八時三十分、海門號は鎮南浦へ向けて出發した。處がパッサモア老船長は運悪く大同江で船を淺瀬へ乗上げてしまつた。偶々日本の警備船が之を見付けて、信號旗を掲げた。『満潮になれば大丈夫浮き揚る。』此信號は果して適中し、そして其日本軍艦は船が満潮になつて浮き揚るまで側に付いて居てやつた。

七 『此美しい小島』

鎮南浦の投錨地に到着したのは、四時三十分であつたが、扶桑艦から時を移さず一隻の哨艇がやつて來た。旗艦の方へ來いと細谷提督からの招待状を齎したのである。ジェームスは外波中佐と共に早速同艦を訪れた。提督より多くの新情報を得、且つ『王侯の如くに歡待された。』翌日歸航の途上、徳嶼を経て遇岩へ向けて進路を取つた。

「其朝、私(ジェームス)は外波と上甲板を歩きながら長話をした。外波の言に依れば、初めの程は海軍當局も私に對して斯程に多大の信用を置くことの、果して賢明な策であるかどうか、多少の疑を抱いて居たのであるが、私等兩人が既に長い間一緒に働き、且つ私が有らゆる報道上、日本海軍の利益を掩護する爲め、如何に慎重な態度を取つたかを、外波自身目撃してゐるので、海軍當局は今では私が大切な盟友であるとして、スツカリ満足してると云ふのであつた。之を聞いて私は甚だ愉快に思つた。併しながら私には海軍の信用は信用として、陸軍の信用は又別物だと云ふことが未だ判つてゐなかつた」

外波中佐は芝罘の水野領事への通信を持つてゐるし、又遇岩附近の遊弋も何等興味を感じる出来事にも會はないので、海門號は芝罘へ向け進路を取つた。四月一日の夜、海門號は芝罘港に入り、ジェームスは直に上陸して、ビーチ・ホテルに入つた。

「外波は水野領事と日本陸軍の森少佐を同伴して來た。森少佐の話では、私等のお蔭で前日旅順口と通信を交換してゐた露國側の無線電信局を發見して、夫れを凹ましてしまつたと云ふことであつた。水野も芝罘駐在露國領事から聞いたと云ふ同僚の話だとて、こんなことを私に知らせて呉れた。夫れは露國側では海門號が交戦海上を出没する爲め、幾分惱まされたが、マア餘り重大視せず置いて、此美しい小島が若し本當に何か露國側に損害を與へるやうなことでもしたら、

立所に捕へることに決定したと云ふ話であつた」

翌朝海門號は威海衛に歸港した。と同時に東京のプリンクリーから、從軍記者等の一行は、四月六日門司を出發して仁川に向ふ筈であるとの電報が來た。夫れではフレージャーを送り届けるには、まだ十分餘裕があるとジェームスは思つた。

四月三日午後六時、海門號は交戦國の艦隊と最も接觸し易い邊を巡航する心算で出港した。最初は南東に進路を取り、夫れから翌未明の頃には、圓島附近に達するやうな方向を取つた。此圓島と云ふのは遇岩と同じく、黄海中に浮いて居る瘤のやうな島で、遇岩から僅か二三哩の所に在る。ジェームスと外波中佐は是等の二孤島の中何れかど、旅順攻撃の爲の艦隊集合地點であることを知つてゐた。併し拂曉の頃彼等は空圖を引いたことが判つた。綺麗に晴れ渡つた水平線上、何處にも燦火の煙程のものも見えない。圓島あたりにウロ／＼してゐては何にもならないから、海門號は半速力で青山列島の方へ南東に進路を向けた。日本の無線電信の極く近くに在るのを聴き取ることが出來たが、一隻の船影さへ見えない。朝鮮の一角を認めたので、再び船を廻し、尙ほ半速力で四月六日夜明け頃、圓島に歸着するやうに航路を取つた。

彼等は未だ運が善くなかつた。と云ふのは、六時半に圓島に達したけれど、一碧拭ふが如く明けはなれた眼界には、物の影一つ見えなかつた。で全速力を出して遇岩へ航走した。が其處にも亦何者

もぬない。そこで船を廻はして再び圓島に歸り、朦朧たる旅順口の哨丘を望みつゝ南西に向つた。海門號は、帽子島の方へブラ／＼と徐航した。恰も大風だったので、ジェームスはパッサモア船長に今夜は此處で投錨しようと言つた。其處は旅順口から二十七哩の地點であるから、其夜もし豫期された港口閉塞が決行されば、砲聲に依つて知り得る短距離である。がパッサモア船長の神経は可成り鎮靜を缺いてゐるらしく、此提議にはひどく反對であつて、殊にカフーンとジェームスが沈設水雷のことを考へて、何時でも應急救助の出来るやう、ボートは全部廻はして置いて貰ひ度いと云つたので、尙ほ更ら氣を揉んだらしい。夫れでは燈火を消して投錨すると船長が云ふから、ジェームスは之に異議を差挟んだ。

『船の燈火を見せないのは、自ら危険を招くやうなものだ。若し交戦者のどつちかの偵察艦でもヒョッコリ来て、旅順口から僅か三十哩以内の此場所に、船燈もつけずに投錨してゐる船を見付けたら、有無を云はさず其場で敵艦同様にあしらふだらう。封鎖は未だ宣言されて居らず、又私等は公認の通商航路にゐるのだ。我等の船燈こそ何の後暗いことのない保證である』

と斯うジェームスは主張したのである。遂に老人を説き伏せたが、彼は重々し氣に首を振つて、そして例の大事なく、颯風晴雨計の水銀に見入りながら、僅に自ら慰めてゐた。

ジェームスとカフーンは、其夜旅順口の燈臺が空中に廻轉照明をやつて居るのを眺めながら、長

い間甲板で腰掛けてゐたが、併し彼等を喜ばせるやうな銃砲の閃火や、唸りはチツトも起つて來なかつた。

八 露艦バーヤンに停船臨檢さる

翌朝五時、海門號は錨を揚げ、船長は例の古巢たる遇岩へ向けて再び進路を取つた。處が此三日目に至つて、海門號に取つて一大事變が突發した。

彼等は遇岩を通過し、午前九時頃丁度圓島の眞横に達した時、暗黒の大連灣を背景として、一隻の大きな巡洋艦が突如として現はれたのを發見した。海門號は進路を變更しなかつた。巡洋艦は彼等の方へズ／＼進み寄つて來た。間もなく夫れが露國の巡洋艦バーヤンであることが判つた。バーヤンは大將旗を翻へして居た。恐らく露國艦隊司令長官が最快走の巡洋艦に坐乗して、附近の偵察をやつてゐたものであらう。で海門號は國旗を掲揚したが、露艦は約一哩これと竝行して走つた。ジェームスは之は多分停船を命じて船内に乗込んで來るものと思つたので、手早く次の無線電信をフレーザーに送つた。

『旅順口沖、一九〇四年四月六日午前九時、我が船内に露艦から乗込んで來さうなり。三時間内に我等から音信なければ、長官、高級海軍將校及びタイムス社へ報ぜよ』

此無線電信は果然露艦をして行動を取るに決定させたらしく、露艦は急回轉して大速力で迫つて來た。ジェームスは船橋に昇つた。パッサモア船長は恰も最後のラツパと最後の審判日を待つてゐるかのやうに、木石の如く無感覺の状態で突立つてゐた。

「奴等は此船へ乗込まうとして居るな」

ジェームスがさう解釋すると、

「それは貴方の關係したことだ。私の知つたことではない」

と船長は云つたが、彼がさう云つてゐる間に、バーヤンの舳から非常に物凄い黄色な火煙が突然飛び出すや否や、一弾がブーンと唸つて海門號の船首を横切つた。

「船を停めろ！」

とジェームスはパッサモアに云つた。

船長が機關室に命令を通ずると、海門號は直に停船した。

さあジェームスは眞剣に考へねばならなかつた。時間は餘りない。船橋から梯子段を滑り降りながら、彼の腦裡に浮んだのは、前日露國人等の云つた『美しい小鳥』も愈々擱つたなと云ふことであつた。併し彼の最も心配なのは外波中佐であつた。彼は中佐を其船室で見付けた。

外波中佐は其携帯してゐた日本海軍の暗號帖をジェームスに渡した。

「君、之を預つて呉れ。そして僕等がうまくのがれたら戻して呉れ給へ。うまく行かなかつたら破いて捨て、呉れ！」

ジェームスは其包を受取つた。

「外波、君はどうする積りだ？」

「そいつは大分むづかしいね。僕は、あの船へ連れて行かれちやいかん。あれはバーヤンだ。あの艦長は僕を見覚えてゐる。僕等は巴里で一緒だつた。大變困つたことになつたなあ。僕は何處かへ隠れよう。それで若し見付かつたら、僕は日本將校だ。爲す可きことは知つて居る」

外波中佐はそれ切り何も云はなかつた。併しジェームスは彼の意味を十分知つてゐた。彼は生捕にされる考へはない。又もし露國人等が此船で切腹した日本人を發見し、そして其死骸が日本海軍將校であると認めたら、ジェームス自身と彼の船がどんなことになるかも、亦能く知つてゐた。

海門號の乗組員中に四人の馬來人の舵手がゐたことは、ズツと前に一言した。其時、彼等の中の一人が前を通りかゝつた。ジェームスは其男と夫れから外波中佐を見比べた。人相上二人の間には大した相違がない。で二分たゝない内に、中佐は馬來人の舵手に成り澄まして、船橋の舵機を預つてゐた。

バーヤンは既に海門號から六百呎許りの所に迫つた。ジェームスは甲板に上ると、此方に向けられ

た巨砲の怖ろしい砲口を覗いたのである。ボートは最早や半分道も海門號の方に進み寄つてゐた。ジェームスは一等運轉士マットンに舷梯を卸ろせと命じ、カフーンには臨検士官を迎へて、眞直ぐに船橋の自分の居る所に案内して來いと申付けた。夫れから彼は船長に、云ふ可きことは皆自分が云ふ積りだと云つて聞かせた。

二人の露國士官が乗込んで來た。彼等は如何にも緊張し、又如何にも不安な顔付をしてゐた。

上役の方の臨検士官は船舶書類の提出を命じ、是等をザツと一瞥した後、ジェームスの方に向き直つて、ジェームス等が何者であるかと説明を求めた。で彼は一通り説明した。次に士官は無線電信は何處だと聞くので、早速彼を案内した處、彼は電報を見せると云ひ出した。併しジェームスはこんな場合に應ずる爲め、豫て用意して置いた一束の電報を持つてゐた。是等は勿論どんな露國士官でも言ひ掛りを付けるやうな内容のものではなかつたのであるから、臨検士官はチョツト夫れに目を觸れたが、果して何の意味をも爲さぬと見たので、今度は『君が半時間許りに打つた電文を見たいのだ』と云ふから、ジェームスは側に立つてゐたブラウンにあれを出して呉れと頼んだ。ブラウンが其紙片を持つて來ると、ジェームスは夫れをフランス語に譯し始めた。士官は『私は英語は讀めるが、流暢には話せない』と云ひながら、ジェームスから其紙片を取つた。彼が一字々々ユツクリ讀んでゐる内に、素晴らしい頓智が咄嗟にジェームスの頭に浮んだ。彼は其露國士官の腕に親

し氣に手を掛けて斯う云つた。

『私は中立國の新聞記者だ。だからこんなことを君に話す権利はないのだが、タツタ二時間許りに、帽子島附近で四隻の日本巡洋艦を見た。私は君等がチツトの間でも私にかゝはつてゐた爲に、どうか彼等をして君等の船を遮斷させ度くない。殊に君等の船には大將が乗つてゐるぢやないか』

ジェームスは此若い海軍士官が急に顔を顰めるのを見失はなかつた。彼は忽ち此餌に引つ掛つて早速甲板に出た。彼は臨検隊の一人を呼び、大急ぎで本艦へ送る信號報告を口授した。妙薬はうまく利いたのである。此報告が巡洋艦の艦橋の方に通じると、直ぐ先方からメガフォーンで大聲に何か命令をした。すると臨検隊は海門號が恰も疫病船でもあるかのやうに、大あわてにあわて、放棄して行つてしまつた。挨拶もそこ／＼にして士官と水兵等はボートの中へ轉ぶやうに飛び乗り、水兵等が懸命に漕ぎ出すと、露艦の艦橋にゐた性急な連中は、メガフォーンで『モツト早く／＼』と叫び續けた。併し斯うなるとジェームスの胸中に一番怖れたのは、彼等が海門號から一旦離れた上、船を撃沈しようとするのではないかと云ふことであつた。で露艦が動き出して、あの薄氣味の悪い砲口が、海門號の方から、横の方へグルリと廻はされたのを見た時、ジェームスは初めてホツとした。彼は船長に敬禮旗を揚げると云つてやつた。彼等は禮儀位は盡してもよかつたのだ。危機一髪

の所で助かつたのだから。

ジェームスが、先に午前九時に送つた死物狂ひの無線電信を受けてからのフレイザーの心理状態は、想像に難くない。又その無線電信の中に云つた三時間以内に、彼等が難を免れて、威海衛の方へ歸航中であるとの報告に接した時の彼の安堵も、亦想像し得られる。

外波中佐の安心したことに至つては、又非常なものであつた。彼等が旅順口の影へ疾風の勢ひで歸航して行くバーヤンを見つめてゐる時、中佐は昂奮的にジェームスの手を握つて『君は實にうまいなあ』と云つた。『君の國が若し今後大戦争でもやる時には、君に非常に高い指揮權を與へなければなるまい！』

バーヤンの掲揚してゐたのは實にマカロフ大將の旗であつた。彼れ露國司令長官が此出來事に關して深思熟考した結果は何であつたか、夫れから兩三日にしてジェームスに判るのである。

海門號は午後五時、威海衛に投錨した。パッサモア船長は無限の安堵の内に『錨を下ろせ』と命じた。と云ふのは、最近二三時間の間、彼の晴雨計は颱風襲來を豫示してゐたからである。

九 秘密の情報を得て旅順口外へ急航

斯る間に、ジェームスは海門號の備船期限延長に關して考をきめねばならぬ時が來た。そしてモ

ーバリー・ベルは期限延長の決定方を彼に一任してゐたのであるが、當時旅順口から得た情報に據ると、露國巡洋艦レトウィザンとザレウイッチとは實際に再び航海し得るやうになつたとのことである。之はマカロフ提督が今や日本よりも少し優勢な戦闘艦隊を隨意に行使し得ると云ふことと、又どう見ても近く艦隊戦闘が行はれると云ふ見込みがあることを意味するのである。此來らんとする艦隊戦闘の見物こそ、彼が海門號利用の最大眼目であつたのだ。彼の報道機關の現在の能率と、又今もし海門號を解備してしまへば、同船はタイムスの競争新聞の爲に取られるかも知れぬと云ふモーバリー・ベルの心配とは、ジェームスをして斷然決意させた。即ち彼は香港の船會社に打電して、更に三箇月間備船期限を延長することにした。夫れは可なり重大な責任問題であつた。と云ふのは、又改めて六千磅の負擔になるからである。併しトラファルガー以來初めての大海戦を報道し得る機會と思へば、彼の決定は正に當然のことであると考へたのである。

パッサモア船長の晴雨計は彼を欺かなかつた。其豫示した颱風は四月七日に威海衛を襲ふたのである。夫れは凄まじく狂ひ吹き捲く暴風雨で、三日の間は海門號の出港も、黃海に於ける海戦も固より問題にはならなかつた。天候の稍や回復するのを待つて、九日を以て出港した。翌朝の午前十時、仁川に投錨し、黒木第一軍に従軍するフレイザーを平壤へ送り届ける爲に、更に翌十一日朝、鎮南浦へ向け將に抜錨せんとした。其時、突然日本警備艦大島の入港し來るのを見た。仍つて海門

號は外波中佐が同艦に行つて指圖を受けるまで出帆を延期した。一時間許りして、中佐が歸つて來て祕密にジェームスに話す所に據れば、若し天候が今の調子で都合好くなつたら、日本側では旅順口外に二箇所の沈設水雷區域を設ける筈であるとのことであつた。

海門號は翌朝五時三十分、申分のない天氣に大同江の入口に當る徳嶼に到着した。船長の言を聞くに、午前三時、日本艦隊の或部分が緩慢な速力で航行してゐるのを通り過したと云ふ。外波中佐とジェームスとは夫れが何事を指示するものであるかを知つてゐた。

『鎮南浦に到着すると直ぐ、外波と私（ジェームス）とは扶桑艦へ行つた。細谷提督は至極愛想好く、そして海軍作戦上、私等が日本に役立つたと云つて、私を譽めそやすのであつた。彼は又外波に告げて、多分正午頃には私等に呉れる情報があらうから、短時間の通知で再び出帆出来るやう用意して置けと云ふので、私は海門號へ歸つて、船長に、正午を過ぎたら何時でも出られるやう機軸を焚いて置けと命じた。夫れから私は上陸して、陸軍の從軍通信員として私の資格證を携帶してゐるスタンダード紙のマックスウエルを尋ね廻はつた。其資格證は私が外波と相談の上、フレイザーに渡す筈であつたのである。私は舊友マックスウエルが通信員の一行と共に、前日私等がヴィンセント大尉を置いて來た所と同じ茶屋にゐたのを見出した。マックスウエルが喜んで私を迎へて呉れたとは云へない。實際の所、彼は非常に私をいやがつてゐた。そして彼は私と私

の船とは到底競争が出来ない。何故かと云へば、彼が備船の許可を申込むと、素氣なく撥ね付けられてしまつたからだと云つた』

歸途ジェームスは彼を探してゐる外波中佐に出會つた。中佐はタツタ今受取つた情報より判じて即刻出港することが絶對的に必要だと云つて、大分騒いでゐる所であつた。そこでジェームスは乗船すると直ぐに船長に半時間内に出港するのだと申渡した。船長は海圖室にゐたが、海圖の上へ身をこゞめながら、大同江の燈臺には點燈してないからもう遅い、今夜は其中途で投錨せねばなるまいと云ふので、ジェームスは外波中佐の所へ行つて相談した。中佐は是非とも其夜の内に外海へ出なければならぬ。猪島の北に近道があるから、江を下航する必要はないと教へた。けれども船長は淺瀬をスツカリ乗り越すまでにはもう遅くなつてしまふから、水先案内なしには船をやりたくないといふのであつた。併し實際、機關長が十分に蒸氣を起せば、大同江の急潮流に乗つて、殆ど二十節を出すことが出来るのだから、まだ明るい内に乗り越してしまへると思つたので、ジェームスは機軸の給炭を倍に増せば、誰でも一人残らず褒美をやると云つて見た。すると老パッサモアは急に元氣を出し始めて、口の中では誰が船に責任があるのだと云ふやうなことをブツ／＼つぶやきながら、行けと云へば直ぐにやつて見ると答へた。

次に起つた面倒はフレイザーのことであつた。フレイザーの出立振りと言つたら、夫れはとても

悠々緩々たるものであつた。それでジェームスは彼に君の小馬は今陸揚げされてゐるから、君は約五分間の内に船を出てしまはねばいけないと云ふと、フレージャーは大分氣短かにジェームスに喰つて掛つた。ジェームスは乃ち夫れに相應しい調子で、

「フレージャー、君の小馬が出ると、其瞬間に僕等は錨を揚げるぞ、若し僕が出帆するのに、君がまだ船に残つてゐるなら、君のタイムスに對する勤は之れ限りだぞ！」

此際ジェームスは手きびしくやらざるを得なかつたのである。分秒と雖も彼には大切な時間であつたのだ。併し彼は一見如何にも無理な命令をして、フレージャーを追ひ立てなければならぬ理由を洩らしてはならぬ義務があつた。それで頗る不氣嫌になつてゐるフレージャーに手傳つて、彼の荷物は何でもやたらに放り出し、そして袂別の挨拶をも待たずに、小馬の後から彼を舳舟の中へ押し下ろした。

錨は揚げられた。海門號はフレージャーの舳舟が錨を解かない内に、もう走つてゐた。夫れは太陽との競争であつた。機關部員等も其氣になつて懸命に働いたので、大同江の潮流に乗つて矢の如く快速に走つた。船は可成り震動したが、ジェームスはカフィンと外波中佐と共に船橋に昇つて船長を激勵した。船の前方に最後の最大の危険な通路が見えた頃には、既に黄昏であつた。夜暗は迫つた。パッスモーアの氣力はもうフラ／＼になつてゐて、動もすれば其手を機關室の通報器の方へや

らうとして、ムヅ／＼してゐた。

「今停めてはいけない。停めるにはもう來過ぎて居る。しつかりしろ！」

とカフィンが叫んだ。船は疾走して、邊り一面白銀の飛沫が散る。今こそやる時だ。ハツと思ふ間に暗黒の夜は來た。到頭やつてのけたのだ。四面暗澹たる闇夜で、前方は唯だ滿々たる大海であつた。ジェームスはパッスモーアの方へ振り向いて、彼の手をグツと握つた。羅針臺の光で、彼の帽子の底の下に大きな玉のやうな汗が數珠繋ぎに滲み出てゐるのを見た。機關室への通報器が鳴ると、船は經濟速力となつて、船長は彼等の古巢なる圓島に向け進路を取つた。ジェームス等は船橋から降りて來ながら、もう少しの處で海上保險會社がやられる所だつたと思つた。否な彼等自身も亦やられる所だつたのである。

翌朝四時、當直の船員がジェームスの室に來て、前方に若干隻の戦闘艦が見えると知らせた。船橋へ行くと右舷の方に當つて、單縦陣をした六隻の戦闘艦の黑影が朦朧と現はれて居る。是等の戦闘艦は消燈して、海門號と殆ど同じ速力で航進してゐた。

十 露艦ヘトロポウロウスク沈没とマカロフ大將の戦死

陽光麗かに曉雲を拂ふと共に、海門號は驚く可き壯觀の眞ん中に立つてゐたのが判つた。即ち彼

等は日本戦闘艦隊の中央にゐたのだ。右舷の方には三笠を先頭として、六隻の戦闘艦、更に約六裡先きには日進、春日を先驅とした單縦陣形の第一巡洋艦隊が居り、側面には若干の驅逐艦隊がゐた。此全艦隊は海門號と同じ方向を取つて微速力で航走してゐた。二時間許り彼等は此様にして進んだ。すると俄に日進と春日とは戦闘艦隊に合す可く信號命令を受けた。此運動が完了すると直ぐさま、艦隊は全速力を以て旅順口の方向へ疾走し去つた。

海門號は其能力の許す限りの最大速度を出して、艦隊の跡を追ふたのであるが、軍艦に比べて其航走力の遅々たること、彼等にとつては實にジレツたい程であつた。海門號が出来る限り速力を出して跡を追ふてゐる間に、技師ブラウンが露國側らしく思はれる躁狂的な無線電信を接受した。其電信の末尾に露艦バーヤンの名あることだけは判つたが、其他の文句は一切チンプンカンブンだつた。ブラウンは判断して此無線電信は旅順口の陸上電信局のものではないと云つた。ジェームスはマカロフ艦隊亦洋上に在りと即時に断定した。斯う信じたからは石炭代はいくら掛つても構はんから最善を盡して海門號を走らせると、彼は機關長を鼓舞激勵した。

旅順口の前面に於て何事が起つてゐたかに就いて、今茲に正しい實景を記さねばなるまい。外波中佐が先にジェームスに内密に話した所に違はず、四月十二日に一隻の機雷沈設船が驅逐艦二隊と劣勢な一巡洋艦隊の掩護の下に海州を出發した。海門號が仁川から徳嶼への航行中、通り越したの

は即ち是等の軍艦であつたのだ。彼等は航行の時間を計つて、夜半頃旅順口沖合に到着するやうにし、其間に東郷大將は麾下の戦闘艦隊と第一巡洋艦隊を隨へて、十三日拂曉圓島に到着す可く航進した。同艦隊が其處に到着した時、海門號は初めて彼等を發見したのである。而して日本艦隊の豫定の計畫は、先づ右の機雷沈設船が旅順口前面の海上に機雷を沈設する。夫れから明け方になつて、劣勢な掩護船隊が海軍砲臺に對して無謀な冒險をやらない程度で、出来るだけ要塞の方へ進んで行く。するとマカロフは夫れに引掛つて此劣勢な日本側の攻勢を片付ける可く、彼の艦隊を率ゐて出て来るであらう。露國艦隊の出て来るのを見たら、敵が日本艦隊の中斷を試みんとして、追撃して来るやうに彼等を誘引する進路を取ることにする。之が露艦隊を機雷海面近くに引張り込む計略だ。若し此機雷海面をばづれて、尙ほ追撃して來たら、其處に待ち構へて居る東郷艦隊は、其主力を以て戦闘を開始しようと云ふのである。

露國艦隊は果して追撃に出て來た。そして日本巡洋艦を中斷しようと努力してゐる内に機雷海面をばづれた。日本巡洋艦隊の司令官は、もう十分に露國艦隊をおびき寄せたと思つて、其旨、無線電信で三笠の東郷大將に通報した。而して海門號に居るジェームス等は此通報の結果を實見した。日本戦闘艦隊は全速力で前方へ迫つて來たのである。

併しながらベトロポウロウスク艦上のマカロフ提督も、亦東郷提督と同じく此無電を捉へたので

あつた。彼が此暗號無電を解讀し得たものかどうか、又彼が單に怪しいなと感じただけであつたかどうか、固より知る由もないが、然も此無電の發せられると直ぐ、彼は追撃を中止して、俄に旅順口へ踵を返したのである。

海門號上のジェームス等の眼前に旅順口が展開した時、敵味方の兩艦隊をハッキリ見分けることが出来た。其時、露國艦隊は港口目掛けて一散に航走してゐる所であつた。すると突如として前方の露國艦列が亂れたと思ふと、後續の諸艦の艦首から、閃々たる火光が閃めいた。望遠鏡を持つてゐたカフーンは、流石に慣れたもので、

「奴等は機雷區域の中に入り込んだ。機雷を爆發させようとして海中へ發砲してゐる！」と云つたが、彼は續いて、

「アツ、先頭の露艦が顛覆してゐる！」と叫んだ。

海門號は十哩の距離に在つた。其時、全く無風状態で、眼界は完全に明瞭であつた。程なく大きな波紋が這ふやうに海門號の方へ押して來た。カフーンはジェームスの腕をムツと掴んで、そして其波紋を指さしながら云つた。

「君、あれが見えるか？ あれは大きな軍艦が沈んだのだ。あれが其波なのだ！」

ペトロボウロウスクの沈没に依つて起つた波の爲に、海門號は實際聊か傾斜したのである。

健氣なマカロフは此艦と共に沈んだ。そして露國海軍の希望も、彼と共に此遼遠の海底に消え失せたのである。

殘餘の露國艦隊が逃げ終はせたことは、海門號の彼等にハッキリ判つた。併し東郷大將は其威風堂々たる戰艦隊を單縦陣に構へ、戰艦旗を翻へしつゝ尙ほ其まゝ立ち留つてゐた。キツカリ午前九時に旅順要塞の第一砲臺は火蓋を切つた。ジェームスは此機會を逸せず、短い報道を威海衛へ無線電信で送つた。彼自ら記して曰く、

「私は敢て斷定する。之れこそ新聞の歴史あつて以來、戰艦開始後一分間以内に、戰場から直接新聞社へ報道の送られた最初のことである。噫、夫れも私等の場合には又最後のことであつた。そして斯う云ふ機會は決して又と再び與へられぬであらうと、推定しても宜いかも知れない。

戰艦の開始された時、私等は旅順口沖合十哩の所にゐた。然も地球の反對側に在るロンドンのプリンティングハウス・スクエアのタイムス社への連絡は完全であつた。誰でも否定する者は否定して見るがよいが、實際それは新聞記者として大成功であり、又完全なる報道であつたのである。

四月十三日の事件は、海門號の眞の能力の最高潮に發揮された時と云はねばならない。又この

事件の證明する如く、私の新聞記者の全生涯に於ける最大成功の日であつた。若し夫れマカロフ提督にして勇氣を奮ひ起し、旅順口の逃げ穴へ逃げ歸るやうなことをしなかつたなら、私等は艦隊戦闘の現場を實見したであらうし、又マカロフは今日尙ほ生存し、更に或は戦に勝つて、世界の全歴史を一變することすら出来たかも知れないのに、彼は遂に奮起せず、随つて艦隊戦闘も行はれなかつたのである。併し夫れは非常に興味のある海戦であつた。影響の及ぶ所、頗る廣大な海戦であつた。

私は東郷提督が之に依つて十分に露國艦隊の戦闘力を奪ひ、近き將來に侮り難い出撃を試むるが如き機會を失はしめたと云ふ結論に達したと思ふ。そして之と同時に彼は自分の目的の爲に、私等の海門號から受ける利益は、最早や取るに足らないほど減縮してしまひ、又是等の利益などは、彼の艦隊が戦略的行動を取つてゐる場合に、戦闘区域内へ海門號のやうな汽船が現はれると云ふ不利益と比較して、差し引き損になることゝ考へたらしい。私は其後自分の行動に對して加へられた制限に照らして、斯く判断するのである』

扱て東郷艦隊は長距離射撃を交へた後、其處を引き揚げて東南に向つて去つた。日本艦隊が偽りの針路を取つてゐることは明であつたので、海門號は同艦隊を水平線の餘程向うの方まで行かせて置いて、夫れから徳嶼への航路を取つた。翌朝六時に徳嶼を一巡し、同十時に鎮南浦に投錨した。

ジェームスと外波中佐は直に扶桑艦上の司令官の所へ行つて、彼等の實見談を聞かせて喜ばした。

『其夕刻、私（ジェームス）等が碇泊してゐる間に、ブラウンは露國側の無線電信を接受したので、私等は夫れを扶桑艦に傳達した。細谷司令官の幕僚は其暗號を解讀することが出来た。夫れはペトロポロウスクの沈没と、其結果マカロフ提督の死んだことを報告したものであつた。私等は勿論一隻の戦闘艦が沈められたのは知つてゐたけれど、其艦と共に露國艦隊司令官が海底の藻屑と消えたこと云ふことは初耳であつた。四月十六日、司令官は間もなく私等に呉れる情報があらうから、極く近くに投錨してゐると信號で知らせて呉れた。私等は翌日まで旗艦と一緒に碇泊し、此間、小柄で快活な司令官を相手に時を過ごしたが、彼は自分達が一緒に愉快な時を送つた其記念として、美しい赤い満洲狐の毛皮を私に呉れた』

十一 露國極東太守の布告と日本政府の制限令

扶桑艦の親切な友人達に別を告げて、海門號は十七日午後三時十五分拔錨した。同六時威海衛のアサーンと接觸を取り、威海衛でジェームス等の爲に留め置いてあつた電信を續々接受した。然るに其中には愉快な便りは一つもなかつた。五通は同じ意味のものであつたが、是等の電報はロンドンのタイムス社、威海衛の英國艦隊長官、東京の英國公使、北京の英國公使及び東京のプリンクリ

一から別々に來たのであつて、其電文に據ると、露國政府は凡ての中立國に通牒を發して、今後露國は中立國船舶が新聞通信員及び無線電信機を搭載して、旅順口附近に出沒するを許さず、而して同政府は斯る通信員を間諜と認め、其船舶は戰時捕獲物として處分す可き旨通告したることであつた。該通牒の原文と云ふのは次の通りである。

『露國皇帝の極東太守は次の如き宣言を爲すに至れり。

中立國船舶にして遼東半島の沿岸、又は露國海軍の行動範圍内に於て發見せられたる場合、該船内に未だ諸條約中に於て豫示せられ居らざる機械を使用して、敵に情報を通ずる新聞通信員を乗すものは、該通信員を間諜と認め、其機械を搭載する船舶は之を拿捕し、戰時捕獲物として抑留せらる可し』

然るに斯くの如き装置を施して居た船は、當時固より海門號だけであり、又その船に乗込んでゐた通信員と云ふのも、タイムスのジェームス一人より外にはなかつたのであるから、此攻撃の矢的が誰であるかは問ふまでもない。マカロフ提督が前日海門號とバーヤンの邂逅後、直に此判断を下すに至つたことは、此宣言の日付が四月十五日であるのを見て分明であつた。

四月十八日午前八時、海門號は威海衛に投錨した。海門號が威海衛へ無事歸つたのを見て、友人達はスツカリ安心した様子であつたと云ふのは、アサーンは模範的な技師であつて、情報の一言た

りとも他人に洩らさなかつた爲め、多くの人々はジェームス等が露艦にテツキリやられてしまつたものと思ひ、又露國側が先づ最初に海門號を片付けて置いて、然る後に中立國政府へ前掲の通告を發したものと、斯う信じてゐたのである。

其夕刻天津から上海行の汽船でモリソン(タイムスの北京駐在通信員)が到着して海門號に來た。

ジェームスは次の日の拂曉、長崎へ向け出航する旨、船に命令を下した。

四月二十一日の朝九時頃、海門號は長崎港内の浮標に繫留した。少々機械を修繕する必要があつたので、一晝夜、火を引いて置かねばならなかつた。

『シュツ〜と蒸氣の抜けて行く音を聞いて、私(ジェームス)は何となく背中に冷水を浴びせられたやうに思つた。こんな氣の立つた時であつたに拘らず、私は自分の力を失ひつゝあるやうに感じた。夫れは或は將に來らんとする失望と困難の豫報であつたかも知れない。私は此騒々しい蒸氣の抜ける音が、洋上に於ける自分の活動に對する弔鐘のやうに考へられて、どうしても之を念頭から追ひ拂つてしまふことが出来なかつた。が、さう思つたのは間違ひではなかつた。夫れは後に述べる通りだ。

厭やな報知ほど早く知れ渡るものはない。入港してから一時間もたない内に、色々の知らせが雪崩のやうに續々來した。第一の知らせは外波からで、彼は訪問先きの日本軍艦から、ピツ

クリするほど早く歸つて來た。彼は軍艦で彼に宛てた次の文面の電報を受取つたのである。
「陸軍參謀本部は追つて通知するまで、海門號が仁川、芝罘線以北に航行す可からざることを命ず」

續いてプリンクラーからも同じ意味の電報が來て、夫れから私が此意味を咀嚼してゐる間に、小舟が長崎の英國領事から亦同様の通知書を齎した。

地圖を一見すれば、私の從軍許可の期限の餘日が、自分の新聞報道の見地から見て、如何に無用なものか明白である。私は前記の通知書を持つて自分の室に閉ぢ籠り、此思ひも掛けなかつた命令の意味合ひを篤と考へて見た。すると本能的に其意味が判つた。私が結局虻蜂取らずになつたことが火を見るよりも明らかであつた。一方には海軍當局、一方には陸軍參謀本部がある。日本は私に右の手で與へたものを、今や左の手で奪ひ取らうと云ふのである。私は一命をも投げ出して其一方の目的を手傳つた。他の一方に取つては私は何の役にも立たず、否な恐らくは邪魔者である。此禁止令に依つて、日本が將に遼東半島を孤立させる爲め、陸軍を上陸させる所だと云ふことが判つたのである。

私は勿論何の不服を申立てる理由はない。若し日本の陸軍當局が其陸軍作戰上、私を危険だと認めたら、夫れを遂行するに當つて、一外人記者の便宜などにかゝはつては居られないのであ

る。併し私に厭やに不愉快な感を起させたことは、一體私は自分自身の機械を以て、彼等の利益になるやうに今まで努めて來てゐるのだ。夫れが爲に日本側に取つて今後の作戰上不利を來すかも知れないと思つたやうな事柄は、敢て外波に許可を求めるまでもなく、凡てタイムス社には秘密にして送つてなかつたのだ。實際の所、外波は私の電報と海軍側の公報とを比べて見て、此點に就いては私の方が東郷大將よりも、モット用心深いと屢々評してゐた程である。

そこで、私は此問題を外交的に日本政府に訴へて解決しようと欲した。

私には自分とタイムスの此薄幸なる船とが、日本の海軍當局と陸軍參謀本部との争の元となつたものと思つたから、外波を東京に遣れば、彼は問題の真相を見定めることも出来るだらうし、又海軍省高官の友人等の助力をも得て、仲裁策を案出することが出来るだらうと考へ、彼を東京に送ることにした。彼の考へでは夫れは出来るだらうし、又兎に角彼は親しく事情を知つてゐるのだから、全然根も葉もない不信の噂などは、論駁してしまふことが出来ると思ふのであつた。

斯う云つては陳腐の嫌ひはあるが、東洋人はどんな場合でも、時間の考へなどは伸縮自在なものである。日本では殊更らさうだ。何故と云ふに、一日本人をマア午後の八時に晚餐に招待でもしたら、彼は恐らく約束の日の明け方に、もう君の家の玄關に來てゐるだらう。

處が二日と云つた外波はもう十日も東京に留つて居る。海門號の役に立つ十日の貴重な時日が

失はれたのだ。彼が漸く歸つて來た時、彼は解禁に就いては差し當つての見越すら付いてなかつた。併し彼は私等の難問題の原因に關して、私の疑つてゐたことが事實であつたことを認め、尙ほ齋藤中將から、陸軍の獨裁者等の抑壓の手が緩められるまで、私がジツと辛抱してゐれば、中將は私が威海衛へ歸航した時分、恐らく何とか助力することが出来るだらうと云ふ意味の手紙を持つて來た。更に中將は、露國側では第二の出港準備をしてゐるやうな氣配を示してゐないから、私は艦隊戦闘を見る機會を失ふものでないことを、私に知せて呉れた。其艦隊戦闘こそ、私の海上に於ける重大な希望であつたことは、中將も能く知つてゐたのである。

夫れまでに私はモット諦めが良くなつてゐた。夫れはモーバリー・ベルは日本當局に逆らふなと云ふ一事を、頻々訓令して寄越してゐたし、又露國側が前掲の宣言に關して、何國かの外交的抗議に動かされて發したと思はれる寛大な聲明にも因つたことであるが、其聲明と云ふのは露國側では私と私の船とを戦時俘虜及び捕獲船として抑留することはあるが、間諜に對する極刑を私に加へるやうな意思はないと云ふ意味のものであつた。

齋藤中將から内密に送られた情報に依つて、私は黃海の自分の根據地に歸ることに決した。威海衛への航程は溫度こそ降りつゝあつたが、天氣は晴朗であつた。アサーンとは百九十五哩の海上で接觸を保つた。私は海軍の狀勢動くを見て取る理由があつたから、船は夜間遠く陸を離れた

航路を取り、例の古巢(圓島)附近に達するやう廻り道を行つた。處が其夜は凶變の夜であつた。日本海軍では露國側の機雷で初瀬を失ひ、更に深更に及んで八島を失つたと云ふ悲惨な夜であつた。新聞記者としての私に取つても亦悲惨であつた。と云ふのは、私は是等日本海軍の損失をタイムスへ報道することが出来ず、こんな事件は全く起りもしなかつたと云ふ風に、夫れを忘れてしまはなければならなかつたからである。

私は思ふに、責任ある新聞記者の職務遂行上に於て、重要なニュースを持ち合せてゐながら、之をどうしても秘し隠しにしなければならぬと云ふことほど、むづかしいことはない。其記者は秘密嚴守の約束で貴重な情報を貰つてゐるであらうし、私の此場合に於ける如く、若しあれを公表したならば、自分が共通の利害關係、又は夫れに類した關係に依つて束縛されてゐる人々の利益を害するやうな情報は、其記憶から抹殺し去る可く餘儀なくされることもあらう。それでは等二主力艦が一夜の内に失はれたことは、海軍作戦上の局面を一變した。露國側は今や復舊作業も著しく進捗したので、果して夫れと知つてゐたかどうかは疑問だが、東郷大將の率ゆるものよりも、少しく優勢な戦闘艦隊を旅順口に擁することになつたのである。彼等の情報機關が初瀬の沈没を嗅ぎ付けたかも知れぬと云ふことは、正にあり得べきことであつたが、併し八島の運命に就いては之を知る可き手近かな方法がなかつた。冷靜に打算すれば、此一隻の軍艦だけが現存するか否

かは、露國側をして海軍状況の判断を一決せしめたかも知れないのである。

日本側は此圖らざりし戦鬪力減少に鑑みて、今や滿洲沿岸に於ける大規模の上陸作業に没頭し、瞬時と雖も艦隊戦鬪を挑むやうなことは望まなかつた。そんな行動に出ることは陸上作戦全部が危機に瀕してゐる場合、一種の博奕をやるやうなものであるからだ。

夫れで若し露艦隊を旅順口内に閉込めて置きさへしたら、日本では依つて以て同艦隊を無害ならしめようと望んだ他の計畫があつたのだ。此日本の興廢に關する海軍の祕密を嚴守す可き件に關して、外波が東京から種々の通告を受けてゐたことは私も知つてゐた。彼は當局に對して、夫れは信用出来る人物の手に在る旨を保證することが出来たのである』

海門號は五月十七日威海衛に歸着した。アサーンは一日千秋の思で待ちわびてゐた所だつたので其歸着を非常に喜んだ。海門號が遠く長崎に行つてゐる間、彼は其暇に任せて、彼の無電局に達した種々の無電暗號を研究してゐた。日本軍艦からは無数の電信が来るし、又威海衛には英國軍艦アンドロメダとフィイヤレスが居り、其極く近所にはレヴァイヤサンが居ると云ふ具合であつたから、是等の軍艦から發する無線電信は、甚しく混亂状態に陥つた。以前仁川にゐた一イタリ軍艦は今芝罘に来てゐたが、其無電が殊に一生懸命になつてアサーンの局を呼び出すので、一層無線圈内の發信を混亂ならしめてゐた。併し唯だ獨り旅順口の露國無線電信局のみ、靜かに沈黙してゐた。

所謂『一時的』の禁止令は早や其十四日目にもなつたので、ジェームスは以前にも増してイライラし出した。プリンクリーとの間に電報が頻に飛んだ。日本の海軍當局者が其戦鬪艦沈没に關する大切な情報をも彼が洩らさなかつた事を、もう知つて居る筈だから、彼等は陸軍の主腦部に對して、彼の誠實と善意とにモット信用を置くやうに説き付けることが出来るだらう、とジェームスは密に思つてゐた。處が夫れは全然空頼みであつた。プリンクリーからは辛抱しろと云ふ忠告の電報が數通來たが、併し他人の金を一日百磅も使つて辛抱してゐると云ふのは、ジェームスに取つては辛い仕事であつた。

夫れから海門號は今一度洋上に出た。丁度その頃旅順口は日本上陸軍の爲に完全に孤立させられてゐた。再び威海衛に歸つて見たら、プリンクリーからジェームスに宛てた電報が届いてゐて、カフーンの日本艦隊従軍の件は許可になつたから、出来るだけ早く同人を仁川に送れと云つて來たのである。そこでジェームス自身は威海衛に留まつてクラブに居を定め、海門號はカフーンを乗せて其日の午後出帆した。

船が港を出ると、入り違ひに一隻の支那商船が漂然として何處からか入港して來た。

十二 『タイムスは賣物ぢやありません』

其夕刻、彼はクラブで夕食をすませてから、其晩はミツシリ仕事をしようと決心して、丁度帳簿に向つた許りの所へ、支那人のボーイが彼に會ひたいと云ふ一人の紳士が尋ねて居ると知らせに來た。ジェームスは夫れは沖に停まつてる軍艦からの友達だと思つた。處が一見して外國人と判る背の高い男が、大股に彼の室へ入つて來て、名刺を差出しそして彼の手を握つた。

ジェームスは客に椅子を勧めつゝ其名刺を一見した。『男爵ルバヴィン』其宿所は上海とあつた。客は完全な英語で話し始めた。

『私は貴下にお目にかゝらうと思つて、今夕着いた船で上海から參りました。重要な件に就いてです。死活的な重要と申しても差支へありません！』

彼が一寸休んだ時、ジェームスはあゝさうですかと云ふ風に頭を下げた。

『全く率直に申し上げます。實は私はロシアの間諜です。支那に在る諜報部に勤めてゐるのですが、御承知のやうに旅順口の我要塞は孤立となりましたので、クロパトキン將軍が日本の占領軍を破るまでは、旅順口と通信する方法がありません。處が幸に貴下は此地に無線電信の設備を持つてゐらつしやる。夫れで私は旅順口へ送る此短い暗號電報を所持してゐるのですが……』と云つて彼はポケットから數字の暗號で書いた一紙片を取出した。夫れは六百語乃至八百語以上はないらしかつた。

『若し之を打つて下されば、私は之を貴下に差上げる権限を與へられてゐるのです』

さう云つて彼は他の一方のポケットから、大きな銀行紙幣の札束を取出して、テーブルの上に置いた。ジェームスはビツクリして其大金を見た。之は膽を潰すやうな厚味のものであつた。ルバヴィン男爵は我意を得たと云ふ風にうなづいた。

『極く短い電報ですよ。で此札は英貨二萬磅あります。宜しいですか、之は非常に重要な電報です。此金をお受け下さいますか、之は貴下のものなんです』

ジェームスは斯んな大金を見て、突然催眠術にでもかゝつたやうな氣になつた。正氣に歸るまで、可成り時間がかゝつたと思ふほど面喰つてしまつたのである。應答が出来る位に正氣付いた時、ジェームスはハツキリ云つた。

『男爵、貴下は間違つてゐらつしやる。貴下はタイムスを買収しようとなさつてゐますが、タイムスは賣物ぢやありません』

自分等の會見は終つたと云ふことを暗示するやうに、ジェームスはスツと立上つた。すると其ロシヤ人も亦立つた。彼は慇懃と云ふよりも、寧ろ甘言を以つて釣り込まうと云つたやうな調子で、ニツコリ笑ひながら、

『貴下こそ誤解してゐらつしやる。私は之を差上げて、タイムスの御意見をどうしようと云ふの

ではありません。唯お願ひしてるのは、二三分間許り貴下の無線電信機を使はして戴くだけのことで。タイムスとは何の關係もありません。唯だ貴下と私と兩人間の小問題なのです」

男爵はテーブルから札束を取上げて、ジェームスの方へ出した。

「男爵」

ジェームスは可成り無愛想に云つた。

「夫れは同じことです。此際私がタイムスです。タイムスは買収されません。さやうなら」

此ロシアの男爵は暫く突立つたまゝジェームスの顔をジツと見てゐたが、

「電報は非常に大切なものです。ですから私は其報酬金額を増しませう」

「男爵、お願ひですから此處を立去つて下さい。私は貴下と取引きをする身分ぢやないんです」

ジェームスは彼を玄關まで追ひ出した。庭へ出た時、彼はもう一度口説かうとしたが、ジェームスは到頭彼を追拂つてしまつた。

ジェームスはつくづく考へた。あれほど仰山な金を持つてゐる男は、自分に取つても危険だつたが、併し二萬磅とは、どんな正直な人でも容易に動かせさうな大金である。さう思ふと同時に、彼は突然帽子を冠り、上着を着て、夫れからポケットの内へピストルを忍ばせた。其夜彼の目指す所は丘陵の頂上に在る無線電信局であつた。

無線電信局まで登つて行くのは殺風景でもなかつた。時はもう夏の季節で、夜の情景は心地よい趣きがあつた。無線電信柱の下へ建てた小屋へ辿り着いたのは、もう夜も十一時頃であつたらう。技師室には燈が點いてゐた。窓から覗き込むと、アサーンは受話機を耳に懸けたまゝ、寢臺の上に寝轉んでゐた。海門號は洋上に出てゐたのだが、彼は電話機に通ずる色々々な騒音の間に眠つてゐても、海門號から來た時だけは起きることの出来るやうに、自分で慣らしてゐたのだ。ジェームスは彼を起す必要もなかつたので、要害の地點に陣取り、徹夜寝すの番の仕度をした。半時間許りたつと、俄然誰か近寄つて來る足音が聞えた。五分許りして二人連れの姿が夜の暗がりから、ヒョッコリ現はれた。

「生まれ、男爵、其處から少しでも局の方へ來てはいけない。私は武装してゐますぞ！」

「大尉、私の申し出を御再考下さいましたか、ホンに些細の電報ですがねえ」

「再考の要などありません。私はどうしても貴下に私の局へ侵入して貰ひ度くないのです」

二人の男は踵を旋へして、そしてウネクネした小徑を下りて行つた。もう一人の男が誰であつたかは判らない。

ジェームスは其丘の頂上で、遙に遠い、東方に、太陽が莊嚴な燦然たる光を輝かして登るまで、孤影孑然として寝すの番をしたのである。

昨夜見た支那商船が其翌日の朝早く、又漂然として芝罘か天津へ向けて出帆した。ルバヴィン男爵——若し夫れが彼の本名なら——は夫れに乗つて行つた。技師のアサーンはジェームスがあの物凄く幾時間無線電信局の外で見張つてゐた事などは全く知らなかつた。彼は夫れほど安らかに眠つてゐたのである。ジェームス後日記して曰く、

「出来事は私に非常に深刻な印象を與へた。私は今が今まで、日本に對する自分の信用に、こんな危険が襲ひ来る可能性があると想像も及ばなかつたのである。私は私の技師の誠實を疑ふやうな理由は微塵もなかつたが、其誠實を動かす爲に、あんな大金が使はれることもあるなどとは、私の人生觀には全然なかつた。人間の性質と云ふものは、之に附隨する弱點と共に過去未來を通じて、常に變りはあるまい。私の心は非常に動搖した。そこで私の云つて置かねばならないことは、此ことがあつてから後は、私は日本陸軍當局の態度を、そんなに辛いものとは思はなくなつたことである。モーバリー・ベルが私への一書翰中に本當に云つた通り、日本は私の名聲や、タムスの金などよりも、更に無限大の危機に直面して居たのであるからだ」

ジェームスは例の男爵が沿岸航路船で去り行くのを實際に確めた後、クラブに歸つて、そしてグツスリ氣持よく寢込んだ。午後遅くブラ／＼と無線電信局へ登つて行つて、アサーンと無駄話をした。アサーンは二百哩を距てた仁川灣に居る海門號と通信を交換してゐたが、彼は何氣なしにジェ

ームスに取つては興味のあることを洩らした。

「誰かゞ又旅順と通信をし始めたらしい。夫れは極く近所だつた。芝罘よりも遠い所ではないと思ふ。普通のマルコニー式だつたやうだが、其通信は數字の暗號だつた。私は其初めの方の二三語を取つて置いた」

彼は約二十語許り書き付けた紙片を、ジェームスに示した。芝罘は威海衛から航程僅か二時間許りの所である。ジェームスは昨夜の祕密を打明けなかつた。アサーンは確に何事も知つてゐなかつた。併しアサーンの今云つた言から推して、あの男爵の所謂、頗る重要な電報が、包圍中の旅順の目的地に遂に送達されたことが想像される。

ジェームスはアサーンに海門號からの電信に氣を付けるやう注意して、再び元來た丘の小徑を下りて行つた。其時はもう殆ど暗くなつてゐた。丁度今しも市場から買物を持つて、セツセと登つて来る支那人の料理番と通り違つた。續いて之まで數回ホテルの邊にウロ／＼してゐるのを見たことのある一ヨーロッパ人が、彼を待ち構へてゐるのと不意に出會はした。其男は當時この地方には珍しくない大抵の支那開港場あたりをウロつてゐた得體の知れぬ者共の一人であつた。其男が一つの提案を持つてゐた。彼は旅順の要塞で缺乏してゐると思はれる食料品を、多數のジャンクに積込んで、封鎖を破る準備をしてゐると自ら語つた。時しも濃霧の季節が迫つてゐたので、彼は凡ての用

意を整へて、一番初めの都合の好い濃霧の夜に乘じ、海に乗り出さうと云ふのである。そこで海門號で其ジャンク隊を八十湮許り曳き船して呉れないか、若しやつて呉れるなら、一千磅やらうと、ジェームスに談判を始めた。

此申込みを聞いて、ジェームスは愕然として氣が付いた。之は自分で自分の職業を穿き違へてゐた。大新聞に對する責任ある一個の通信記者として、其任務を盡しもしないで、黄海の沿岸邊で海賊の相手になつてゐるとは！ 此男に對し彼は一刀兩斷の決答を與へた。すると彼はスツカリ落膽してしまつた許りでなく、ジェームスの拒絶を聞いて、本當にビツクリした模様であつた。併し其時には海門號が出帆してから、ハツキリ十二時間は経過してゐたのである。

南方行の沿岸航路線は又上海行のモリソンを乗せて來た。同船は僅の時間しか寄港しなかつたのであるが、ジェームスは此賢明な同僚と篤と相談を遂げる機會があつた。モリソンは露國男爵の一件を、若し日本側が知りでもしたら、彼等は現に君に對して締め切つた扉へ、更にもう一本の辛張棒をかふだらうから、之は君だけの胸に收めて置いた方が良くと注意した。別れんとするに際し、モリソンは兩の眼を瞬きしながら斯う言つた。

『夫れは素晴らしい大金だつたね。一生涯年に千磅づゝか。併し其札と云ふのは本物だつたかしら、此沿岸地方には大部贋札があるからね』

モリソンは二三日中に、又威海衛に歸ることを約した。

先きに前文中に、五月十七日に海門號が威海衛に歸つた時、洋上の日本軍艦や港内の英國軍艦から發する無線電信が入り亂れて、一時混亂状態に陥つた所に、芝罘にゐるイタリヤ軍艦の無電が、殊に一生懸命になつて海門號を呼び出すので、一層通信を混亂せしめたと云つたが、其頃山海關には北京と通ずる無電局があつて、夫れは往年の團匪事件以後設けられたもので、之も亦イタリヤ人の管理の下に在つた。斯くて日露戦争が終つてから、數年後、ジェームスの一友人がイタリヤを旅行してゐたとき、其友人は當時高速度自動車界に評判を取つてゐた或年若き金持のイタリヤ人と知合ひになつた。段々親しくなつて行く裡に、或時右の金持のイタリヤ人は其ジェームスの友人に、タイムスのジェームスを知つてゐるか尋ねた。そして此若きイタリヤ人の云ふ所を聞くに、彼は曾てイタリヤ海軍にゐて、日露戦争中には極東に居り、無線電信士官としてジェームスの海門號とは毎度交信してゐたこともあつたが、彼は其戦争中、思はぬ金儲けをして、夫から間もなくイタリヤ海軍を退いたと云ふのであつた。後日この話を傳へ聞いたジェームスは『其所謂思はぬ金儲けと云ふのは、威海衛の海軍クラブで、昔、丁汝昌が自殺したと云ふ同じ室の私の机の上に、數分間置いてあつたあの金ではあるまいかと、私は屢々一人で疑つた』と、其話の節々が餘り符合するのを密に怪んだ。併し之は後の物語で、海門號の記事は再び元に返へる。

五月三十日早朝、海門號は威海衛に歸航した。外波中佐も乗つて來たが、カフーンは後に残つて仁川に留まつた。海門號は日本海軍の命令した制限区域内で二日間許り巡航して見たが、遼島沿岸を週航したに拘らず、結局徒勞に終つたので、六月二日又威海衛に歸つた。ジェームスと東京との間に交換された幾多の電報は、豫期の解禁が差し迫つてゐるやうな形勢も見えなかつた。夫れに彼の腦裡には既に日本軍部に對する不快な疑問が起つてゐたので、愈々備船引渡しの爲め、香港へ電報を打つ決意をした。之は彼に取つて實に切ない思であつたのであるが、併し現状の宙ブラリンの行動を徒に續けて行くのは、無用に大金を浪費するものと、ジェームスは考へたのである。

芝罘から出帆の手續をすませて、海門號は威海衛へ向つて航行した。七時十五分、同港に入港しジェームスはアサーンに最後の指圖を與へ、午後八時港外に出て、彼は自分の活動舞臺を其最後の見納めに望み見たのであつた。

次の日、山東角越しに彼は海上の海門號から、タイムスへ送る最後の無線電信を打つた。そして彼の最後の言に曰く、

『南方への航海中は實に心地良い天氣であつたが、私（ジェームス）は直覺的に、新聞通信の補助物として、此船と其無線電信設備の效用は、もう其過程を終つたのだと云ふことを感知した。私は成功した。そして成功の中に失敗した。私は勝利を博した。そして勝利の裡に破れた。或程度

まで諦めの心持は、モリソンと二人で、あの氣持の良い夏の天候の下で、海門號の甲板を歩いてゐる間に湧き起つた。多分私は疲勞してゐたのかも知れない。大抵の場合、戦地で特派通信員を勤めるのは、一人前の仕事として澤山である。然も是等の任務の外に、私は船主としての氣苦勞や責任があつた。様々な昂奮と絶間ない勞苦の裡に、或反動が來た。夫れを私は日本へ歸る無聊な航海中で感じたのである。

八月八日の黄昏、私等は瀬戸内海の入口に横はる六連島に達した。翌日の朝まで水先案内を得られなかつたので、神戸には十日まで着くことが出来なかつた。私等は海門號を神戸に残し、汽車で東京へ歸つた。

私は其後唯だ一度海門號を見た。私が九月の下旬、遼陽戦の後、ピー・オー會社の船で歸英の途中、海門號は香港に來てゐて、私の船と並んで船渠に着いてゐた』

ロシア義勇艦隊商船の軍艦變裝

一 紅海に現はれた二隻の露國假裝巡洋艦

日露戦争の酣なる一九〇四年七月十二日、紅海のバブ・エル・マンドブ海峡に近きペリム島より突如として飛來した一電報は、先づヨーロッパの人心に極めて不安なショックを與へた。

『スコットランドのクライド河口から上海に向へる英船メネラウス、今夜當地に到着した。其報告に依れば、同船及び英船クリュー・ホールは、同じくクライド河口より印度カラチー港に向ふ途中、昨日紅海ヂェッダ港の南方に於て、ロシア義勇艦隊汽船セント・ペテルスブルグの爲に停船を命ぜられ、船舶書類を臨檢された。其間四時間を費し、ペテルスブルグはやがて北方に向け去つたが、同船は砲八門を備へ、多數の乗組員を有してゐた』

之より先き一週間前（七月五日）ペテルスブルグは其僚船セヴァストポール及びアリオールと共に、黒海よりダルダネルス海峡を通過せんとした。其時、沿岸のトルコ砲臺から空砲一發を放たれ、

停船の上、長時間の検査を受けたが、間もなく通過を許されて直に南下した。當時セヴァストポールとアリオールとは共に赤十字旗を掲げ、殊にアリオールは病院船であつて、其搭載貨物は麥粉その他の食料品に過ぎないと宣言された。然るにアリオールの搭載貨物中には、食料品よりも多量の軍用品を含んでゐたことが、三日發オデッサからロンドン・タイムスに達した電報に依つて疾に知られてゐたのである。斯くしてペテルスブルグは石炭を搭載して七日を以てスエズに入り、浦鹽に向ふと揚言しつゝ、更に南方に去つた。

ペテルスブルグがダルダネルス海峡を通過した其翌六日、義勇艦隊汽船スモレンスクも亦同海峡を通過し、九日ボート・サイドに入り石炭を満載した後、十日同港を去つた。去るに望み、紅海の水先案内二名を雇入れた。其内の一名は先に紅海に入つたペテルスブルグに乗込むものであつた。

尤もスモレンスクもペテルスブルグも其黒海に出るまでは、彼等の任務の何なるやを知らず、船長自身と雖も其目的及び目的地に就いて何事も知らされなかつた。其コンスタンチノープルに達するに及んで、初めて彼等の目的地が極東の戦場であつて、共に戦闘に従事す可く適當の時機に大砲を据付け、二等巡洋艦の資格と心得べき旨の電報を受取つたのである。

夫れよりしてペリム島より來る連日の電報は、紅海航路の危険を頻々警報したのである。即ち十五日發の電報に曰く、

『英船ドラゴマンは本日午後四時當地に到着した。同船は紅海に於て一露國巡洋艦の爲に停船を命ぜられたと信號した。昨夜深更、當島沖を通過した大小二隻の汽船は、露國巡洋艦にして、佛領ソマリランドのジブチに向つたものと信じらる』
翌十六日の電報に曰く、

『米船モーニング・スターは本日ボストンより當島に寄港した。其報告に依れば、同船は昨日午後、紅海のヂェベル・エル島とヂェベル・ズグル島との中間を進航中、ロシア義勇艦隊汽船一隻の海軍旗を翻へしつゝ北航せるものに出會つたが、更に日没に及んでヂェベル・ズグル島附近にて、三本煙突と三本櫓を有する一巡洋艦を見、深更の頃又水雷艇の遊弋して居るのを見た云ふ』
是等頻々たるペリム來電は、先にダグネルス海峡を通過して、スエズを南下したセント・ペテルスブルグとスモレンスクの二隻が其紅海に入るや否や、商船旗を撤して海軍旗を掲げ、豫て隠し持ちたる大砲を据付けて、忽ち巡洋艦に變裝し、紅海を横行して頻に中立國船舶を威嚇しつゝある事實を確めたのである。此事實の確めらるゝと同時に、歐洲各國に非常なる驚愕を起し、中にもイギリスの人心に一大不安を感じしめた。七月十六日アラビヤのアデンより飛來した一電信が、二箇の最も重大なる事變の報を齎すに及んで、遂にイギリス及びドイツの各政府がロシアを相手取つて、容易ならざる爭議を突發するに至つたのである。アデンよりの電信とは、

『先に六月二十三日、ハンブルグを發し、サザムプトンを経て横濱に向へる北ドイツ・ロイド汽船會社の汽船プリンツ・ハインリッヒ、唯今當港に到着した。其云ふ所に依れば、同船は昨日午後、ロシア義勇艦隊汽船スモレンスクの爲に停船を命ぜられ、且つ日本行の郵便信書三十一行囊及び小包二十四行囊を沒收された。』

又英國ビー・オー汽船會社の汽船マラッカはアントワープより日本に向ふ途中、紅海に於てロシア義勇艦隊汽船ペテルスブルグの爲に拿捕せられたるものゝ如し』

ドイツ政府はハインリッヒ號事件の報を確むるや、直にロシアに對し『郵便船に對して臨檢の權利を行ふこと、或は正當なるやも知れざれども、郵便行囊を沒收するに至つては、直接に國際法の規定に反する行爲である』とて、スモレンスクの行爲を不當として、捕獲された郵便行囊の還附を要求した。此要求はロシアに於て何の異議なく承諾し、ドイツ政府に對して速に行囊を還附す可く、且つ今後義勇艦隊に依つて再びドイツの郵便物を犯さざることを保證し、尙ほドイツ船の拿捕及び郵便物の抑留に依つて生じたる一切の損害に對して、ドイツの荷送人並に荷受人に賠償す可きことを承諾したので、本件は早くも七月中に落着した。然るに之に反して英船マラッカ號事件に關しては、後日事態大に紛糾し、英露外交の大衝突を見るに至つたのである。

二 横濱に向ふ英船マラッカ號

ビー・オー汽船會社のマラッカがペテルスブルグの爲に拿捕せられたのは七月十三日朝、紅海の南端、ムセゼラ島沖の海上であつた。抑も同船は一八九二年の建造に係り、總噸數約四千噸、常に歐亞間を往復してゐたのであるが、六月二十五日ロンドンを發し、東洋に向ふ途中、紅海に於て此奇禍に遭つたのである。即ち七月十三日午前十時、マラッカはスエズよりペナンに向つて紅海を南航中、ロシア武裝巡洋艦ペテルスブルグが停船の信號を爲しつゝあるを認めた。マラッカの船長は直に船を停止した處、二名のロシア海軍武官の下に武裝した一隊がボートに乗り來り、右二名の士官乗船して、船長に何處より何處に向ふものかと尋ね、次にアントワープ載貨目録、その他船舶書類一切の提示を求め、海圖室に於て検査に着手したが、やがて其載貨目録を通覽した後、彼等は更に一層嚴査を行ふ爲め、書類全部をペテルスブルグに持ち歸ることを告げ、且つ船長に同行せよと命じた。然るに船長は本船の公海に在る間、之を去つて他に行くは、我會社規則に反するに依り、一等運轉士をして船舶書類及び航海日誌を持參せしむと答へ、一等運轉士は乃ち本船を去つてペテルスブルグに行つた。露艦將校は載貨目録を精密に検査し、特にアントワープ發の日本貨物の記號及び數量等を詳細に書取り、其日本貨物の積込地アントワープに於ける碇泊時日、該貨物の性質に就

き、一等運轉士を審問した。數時間の後、一等運轉士は歸船したが、同時に士官二名及び水兵の一隊が再び嚴重に武裝してマラッカに乗船し、士官は船長に對して載貨目録に不明の點あるに依り、横濱宛の貨物を検査することにしたと言渡した。茲に於て船長は貨物を甲板上に持ち出すやうな亂暴をされては、船體の安定を危険にすると抗議し、尙ほロシア士官の命に應じて、抗議を書面に認め、再び一等運轉士をして露艦に持參せしめた。其抗議書の意味は『日本宛の載貨目録中には、戰時禁制品に屬する一物もない。夫れにも拘らず本船を拿捕せらるゝに於ては、ロシア政府は之より生ずる航海一切の危険、到着の遅延、傭船契約期間以上の留置等より生ずる損害、及び乘客その他の關係國政府より提出せらるゝ要求に對し、責に任ず可きものである。若し又公海に於て貨物を破壊せらるゝが如きことあらば、船體の安全を危ふくすること重大にして、船中の人命にも危険を及ぼすのであるから、此儀は殊に強硬に抗議せねばならない。仍つて本船がアデンに向ふことを許され、同所に於て貴官とイギリス領事と合意の上にて、然る可き他の方法を以て裁決せられん事を望む』と云ふのであつた。然れどもロシア艦長は固より之に耳を藉さず、マラッカを拿捕する旨の決意を告げて、一等運轉士を返へしたので、船長は再び抗議したけれども、露艦より武裝隊到着し、速に英國旗を撤回して、露國海軍旗を掲揚し、其旗竿の傍に哨兵一名を配置した。斯くて同日日没マラッカはロシア乗船隊の指揮に依つて進航し、ペテルスブルグに従ひて北方に向ひ、翌十四日

朝、チェベル・テイル沖に達し、他の露艦スモレンスクの到着するを待った。やがてスモレンスク北方より到来し、ペテルスブルグと通信を交換した結果ならん、マラッカのロシア指揮官は船内の歐人乗組員全部を召集点検し、其内より五名を選んでペテルスブルグに送つた。是等の五名は午後六時まで露艦内に抑留され、其間彼等は各々アントワープにて積込んだ貨物の性質に就き嚴重に訊問せられたのみならず、彼等にして若し捕獲に都合よき報告を爲さば、ロシア政府は其報酬として、捕獲物より生ずる利益の一部を惠與すると勧誘されたのである。マラッカ船長は露艦に連れ行かれた五名の運命が甚だ心許ないので、船内に乗込めるロシアの士官に向ひ、ペテルスブルグ艦長に信號して、我等は戦争の俘虜に非ざるに、露艦内に斯く船員の一部を抑留せらるゝは無法であると思惟する故、此旨傳達せんことを求めた處、士官の之れに對する答は、若し此上更に抗議するに於ては、ペテルスブルグ艦長は直に船長を逮捕すると云ふのであつた。

斯くてペテルスブルグより派遣された捕獲士官はマラッカ船長に向ひて、直にバルチック海のリアウ港に航行す可きことを命じ、其夜十時半、マラッカは全速力を以て、先づ北方スエズを指して逆行せしめられた。

露艦セント・ペテルスブルグがマラッカを拿捕するに至つた口實は、同船の搭載貨物中に彈藥二十五噸を發見したと云ふのであるが、此彈藥は明に英國政府から香港の自國支那艦隊に向けて發送

せられたものである。夫れを露艦は日本に仕向けられた戦時禁制品となし、マラッカを目して禁制品輸送に従事するものと斷定したのである。

其後もペテルスブルグは依然紅海を遊弋して、専ら英國船の發見に従事し、前記スモレンスクがドイツ船ブリント・ハインリッヒを臨檢した同じ十五日、チェベル・ゾグル島を去る二十哩の海上に於て、英船ウアイパラに停船を命じ、船舶書類を臨檢した後、拿捕の宣言を下した。之に對してウアイパラ船長が抗議した處、船長を露艦に連行き、船内に日本宛の兵器又は彈藥を有せざることを保證せしめた上で嫌疑を解き、前後四時間の抑留の後、進航を許した。十七日にも亦英船ウッドコック及びダルマチャを臨檢し、抑留三時間に及んだ。十八日にはスエズを去る二十哩程の海上にて、ビー・オー會社のセイロン號に向ひ、信號を以て其出發港を訊問した。

日露戰爭中、露國海軍の中立船に對して加へた不法の行動は一にして足らず、就中英國船に加へた不法最も多く、其都度英露の間に外交上の大衝突を生じたのであるが、マラッカ號の拿捕は英國民を怒らしめた最も最大な事件の一であつた。と云ふのは、當時現存したロシア對ヨーロッパ諸國の黒海に關する條約（一八五六年と一八七一年の兩條約）に於て、ロシアの軍艦はダダネルス海峡を通過して地中海に出ることを禁じられてゐたのである。然るにマラッカを拿捕したペテルスブルグは元來ロシア義勇艦隊に屬する商船であつて、現にダダネルス海峡を通過した時にも、商船

旗を掲げてゐたから黒海を出ることを許されたのであるのに、一旦海峡を出づるや、忽ち武装して軍艦に變裝するのは、明白に黒海條約の蹂躪である。一體ペテルスブルグでもスモレンスクでも、彼等は商船であるか、軍艦であるか。若し商船とせば商船には海上捕獲の権利はない。軍艦のみの有する所である。若し又軍艦とせばロシア軍艦はダルダネルス海峡を通過することを得ない。交戦國商船にして海上に於て中立國船舶を拿捕すれば、國際法の違反である。軍艦にして黒海より出入すれば、歐洲公法の破却である、即ち英國國民が露國に對して大に怒つた所以である。イギリス新聞は筆を揃へてロシアの無法を攻撃し、議會の言論亦政府に對して斷然たる處置を促した。忽ちコンソル以下諸公債の相場に打撃を與へ、又極東に向ふ船貨の海上保険料が俄然二倍三倍の高率を告げたのに徴して、當時人心の不安を察しられるのである。

さる程にマラッカは十九日未明、露國海軍旗を翻へしつゝロシア捕獲士官の命令の下にスエズに到着した。其スエズに入港するや、直にマラッカ船長と船外の一切の交通を禁止せられた。船長は露國領事の本船に乗りたるを捉へ、書狀及び報告を船側に來れるビー・オー會社代理人に手渡しするの許可を乞ひしに、言下に拒絶された。仍つて更に在スエズ英國領事との交通許可を求めたるに、之も亦忽ち拒絶せられたのみならず、若し他人と交通せんとした時は、直に逮捕すると威嚇された。スエズ碇泊中、海岸との交通を防ぐ爲め絶えずマラッカの四圍に武装哨兵を置いてゐた。翌二十日

朝、更にポート・サイドに入つた。乗客及び乗組員全部マラッカから退去せしめられ、乗客はビー・オー會社汽船マルモラにて其旅行を繼續し、歐人乗組員は同オリエンタルに轉乗することゝなつた。

マラッカが露艦ペテルスブルグの爲に紅海で拿捕せられた疑ひあることの十六日アデン發の電報が、イギリスに飛來してから、マラッカの行方は一時不明であつたので、當時モルタ島にゐた英國地中海艦隊が急に出動したのと關聯して、頻に不祥の噂が行はれた折柄、マラッカが拿捕されてスエズ運河に入り、ポート・サイドに到着したとの報ロンドンに達し、英國國民は茲に愈々露艦の無法なる行動を確め、輿論は一齊に政府を鞭撻して、英國の利益と英國國民の名譽の爲に、政府が一切の手段を執らんことを痛烈に警告したのである。英國政府は即ち七月二十日、露都駐在サー・チャールス・ハーディング大使に命じて、露國政府に對し強硬なる抗議を提出せしめた。抗議の要領はペテルスブルグはマラッカに搭載した彈藥を以て禁制品と稱するけれども、實際に英國政府の所有物にして、在香港英國支那艦隊に仕向けられたものであることは、表面の記號に依つて明瞭であるから、速にマラッカを放還することを要求すると同時に、ロシア義勇艦隊の汽船が臨檢拿捕の権利を行ふに對して、一般的抗議を試みたのである。併し此對露抗議に於てイギリスは是等の汽船がダルダネルス海峡を通過するの權利に就ては、直接に問題を提起しなかつた。即ち單に「總て軍艦は黒海より出航するの權利なく、若し義勇艦隊所屬の汽船にして黒海から出航し、次に交戦者の行爲を爲し

たものとすれば、彼等は本來出航の権利もなく、交戦者の行爲を爲すの権利もないものである」と云ふに止まつた。

英國政府が此抗議を提出するに及び、英國の輿論は強硬に政府を支持し、タイムスの如き、スタンダードの如き、モーニング・ポスト、デイリー・テレグラフの如き、從來重大な危機に際しても常に冷靜な態度を持って、國民の輕舉を戒めたものも、今や筆端を鋭くして激越の說を唱へ「若し英國にして其最も貴重なる利益に對し、斯る重大なる危害を蒙り、且つ其名譽に對して斯る重大なる侮辱を加へられながら、平然として之を忍ぶことを得ば、吾人は最早や大國としての資格を失はねばならない」と激語するものさへあつた。實際、當時英國上下の激昂はクリミア戰爭以來曾て見ざる程の有様であつた。

三 英國大に怒り露國遂に屈す

英國に於ける激昂の報、頻々として露都に達するや、露國の人心亦大に激動し、近年漸く衰へつたあつた對英反感再び勃發して、一時は日本との戰爭を餘所に、道路専ら對英論を以て満たさるゝの感があつた。露國側の說を綜合するに、ペテルスブルグが商船旗の下に海峽を通過した後、軍艦旗を掲げた例は、決して今日に始まるものではない。此旗種の取換は一八八四年以來、義勇艦隊の

汽船がダネルス海峽を通過する毎に實行されて居ることであつて、之は露、土兩政府の約束に基き、列國亦夙に知悉して居る所である。此二十年前の約束は元と義勇艦隊汽船をして軍用材料を浦鹽に運送せしむる必要、及び露國の國法に依れば、此性質の貨物を運送する船舶は、船内の規律を軍制に則らしむるの定めであるから、軍艦旗を掲揚する必要があることに基いたものである。爾來これを繼續して今日に至つて居るのであるが、是等の船舶にして一度び軍艦旗を掲ぐる時は、一切の軍艦權を有する一軍艦として認めらるゝものであると云ふのが、露國官邊の意見であつた。

然るに露國皇帝は英國政府の抗議と英國國民憤怒の狀を聞いて痛く憂ひ、外務大臣ラムスドルフ伯亦斯る事件の爲に英國の怒を買ひ、更に益々世界の同情を失はんことを虞れ、速に英國の抗議に従ひ、平和に事を處理せんことを望んだ。偶々同盟國たるフランス政府よりも、此際事態を惡化するの愚を忠告して來たので、露國政府は茲に躊躇なくイギリスに屈するの意を決した。而してロシアの意決したる時、マラッカは二十一日午後、ポート・サイドを發して何れにか向つて去り、何人も其行く所を知らず、發するに臨み、其健康證書に「ロシア」なる文字を特記した。

二十二日午後、露國政府は愈々英國に對して、マラッカの解放、及び其拿捕の爲に生じた損害賠償を承諾し、尙ほ將來同様の事件を再びせざることを誓約した。尤も海上のペテルスブルグとスモレンスクに命令の達するまでには多少の時日を要するから、其間或は兩艦が再び英船を停止し、又

は拿捕することがあつても、是等の行爲は全然發生しなかつたものと見做して、其拿捕したものは直に釋放す可く、又マラッカは地中海内の一港に於て、英露兩國領事立會の上、一應貨物を検査した後、之を放還することに英露双方の合意を得た。而して右の所謂地中海の一港は後に至りアルジェールと定められた。前にも一言した通り、イギリスの抗議には義勇艦隊の權限及び其ダグネルス通過問題に就いて特に詰問することなく、主としてマラッカの解放を要求したに過ぎなかつたから、ロシアの回答中には是等の點に言及してゐないのは勿論のことである。然るにロシアが右の回答を爲した翌日(二十三日)政府は海軍の最高會議を開き、アレキシス大公を議長とし、外務大臣ラムスドルフ伯これに臨席し、海軍々令部長アヴェラン中將以下海軍高級將校出席して、義勇艦隊に關し露國の執る可き方法を決議したのである。決議の要領は、現在義勇艦隊の權限は國際法上未だ十分に確立されてゐないのであるから、之をして尙ほ臨檢拿捕の行爲を續行せしむることは甚だ望まじからざるのみならず、他國の感情を害すること少からざるを以て、斷然これを中止すると云ふのであつて、ラムスドルフ伯最も熱心に此説を主張した。併し此間ペテルスブルグとモレンスクは、依然紅海に出沒してゐたので、彼等が英露間に現に非常の物論を引起し、爲に本國政府の方針が、一變したことなど固より知る由なく、露國政府はエジプト船を借りて命令を傳達せしめんとしたこともあつたけれども、其間に彼等は又もやドイツ船スカンディヤを拿捕し、捕獲士官を乗込ま

しめて、二十四日スエズに入り、續いて英船アードヴァ亦スモレンスクの爲に拿捕されて二十五日スエズに逆航し來り、二十六日には英船フォルモサ亦露國海軍旗を掲揚してスエズに入港し、二十七日ドイツ船ホルザディアも亦拿捕されて、各船續々スエズに到着した。露國領事は入港に従つて即時是等拿捕船を解放したけれども、二艦は尙ほ海上を徘徊し、英船シチー・オブ・アグラ及びアッシリヤに停船を命ずる等、頻々として中立國船舶を脅してゐたので、遂に英國政府は其地中海艦隊をアレキサンドリヤとスエズに配して、露艦の行動を監視せしめ、命令一發すれば直に出動するの決意を示した。

英國議會では此間マラッカ號以下の事件に關して質問連日續發した。其中で二十五日總理大臣バルフォアは下院に於ける一議員の質問に對し『是等の拿捕より生じたる困難は——余は之を大困難と云はん、余は偽つて之を輕視することを欲しない——政府に大なる憂慮を與へ、又現に與へつゝある一問題を引起したのであるが、今や幸に無事解決の好望を認めた。但し目下是れ以上の説明を爲すのは不利益である』と避け、翌二十六日再び前日の同一議員の質問に對して、露國義勇艦隊の權限に關する問題は現に英露政府間で討究中であるから、今日これを議會で論議することを好まぬと拒絶したが、二十七日に至り、バルフォア首相は明日を以て露艦のマラッカ其他の英船拿捕に關して簡單なる説明を爲すことを約し、二十八日政府は議會に於て事件の概要を發表した。即ち上院では

スペンサー卿の質問に應じて、外務大臣ランズダウン卿は、英國政府より強硬なる抗議を提出して、英船を拿捕した露艦の性質に就き質問した結果、露國政府は拿捕船の釋放を承諾し、右露艦に命令を發して、今後の拿捕行爲を中止せしめたと同時に、之を紅海より召還し、將來同様の任務に服せしめないこととなつたから、此問題は既に解決を告げた、但し露國義勇艦隊の權限及び其黑海附近の航海に關する諸問題は、尙ほ未決の儘に存する旨を答辯し、更に下院にては反對黨の首領サー・カムベル・バンナーマンの質問に答へて、バルフォア首相は英國政府の意見として、軍艦は黑海より出航することを得ないものであるが、義勇艦隊の汽船が之を出て戦争行爲を爲すとせば、彼等は軍艦の行爲を行ふものであるから、元來出航の權なきものである。然も彼等は黑海より出航したものであるとすれば、軍艦と稱することを得ない。随つて戦争行爲を爲すの權なきものであるとの論據を以て、マラッカの拿捕に對し最も強硬に抗議を爲したと述べ「露國政府は此抗議を承諾した。但し余は茲に一般原則を云々するのではない。唯この特別の事件に就いて説明するに過ぎないのである。マラッカは其ポート・サイド出帆前、之を停止することが出来なかつたけれど、同船は今やアルジェールに於て釋放せられた。同時に露國政府は當該義勇艦隊汽船が此訓令を受取る以前に於て、更に拿捕を爲すことあるも、是等の拿捕は發生しなかつたものと見做すとの證言を與へ、之に依て汽船アードヴァ及びフォルモサも亦釋放された。又我政府は義勇艦隊汽船を紅海から召還

するの證言を得たから、露國政府にして最早や彼等を巡洋艦として使用するの意思を有せざること疑ひなし。故に是等露船の關係に就いては、爭議は既に其危機を通過したものである。勿論余は彼我兩國政府が一般原則に就いて協商を遂げたと云ふのではないが、余は我政府が強硬に支持した主張に對し、實際に違悖の生ずる懸念はないと信するものである」と説明した。

四 マラッカ釋放

バルフォア首相の説明の如く、マラッカは二十七日地中海のアルジェールに於て遂に釋放せられたのである。即ち同日捕獲士官に率ゐられて同港に入るや、船内に於て同地駐在英露兩國領事及び捕獲士官シュワルツ大尉との間に長時間の會商を遂げた後、日没と共にマラッカより露國旗を撤回し、明朝日出と共に英國旗を掲揚することを決定せられ、萬事極めて満足に遂行されたのであるが、マラッカ釋放の命令は實はシュワルツ大尉の意外とした所であつて、大尉は入港後、直にフランス海軍官憲に通牒して、石炭六百噸及びバルチック海リバウに達するに必要な淡水、竝に食料の供給を請求したのであつた。然るに夫れより一時間を経ざる内、露國領事から、マラッカがポート・サイド出帆後、釋放のことに決せられた次第を初て聞知したのである。

八月二日に至り、露國政府はマラッカ號事件に就き、官報を以て其顛末を公表した。

「帝國政府は此戦争の初より、中立國船舶が戦時禁制品を日本に輸送することを防止するの手段を執つた。一九〇四年二月十四日の勅令は現戦争中施行せらる可きものであるが、該勅令にはロシアが戦時禁制品と認むる品目を掲げ、陸海軍官憲は一八九五年三月二十七日付勅令を以て發布したる海軍捕獲規定及び停船、臨検、拿捕竝に拿捕船及び拿捕貨物の輸送及び釋放の手續に關する一九〇〇年九月二十日の海軍省訓令を勵行するの權利を保留する旨を宣言した。

義勇艦隊所屬汽船ペテルスブルグ及びスモレンスクは特別の任務を帯びて（但し其任期は終了した）其目的地に向ふに當り、能く其前記の規定に依り行動し、其紅海通過の際、海上にて遭遇した一切の嫌疑船に對し停船臨検を行ふた。ペテルスブルグの艦長が英船マラッカに停船を命じたのも亦前記規定の下に行ふたものであるのに、マラッカ船長は貨物に關する船舶書類の提示を拒んだので、止むなく該船を拿捕し、事實審査の目的を以てリバウのアレキサンダー三世港に送致するに決したのである。

然るに英國政府より公然の説明に依れば、マラッカは同國政府の貨物を輸送しつゝあつたものと云ふから、帝國政府は英國政府と合意の上、該拿捕船に對し其途中の最近港に於て、英國領事の立會を経て、新に臨検を行ふことに決し、其臨検はアルジェールに於て行はれ、英國總領事は該船内の軍用貨物は依然英國政府の所有に屬するものである事、及び其他の貨物は戦時禁制品で

ない事を公然證明したるに依り、帝國政府は此證明に基き、貨物及び同船を釋放することに決した。併し此決定を以て帝國政府が我敵國に戦時禁制品を輸送することを防止する爲め、巡洋艦竝に一般軍艦を派遣するの意思を放棄したものと解釋してはならない」

露國政府の此辯解は露艦のマラッカ拿捕を以て、マラッカ船長の自ら招いた禍とするのである。然るに翌八月三日、ピー・オー汽船會社は役員某の名を以てタイムスに書を寄せ、此露國官報の記事を絶對に否定した。

「露都官報の記事中、マラッカは其船長が貨物に關する船舶書類の提示を拒んだから拿捕されたものと説明してゐるが、余は絶對に之を否定するものである。一切の貨物に關する書類は其請求に應じて提示せられたのみならず、船員の或者等も貨物の性質に關し、審問の爲めペテルスブルグに送られた。然るに其時露人は是等の船員を誘惑して、拿捕を辯明するに有利な報告を與へしめんと試みたことさへある。船舶證明書、載貨目録、其他の書類は現に今尙ほ露人の手に在るので、當會社はマラッカの航海を繼續せしむるが爲には、右書類の寫しを改めて送附せねばならぬ實狀である。

露人は之に依つて豊富なる拿捕物を得たものと考へたのであつて、彼等はマラッカの船員を買収して、其目的の達成に助力せしめんと企てたのである。アルジェールで行はれた所謂審査に就

いて、余は其審査が單に一船口を開き、英國政府の貨物が官有を證明する記號を以て適當に標識されて居るのを見したに過ぎないものであることを明言するものである。之に關與した主席船員の記録に依れば、此審査は僅々五分間で終了したと云ふ。是れ實に同船が紅海に於て臨檢された際、必然行はれて居る可き筈のものであつて、決してアルジェールに於て初て行はる可きものではないのである」

其後に至つてもマラッカ號事件は依然として英國議會の問題となり、八月八日下院にて首相バルフォアは議員の質問に答へて、英國政府がマラッカの拿捕に對する抗議の要旨は、商船旗の下に黒海を發した船舶は巡洋艦に變裝せらるゝことを得ないと云ふに在つたと述べ、英國政府は露國政府と強硬に談判した時、此事件は全然新問題に屬し、政府は之が爲め兩國間に大事件を引起すが如き問題に變せざらんことを努め、互讓の精神を以て協議を遂げたのであるが、英國主張の諸點は悉く貫徹したと斷言し、英國政府は露國政府と満足に談判の目的を遂げる爲め十分努力し、露國政府亦決して執拗なる態度に出なかつたと附言した。十一日上院にて外務大臣ランズダウン卿はリボン卿に答へて、露國義勇艦隊及び其ダルダネルス海峽通過に關する英國政府の主張は、既に能く諒解されたと述べ、ペテルスブルグ及びスモレンスクは最早や紅海から撤退したから、今後拿捕の行はることはなかる可く、尙ほダルダネルス海峽を通過する他の船舶に關しては、トルコ政府は露國政

府より是等の船舶は全航海中商船旗を掲げ、船中兵器彈藥等を搭載せず、且つ決して巡洋艦に變裝せらるゝことなしとの公然の説明を受けたことが明白にされたと説明した。

五 其後のペテルスブルグとスモレンスク

流石に物論囂々たりしマラッカ號事件も、七月二十七日、アルジェールに於ける釋放後、漸く世人の記憶を去り、殊に當時一方にナイトコンマンダー號擊沈事件（七月二十四日、我伊豆沖にて浦鹽艦隊の爲に擊沈せられた英船）なるものが起つて、英國上下の注意は俄然該事件に向つたので、マラッカ號事件が其落着と共に、露艦ペテルスブルグ、スモレンスクの行方の如き何人も顧みるものなきに至つた其間に、茲に又一事件が突發した。八月二十二日、南アフリカ英領ナタールのダーバンより飛來したロイテル通信員の急電が即ち夫れである。

「英船コメディヤン當港に來着し、昨日バッシイ河口に於て露國巡洋艦スモレンスクの爲に停船を命じられ、船舶書類検査後、進航を許されたが、検査はボートの中にて露國士官これを行ひ、船中には來なかつたと報告した」

更に翌二十三日、再びダーバン發のロイテル電報に曰く、
「スモレンスクは英船オルムリーが鐵道材料を搭載して、ニュー・ヨークより釜山に向へるを搜索

するものと信じらる。オルムリーは去る土曜日（二十日）當港を出帆した。又英船ウムビロ當港に到着し、去る土曜日（二十日）正午、ダーバンの南西二百哩に於て一巡洋艦を認めたと、同船は領海内に在つたので無事であつたと報告した』

スモレンスクとペテルスブルグが紅海の南端バブ・エル・マンデブ海峡を通過して外洋に出たのは、七月の末であつた。八月五日ペテルスブルグがアデン沖を通過したと云ふ電報のあつた外には、其後二艦の行方は杳として傳へられなかつた處に、ダーバンより飛來した右の電報は又々英國の人心を驚かし、物論再び大に起らんとした。蓋し前日バルフォア首相の聲明に依れば、スモレンスク及びペテルスブルグはマラッカ號事件の抗議に依つて、以後軍艦として航海す可からざる筈である。然るにスモレンスクが今又英船コメディヤンを停船臨檢したのは、露國政府が英國政府を欺いたものである。之に就いて駐英露國大使ベンケンドルフは、英國政府に對して本國政府よりの捕獲中止の命令が未だ該艦に到達しない爲であると辯解したのであるが、茲に不思議なのはスモレンスク、ペテルスブルグの二艦が、先に黒海を出て以來、既に五十日に達するに、曾て一回も途中の港灣に入つて炭水の供給を受けた形跡のないことである。或は其本國出發の當時、十分の石炭を準備してゐたとの説もあるけれど、實は豫てロシヤはドイツから若干の石炭供給船を備入れ、スモレンスク、ペテルスブルグは此供給船から隨時所要の石炭を得たものであつて、現に前に記したドイツ船ホル

ザディアヤの如きも、露國政府との契約に依て佛領ジブチーに直航し、同所にて二艦に會合するの豫定を以て紅海に入つたのを、途中の海上にて二艦に邂逅したので、一旦スエズに引返し、更に新命令を受けて、此度は遙にドイツ領東アフリカのダル・エス・ザラームに向ひ、茲に露艦の南下を受けしたのであつて、紅海で拿捕せられスエズに引致されたと云ふ前日の報道は、實際の事實ではなかつたのである。故に露艦は是等のドイツ船から夙に捕獲中止の命令を受取つて居るに相違ないのであるから、右露國大使の辯解は信するに足らざるが如くなれど、露國政府の命令が實際に露艦に達しない爲め、依然英船その他の中立船を脅すものとせば、露國政府は其命令を傳達する爲め一切の手段を講ぜねばならぬ筈である。然も遠隔なる南アフリカの海岸には、ロシヤは自ら迅速に其處置を爲す可き適當の便宜を有してゐなかつた。そこで遂に不面目ながら英國政府に依頼して、英國軍艦をして露艦を追跡し、命令を傳達せしめんことを請ふたのである。茲に於て英國政府は喜望峰艦隊司令官に命じて直に露艦の搜索に着手せしめた。八月二十九日英國海軍の公報に曰く、

「露國政府は目下南アフリカの海上に在る同國義勇艦隊所屬スモレンスク及びペテルスブルグに向け、至急命令を傳達する爲め、英國政府に其手段を依頼し來りたるに依り、喜望峰艦隊司令官は軍艦クレセントに坐乗し、本月二十六日セイセル島（マダガスカル島の東北、印度洋の海上）を發し、巡洋艦フォート及びパールを率ゐ、露艦に通報の目的を以て南方に航行しつゝある。軍

艦バーロサ及びパトリックは又露國政府の希望を達せんが爲め、前者はウォルフッシュ灣とベン
ゲーラ（共に西アフリカ沿岸）の間に、後者はウォルフッシュ灣とサイモン灣（同上）の間に義勇
艦隊二艦の搜索を命ぜられた。

右露國の通知は軍艦セント・ジョージ及びブリリヤントを以て目下ヴァード岬（西北アフリカ）
のセント・ヴィンセント附近に碇泊せる南大西洋艦隊司令官に傳達せられた」

斯くて九月六日未明三時、英國巡洋艦フォートはアフリカ東岸の英領ザンジバルを發し、南方に
向つて進航中、朦朧たる曉色の間にサウス・アイランドのメネー灣内に、怪しき汽船二隻の櫓を認
めた。二隻の汽船は、其間近に近寄るまで英艦の來りたるを知らず、彼等が愈々フォートを發見す
るに及んで、二船相互の間に俄に信號を交換し始め、やがて倉皇錨を抜いて出港するの氣配が見え
た。二船とは云ふまでもなく露艦スモレンスクとペテルスブルグであつた。茲に於てフォートは直
に『重要なる報告あり』との信號を掲げた。之に應じて露艦は再び投錨したので、フォートはポー
ト一隻をして、露國政府の暗號電報及び英國政府より露艦の中立國船舶に對する迫害中止を要求し
た抗議を携へて露艦に向はしめた。間もなく回答はペテルスブルグより送るとの報告を以て歸艦し
た。其後より果してペテルスブルグ艦長スカルスキーは英艦を訪問した。英艦は儀仗兵の式を以て
彼を迎へた。スカルスキーは流暢なる英語を以て、同艦は前日この地に到着したるも、固より石炭

を積入れたこともなく、また何人とも交通したこともない。其ザンジバル附近の海上に在るのは天
候險惡の爲に外ならない。途中臨檢を試みたのは唯汽船一隻に止まる。又スモレンスクは一箇月に
互る天候不良の間、喜望峰の附近を巡洋せし爲め艦内僅に三百噸の石炭をあますに過ぎないことな
ど辯明した。フォート艦長ダングス大佐は露艦長スカルスキーに向ひ、即刻出帆の必要を説いた處
露艦長は態度極めて慇懃に其意に従ふことを答へたが、始終の容子より察するに、彼等露艦はフォ
ートの爲に其伴へる石炭供給船の發見せられんことを恐れるものやうであつた。斯る間にペテル
スブルグは英國々旗に二十一發の禮砲を發し、英艦亦これに答禮した。スカルスキー艦長はザンジ
バルに於て石炭の積入れを許可せられんことを請ひたるに對し、ダングス艦長は之が許可せらる可
きものであるか否か、自らの本國政府に問合はして見るがよいと拒絶した。斯くてフォート艦長は
露艦長の訪問に答へんが爲め、ペテルスブルグに赴きたるに、露艦亦儀仗兵の式を以て彼を迎へ、
英露兩艦長の會見は最も慇懃であつたが、ダングス大佐の認めた所に依れば、ペテルスブルグは十
分の石炭を貯藏し、五吋砲七門、小砲數門を有し、又スモレンスクは大小徑の大砲合計十一門を搭
載してゐた。尤も其大なる一門は多く用を爲さず、其他のものも寧ろ廢物に屬してゐたと云ふ。彼
等が若し英國軍艦に發見せられなかつたなら、スモレンスクはザンジバルで石炭を積入れたに相違
なかつたであらう。

ダングス大佐がフォートに歸艦するや否や、スモレンスク、ペテルスブルグは直に抜錨して、南に向つて去つた。フォートは露艦の行動を監視しつゝ暫時同所に止まつたが、露艦が海上約七哩の沖に達した頃、更に一隻の汽船が露艦の進路を追ふて航行するのを見た。是れ疑もなく彼等の石炭供給船であつて、其甲板上に石炭積込用の起重機のあるのを見て明白であつた。此供給船こそ前に記したドイツのハンブルグ・アメリカ汽船會社所屬ホルザディアであつたのだ。やがてホルザディア先づ其の進路を一轉するや、露艦も亦これに次いで一轉し、漂渺の間に其影を沒した。最後に見られた時は、三隻共にザンジバルの南端十五哩の沖に在つた。露艦が其メネー灣を去らんとする時、ドイツ國旗を掲げた大型の印度洋沿岸貿易船が一隻、突然同灣に入つて來た。南方のダル・エス・ザラームより露艦に向け供給品を運送して來たものと察しられる。露艦が灣内を出づるや、同船も亦外海に出て行つた。

其後十日を経て、九月十六日ザンジバルよりの電報に依れば、ペテルスブルグとスモレンスクの二艦は同日朝ダル・エス・ザラームを發して、南方に向つたと云ふに徴し、彼等は前記メネー灣出帆後、尙ほ依然として其近海に遊弋しつゝあつたものと想像せらる。併し爾後中立國船舶に對して迫害を加へたるを聞かず、海上幾日かを費して遂に本國に歸航したのであらう。日露戰爭中の一問題として一時世界の耳目を聳動せしめたペテルスブルグ、スモレンスク事件は、斯くの如くにして

其結末を告げた。

ペテルスブルグとスモレンスクの二艦は夫れからどうなつたか。稍や久しく消息を絶つてゐたが、兩艦がアフリカの東岸で英艦フォートに發見せられた時から、約二箇月半を過ぎた十一月十六日、先に極東遠征の途に就いたバルチック艦隊（後に日本海々戰で全滅したロゼストウェンスキーの露國第二太平洋艦隊）の後發部隊として、ドプロテンスキー少將の下に本國リバウを發した一艦隊の中に假裝巡洋艦リオン、ドニーペルなる二艦があつた。前者は即ちスモレンスクの後身であつて、後者はペテルスブルグの變名である。此變裝した兩艦の屬するドプロテンスキー艦隊は、本艦隊の後を追ふてバルチック海を出で、十二月三日アフリカのタンジールに着し、それから地中海に入つて翌年（一九〇五年）一月半頃スエズを通過し、紅海を南下して印度洋に出で、マダガスカル島に待合せつゝあつたロゼストウェンスキーの本隊に合して、同島のノシベ灣を發航したのは三月十六日であつた。斯くて全艦隊は四月十一日、佛領印度支那のカムラン灣に入り、更にホンコーへ灣に轉じ佛領沿岸に淹留すること一箇月餘の久しきに亙りたる後、五月十五日ホンコーへ灣を出でて進路を北東に取り、フィリッピンのルスン島と我臺灣島との中間を通過して太平洋に現はれ、暫く洋上に遊弋してゐたが、此處にて數隻の運送船を離し、本艦隊は一路恰も津輕海峽に向ふものゝ如く裝ひ、俄に八重山列島の東方を通過して清國杭州灣の南方なる馬鞍島に到着したのが、五月二十四日

であつた。バルチック艦隊は同島にて一切の戦闘準備を整へ、翌二十五日を以て假裝巡洋艦リオン及びドニーペルの外、運送船合計八隻を離隊して愈々その最後の對島海峡に向つて進航した。本隊から遺棄されたリオンとドニーペルは他の運送船と共に一旦吳淞沖に現はれたが、間もなく二艦は北東を指して去つた。

對島海峡に向つたバルチック艦隊の運命は、世界の海戦史に明白に傳へらるゝ通りであるが、スモレンスクとペテルスブルグの後身たるリオンとドニーペルの兩艦に至つては、何れに其影を潜めたるや、再び知るものはなかつた。然るに日本海々戦（五月二十七、八日）の後數日を経た六月二日、リオンは突然支那海に出現して、英船シラーナムに停船を命じ、同船の船貨を海中に投棄して、又何方にか去つた。更に數日を経た六月四日、英船セント・キルダは日本に向ふ途中、香港の北方六十哩の海上に於て、不意にドニーペルに出會ひ停船を命ぜられ、翌五日遂に撃沈された。船長以下歐人の乗組員十一名は、露艦に收容せられたまゝ其後行方を失つた。ドニーペルの英船セント・キルダ撃沈事件は其他の事件と共に、日露戰爭後數年を経たる一九〇八年に至る頃までも、尙ほ英露の間に問題となつてゐたが、其遂に如何に決せられたるやを知らず、又リオンとドニーペルがそれから如何にして本國港に歸つたかも、全く知られてゐない。

六 商船を軍艦に變更する海牙條約

ペテルスブルグの英船マラッカ拿捕事件に就て、當然問題と爲るのは、所謂義勇艦隊汽船の國際法上の性質如何である。然るに英露交渉に於ては、努めて之に觸るゝことを避けた爲め、曖昧の裡に通過してしまつた。即ち本件は極めて有耶無耶の間にマラッカを釋放することに依て速に解決されたのである。處が此マラッカ號事件の經驗から後年（一九〇七年）第二海牙平和會議に於て、商船を軍艦に變更することを得るや否やが、議案として問題と爲つた。而して此場合にも亦義勇艦隊の法律上の性質に關しては遂に論及されなかつたのである。故に此問題は今日に至るまでの國際法規又は國際慣例に於ては、未だ解決されてゐないのであつて、第二平和會議で商船を軍艦に變更するに關して議決せられた所は、義勇艦隊の所屬汽船をも含みたる一般商船の軍艦變更に就て、僅に一部分の解決を與へたに過ぎないものである。

日露戦後、一九〇七年オランダ海牙で開かれた第二平和會議は、商船を軍艦に變更するに關する問題の委員會に於て、此問題を左の如く五別して審議した。

- (1) 商船は軍艦に變更せらるゝことを得るや
- (2) 軍艦とは何ぞや

- (3) 何處で變更を行ひ得るや
- (4) 何時まで變更は繼續するや

- (5) 軍艦に變更された商船に適用せらる可き規則如何

右の内(1)の商船は軍艦に變更せらるゝことを得るやに就ては、何等難問題を生ずることなくして、變更し得るものと決定せられた。之は從來世界の重なる海軍國が一朝開戦の場合、大商船を武装して假装巡洋艦として利用する爲に、平時より是等の商船の建造又は航海に多額の助成金を給してゐたことに顧みて、會議に於て軍艦變更が問題と爲らなかつたのは、怪むに足らない。

併し(2)の軍艦とは何ぞやとの問題に至つては、決してさう簡單には片付けられなかつた。と云ふのは總て近代の海軍には從來の戦艦、巡洋艦、驅逐艦、水雷艇、潜水艇等に止まらず、尙ほ多くの必要なものがある。即ち艦隊が永く海上に在る場合、殊に其國が艦隊の作戦區域内に便利の給炭港を有しない場合には、石炭供給船、工作船、軍需品供給船、通信船、兵員、軍用品の運送船等、補助船隊を備へてゐなければならぬと云ふ論據から、英國の委員は軍艦を二種別して、一を主戦艦 (Vaisseau de Combat) とし、専ら戰鬥に従事するものが之に屬し、他を補助艦 (Vaisseau auxiliaires) とし、主戦艦の爲に補助の役に服する前記例示の船種これに屬するものと爲し、而して兩者の資格は之を同一視するの提案をしたのである。之に對して露國及び米國委員からも軍艦の定

義に關する各提案が出たのであるが、若し英國案の如く補助の役に服するものをも軍艦とすることになれば、中立船で交戦國の軍隊を輸送したり、交戦國の爲に情報を傳達したり、又は交戦國政府に備入れられる等の場合に於ける是等中立船の地位に關する一般原則にも、問題が及ばねばならぬこととなる。然も此問題は平和會議の審議事項以外に屬するものであると云ふ反對説が有力であつたので、英國委員は遂に其提案を撤回するに至つた。其爲め此第二問は立消えに歸した。

(3)の何處で變更を行ひ得るやの問題に就ては、英國委員は商船は其自國港を出航する以前に非ざれば、軍艦たる特質を與へられず、又自國港に歸着後に非ざれば軍艦たる特質を撤廢せられずと唱へ、即ち商船を軍艦に變更することを得るのは自國港に限り、又この變更を撤廢するのも自國港に限ると爲し、隨つて中立國が其港内で變更を許すときは中立義務違反となる可く、交戦國が中立領水内にて變更を行はゞ中立國に對して中立權侵犯となる。又軍艦は中立船を臨檢搜索する權利を有するものであるに鑑み、中立國は何船が此權利を行ふことを許さるゝものであるかを、豫め知るの權利を持たねばならぬのであるから、公海に於ても亦變更は行ふことを得ない。若し商船として中立港を出た船が、不意に軍艦たる新性質を帯びて現はるゝことを許さるゝに於ては、悲む可き事件を出來せしめ、中立法規の侵害に關する紛議を生ず可く、堪へ難き事態を發するに至ることがないと云へない。と云ふの理由で、變更の場所を當該商船の自國港に限定せんと主張したのである。和

蘭委員先づ之を支持し、日米兩國委員は英國の提案を修正して、變更を行ふ國の『海陸軍占領地の港又は領水』なる文字を加へて賛成した。之に對して反對したものは獨露佛の三國委員であつた。彼等は變更は公海にて許さる可きものであると主張するのである。殊に獨逸は最も強硬であつたが、其理由は斯る變更を禁ずる現行國際法規は存在しないのみならず、多數の國の法規は其人民の私有財産を作戰に使用することを許してゐるのであるから、是等の國は其管轄下の領域内にて此權利を行ひ得るは勿論、何れの國の管轄にも屬せざる公海に於て亦これを行ふことを得る筈である。更に公海に於て敵から捕獲した船を軍艦に變更して利用することは古來合法と認められ、又古來屢屢實行せられた所である。捕獲船の軍艦變更が公海に於て許さるゝものとせば、況して自國の商船を同様に變更することを得ない道理はないと云ふのである。

そこで伊太利委員は是等英國の論争の妥協に努力し、『開戦後自國の領水を出航した船は、公海にても又他國の領水にても、其性質を變更することを得ず』と云ふ動議を提出したのである。即ち交戦國の船が中立港に入つては、其處にて商船たる性質を利用するの權利を享有しながら、間もなく公海に出ては、忽ち其商船たる性質を脱ぎ棄て、軍艦と爲り得ると云ふのでは、中立國の好意の濫用である。蓋し軍艦として中立港に入るときは、其碇泊の隻數に於ても、其碇泊の時間に於ても、石炭の積入量に於ても、嚴重な制限を蒙るに反し、商船として入港するものは此種の制限を加へ

られないからである。故に伊太利委員の此妥協案は、商船が開戦前に自國領水を出航した場合に於てのみ、公海で軍艦に變更することを許すの程度に於て、獨逸の主張を認めたのである。併し此案に賛成したものは英、米、白耳義、ブラジル、伊太利、日本、諾威、和蘭、瑞典の九國で、之に反對したものは獨、佛、露、澳、アルゼンチン、智利、セルビアの七國であつて、完全に一致することを得なかつたので、結局會議で成立した條約の前文に『締約國は商船を軍艦に變更することは之を公海に於て行ひ得るや否やの問題に關し、一致すること能はざりしに因り、變更の場所は問題外と爲し』云々と記する如く、規則中に包含せられないことに爲つた。換言すれば商船を軍艦に變更する場所は、現行國際法の下に在つては、中立國領水以外に於て無制限と爲るのであつて、公海にて之を行ふことは自由であると云ふのである。公海にて變更を禁ぜんとする英國案に、獨逸を始め露佛等の諸國が大に反對した理由は、前述のやうな根據に依るのであるが、實は英國の如き世界到處に領地を持つて居るものに取つては、其變更の場所を自國港に限ることにしても、何の苦痛不便を感じざるに反し、獨、露、佛等に至つては固より同様の便宜を有してゐないのであるから、公海に於ても變更の自由を認められねば不利であると云ふ實際上の理由が、遂に英國案を不成立に至らしめたのであつた。翌一九〇八年から九年に互るロンドンの海戦法會議でも、此問題が再議せられたが、此時に亦同様の討論を繰返へして、同様の失敗に終つた。

此變更の場所に関する問題と直接重要な關係を有するものは(4)の變更の期間の問題である。海牙の會議で、奥匈國委員は一旦軍艦に變更された船は、戦争の終結まで再變更されることを得ないと云ふ提案をした。其趣意は日本の委員が夙に指摘したことであるが、商船を軍艦に變更することが公海に許さるゝならば、其反對に一度軍艦に變更した船を又公海で元の商船に再變更して、軍艦たる性質を脱却することが出来るのであるから、數時間前軍艦として中立港にゐた船が、一旦出港して公海に出て、其處で軍艦から元の商船に早變りして、數時間後再び同一の中立港に歸つて來ることもある可きに就き、斯る中立港の濫用を防がんとすると云ふに在る。蓋し前にも述べたやうに、中立港に於て享有する商船と軍艦の權利には著しい相違があつて、軍艦の資格では許されない便宜を、商船は無制限に享有するのである。例へば交戰國軍艦は中立港に於て同時に三隻以上碇泊することを得ない。又引續き二十四時間以上碇泊することを得ない。又燃料の積入れに就ても軍艦の最近本國港に達するに必要な以上の量を供給されないと云ふのが、今日多數の國の間に行はるゝ慣例であるから、軍艦として中立港に入る時は甚だ不自由であるに反し、商船に對しては斯様の制限がないので、同時碇泊隻數に就ても、碇泊時間に就ても、又燃料の積入量に就ても頗る自由である。そこで軍艦に變更された商船が海上に於ては中立船又は敵船に對して頻に臨檢拿捕を行ひ大に軍艦權を振ひながら、中立港前に到りて忽ち本來の商船に早變りし、商船の資格に於て入港し、其中立港を

存分に利用して、再び公海に出で、又もや軍艦に變裝して海上で暴威を逞うることが、合法的に出來ると云ふのでは、中立港を作戰根據地として公然使用することを公認することになる。だから一旦軍艦に變更された商船は戦争の終結まで再變更することを得ないとする提案には、有力の理由が存するのである。然るに會議では變更の場所に関する協定が不成立に終つたので、之と密接の關係に在る本問題も亦遂に何等決することなくして現状の不確定の儘に放擲せられた。仍つて翌年のロンドン海戰法會議では、此再變更の問題を再議し、商船から變更された軍艦が、中立港で一般軍艦に適用せらるゝ制限を免がれ、或は軍需品を補給し或は損害を修理する等の爲に、其軍艦たる性質を脱却することもありとして、之を防ぐの協定が一時成立する如く見えたが、之も亦再び空望に歸した。

斯くて(1)から(4)までの問題中、(1)の商船は軍艦に變更せらるゝことを得るやの一問のみが、肯定的に議決せられた外、他の三問題に関する諸提案は悉く不成立に終つた爲め、最後の(5)の軍艦に變更された商船に適用せらる可き規則如何の問題は、極めて興味淡き内容を留むるに過ぎなかつた。而して其海牙會議で議決された規則は、現行の『商船を軍艦に變更するに關する條約』として存するもの即ち是れである。

一、軍艦に變更された商船は、其掲ぐる國旗の所屬國の直接の管轄、直接の監督及び責任の下に

置かるゝに非ざれば、軍艦に屬する權利義務を有することを得ない。(第一條)

二、軍艦に變更された商船には、其國の軍艦の外部の特殊徽章を附せねばならない。(第二條)

三、其指揮官は國家の勤務に服し、且つ當該官憲に依て正式に任命せられ、其氏名は艦隊の將校名簿中に記載せられねばならない。(第三條)

四、其乗員は軍紀に服せねばならない。(第四條)

五、軍艦に變更された一切の商船は、其行動に付き戦争の法規慣例を遵守せねばならない。(第五條)

六、商船を軍艦に變更したときは、成る可く速に其變更を軍艦表中に記入せねばならない。(第六條)

海牙條約は單に右六箇條を規定したものであつて、畢竟『戦時に於て商船を戦闘艦隊に編入する爲め、之を行ひ得べき條件』(條約前文)の一部を定めたものに過ぎなかつた。往昔捕獲私船(*Privateers*)なるものありて、交戰國政府が私船に捕獲免許狀と稱するものを交付し、海上で捕獲權を行ふことを許し、其私船は捕獲物(捕獲した船及び載貨)を其利得として與へられたので、非常に有利な商賣であつたが、一八五六年『巴里宣言』なる國際條約に依て廢止せられ、爾來海上捕獲權は軍艦にのみ限らるゝことゝなつた。右の海牙條約は要するに往年の『巴里宣言』の原則を再認して之

を完成したものと評することが出来る。歐洲大戰の際、交戰國双方とも盛んに商船を軍艦に變更して使用した。之に就て其開戰當時英米の間に一交渉が行はれた。即ち英國政府は米國政府に向つて、總て中立國政府は(米國は當時尙ほ中立國であつた)其人民が交戰國の爲に戦争に使用せらるゝ船艦を製造し、又は艦裝することを禁じ、且つ其管轄領域より右船艦の出航することを防止するに、相當の注意を用ゆることが義務である。然るに獨逸は本來公海に於て商船を軍艦に變更するの權利を主張するものであるから、或は其變更を行ふ爲に米國港にて商船を裝備し又は米國港から出航することがあるかも知れない。若し斯る商船に依て英國の通商航海に損害を加へられた場合には、英國政府は之を以て米國政府の責任と認めざるを得ないと云ふ豫告を與へたのである。之に對し米國政府は、獨逸が果して斯る意思を有するか否か全然不明なるに先ち、外國政府と豫め何事も約束することは出来ないと返答した。

日露戦争の當時、露國の義勇艦隊所屬商船ペテルスブルグの英船マラッカ捕獲事件が動機となつて、後年海牙會議の一問題たりし商船を軍艦に變更する條件如何の議案は、上述の如く其最も肝要なる變更の場所の問題と再變更の問題に就て、列國間に意見の一致を得なかつた爲め、ペテルスブルグやスモレンスクの公海再現は將來の戦争にも豫想され得る所である。

バルチック艦隊の英國漁船撃沈

一 バルチック艦隊リバウ出發

日本海の海戦に殆ど全滅した露國バルチック艦隊も、一九〇四年十月十四日、本國リバウに勢揃ひして、提督ロゼストウェンスキーの指揮の下に、愈々太平洋遠征の途に就いた當時の壯觀は、威風堂々として早く既に敵を呑むの概があつた。然も此遠征に於て、全艦隊の將卒上下を通じて、日夜絶えず不安を感じしめたものは、其リバウを出た時から、日本の水雷艇が途中の海上に彼等を要撃する計畫があると云ふ頻々たる風説であつた。

彼等が此風説を聞いて如何に戦々兢兢の思ひを爲し、其極東に到着するまでの航海中、一日として安んぜざりし實情は、同艦隊旗艦の乗組一技師ポリトウスキーなる者が、其愛妻に宛てた日誌的書信 (Politovsky, From Libau to Tsushima) に記する所に依つて、最も能く窺ふことが出来る。即ち露國艦隊はリバウを出港してから三日目の十月十六日、バルチック海の出口に近きデンマーク

領ボルンホルム島沖に差掛つた時、早くも日本水雷襲撃の危険を感じ、急遽戦闘準備を爲して居る。『今夜は危険らしい。乗員皆着衣のまゝ臥す可く、全艦の備砲は悉く装填せられる。之から狭い海峡を通過するのであるが、此海上で日本の水雷に觸れる危険がある。恐らく水雷はないかも知れないにしても、既に久しき以前より、日本の士官がスウェーデンに來て、我艦隊を全滅する命令を受けて居ると云ふ風説があるので、大に警戒せねばならない。此海峡は水雷艇の襲撃又は水雷の沈設には最も適して居るからである。』

午後四時、ボルンホルム島には寄らずして過ぎ、スウェーデンの南岸を遠望して、行く／＼多くの汽船に出會つた。非常の警戒を以て航進しつゝあるが、艦隊は若干の枝隊に別れ相互に一定の間隔を保ちて進む。其各隊の側を驅逐艦を以て取巻き、我航路の前程に又は我艦隊に向つて航走し來る汽船又は帆船あれば、我水雷艇は常に前進して航路を開き、彼等を追ひ退けて行く。翌日(十月十七日)デンマークのランゲランド島附近に投錨した。ポリトウスキーの日記に曰く、『ランゲランド沖にはデンマークの一巡洋艦と一水雷艇ありて、我艦隊に水雷を發するの恐れある日本人に對し、我等の錨地を保護して居る。我各艦には驅逐艦に至るまで何れもデンマークの水先案内を乗込ませて居る。一度びバルチック海を出れば、水雷の危険も自ら免がれるであらう』十月二十日午後三時、露國艦隊がデンマークの北端スカーゲン岬の手前まで達した時、『突然、ス

ウーデンの汽船一隻、我艦隊に近寄り、重要な通信を有すとの信號を掲げて來た。之ぞ露國通信員より、極めて疑はしき三本マストの一帆船が、或小灣から出帆したことを報するのであつた。茲に於て、艦隊の側邊を通過する諸船に對して全砲口を向けよとの命令が發せられた。併し前にも幾多の船に出會つたが、我驅逐艦は何時も是等の船を追ひ退けた。最も危険な地點は最早や通過したのである。三十分前に軍艦ナワリンであつたか、ナヒモフであつたかより、二箇の輕氣球を發見したとの信號があつたことを、提督に報告せられた。果して何者であるか。或は日本人ではあるまいか。夜八時に至つて、全艦は驚駭を以て滿たされた。人々海上を凝視するに、此夜天氣晴朗にして且つ暖かであり、月亦明かである。即ち海上の細微なる疑はしき物影さへ細かに注意し、備砲は悉く裝彈し、水兵は甲板上に起立して居る。今夜は其一半は着衣のまゝ砲側に臥し、他の一半と士官等は不眠の警戒を爲す筈である。戰場を隔たること斯くも遠きに在りながら、斯くまで驚かざるゝは奇怪のことである。然も水兵等は此事態を重大視して居る』

二 日本水雷艇の襲撃

斯くの如き戦々兢々の思ひを爲しつゝ、露國艦隊は十月二十一日を以て、愈々北海に入つたのである。

『前夜は何と云ふ神經過敏な又不安な夜であつたらう。人々は宵の程より神經昂奮し、恐怖を以て襲はれた状態を呈してゐた。眞夜中に至つて、忽ち前進艦から、四隻の怪しき無燈の水雷艇を認めたとの通報があつた。即ち一層の警戒を加へて進航したが、併し幸にして無事に夜は明けた。今は海上濃霧ありて、四邊一物をも見るを得ない。御身の嫌ひな例の汽笛は激しく鳴り響きつゝある。余は昨夜着衣のまゝベッドに入り、蒲團も掛けずに仕事着をかぶつて寝た。

我々は今北海に來た。北海は風浪高しと聞きしが今は靜穩である。但し霧深し。スカーゲンから佛國ブレストに向ふのであるが、ブレストにても陸上との交通はなからんとのことである。

夜九時、無線電信ありて、遙に落伍したカムチャッカ(運送船)が水雷艇に襲撃されたと云ふ。

夜十時、カムチャッカから、八隻の水雷艇に四方より襲撃されてゐることを報告して來た。

夜半を過ぎて、カムチャッカは艦隊の所在地點を問ふ。同船は又航路を變更し、且つ水雷艇は去つたと報告した。併し本艦の人々は、我艦隊の所在地點を問ふて居るのは日本人であると皆思つて居る。風起りて我スワロフは動搖しつゝある。若し風風ぎたらば水雷艇は尾行を中止し、近くの沿岸に入らねばなるまい。

噫、それから我艦はどうしたか。

夜一時、突然行手に當つて船影を認めた。乃ち戦闘用意の號令が鳴り渡つた。艦隊は右の怪し

き船を近寄せた。それから大事變が始まつた。——それが何事であつたかは言語に窮する。我枝隊の全艦は砲火を開き、砲聲止まず、探海燈閃きて闇を破る。余は此時船部の船橋にゐたが、砲聲砲火の爲に全く目眩み、耳聾し、兩手を以て耳を蔽ひつゝ、駈下りて上甲板の舷梯口から、始終を見物してゐた。見れば一隻の小汽船が助くるものもなく、海上に漂うて居る。其一本の煙突、船橋、さては舷側の赤と黒との色彩りまで明に見られる。甲板上に人影なきは多分驚駭して船底に逃込んだのであらう。我艦より發した幾發かの砲弾は、此不幸なる汽船に命中した。余は其炸裂するのを認めた。やがて發砲停止の命令ありしも、他の諸艦は尙ほ砲撃を續けた。思ふに此汽船は撃沈されたであらう。第二、第三の汽船も船上に人影なく、同様の状態で無慘にも漂うてゐた。併し我スワロフは彼等に發砲しなかつた。

是等汽船の人々の思ひを想像せよ。是れ實に漁船であつたのである。今や全世界に恥辱を晒したのである。併し彼等漁船も、實際には不注意であつたことを免かれない。何となれば、彼等は我艦隊の來ることを承知し、又日本人が我艦隊を破滅せんと企てゐることも承知して居る筈であるからである。彼等は我艦隊を認めたのだから、よし網を引いてゐたにしても、何故彼等は之を捨て、途を避けなかつたのであるか。網は後日辨償せられたのであるに。

プレストに至らば、我等の演じた始末を知ることが出来るだらう。若し先に我艦隊の所在地點

を聞いた者が、カムチャッカでなくして日本人であつたとすれば、彼等は今や我等の所在を知るであらう。若し果してさうだとすれば、今夜こそ襲撃せられるものと覺悟せねばならない。今は月影明かなれども、四時より六時まで暗からん。襲撃には最も好都合の時刻である。唯だ、一刻も早く大洋に出たし。大洋に出たら、此種の危険から全く脱するであらう。余は今ベツドに入る可きや否や、自分にも判らず。余は此通り極くつまらぬことさへも、御身に知らせることを、常に心掛けて居る。此手紙を保存せられよ。之は如何なる日誌よりも尊し。余は或は他日自ら之を讀みて、今の狼狽を我記憶に呼び起すこともあらん。(此日誌の記者ポリトウスキーは不幸にして日本海々戦に於て戦死した。彼は遂に自ら此日誌を讀むの日を與へられなかつた。)

夜二時半、何たる不運ぞや、アウロラよりの信號に曰く「水線下に四個の砲弾の貫通孔を受け、煙突を射抜かれ、牧師一名は重傷を負ひ、砲術長亦輕傷した」と。是れ我枝隊が前刻の騒ぎに誤つてアウロラを砲撃したのである。同艦並にデミトリ・ドンスコイの兩艦は離れてゐたので、(艦隊は六枝隊に分れて居た)汽船砲撃の際、人々度を失ひて、恐らく何れの艦かがアウロラを日本軍艦と見誤つて、之に六吋砲を猛射したのであらう。同艦は他艦より遠く離れてゐたのである。實に言語道斷の悲しむ可き椿事である。唯その射撃の正確であつた位がせめてもの慰めである。十月二十二日午後三時半、昨夜の書面に認めた第二、第三の汽船も、亦多少の損害を受けた。

アウロラの牧師は片腕をもち取られたのであつた。同艦は彼を病院に入れる爲に、最近港に寄ることの許可を求めたけれど、提督は之を許さなかつた。アウロラに命中したのは、各種の砲弾六箇であつて、舷側及び煙突を打抜いてゐた。併し人員の損害は比較的少なかつた。アウロラは當時我枝隊の反対側の水平線に現れたのが失策であつて、同艦が我枝隊に探海燈を向けた爲め、敵艦と誤認されたのである。

午後十一時、異變の日も暮れた。六時頃、我艦の推進機に漁網がからまつてゐたけれども、機械は尙ほ運轉して居る。此邊の漁船が長き漁網を曳き置いてゐる上を、我艦は通過せねばならぬのである。今夕、晩の祈禱があつた。今夜は果して如何なる可きや。天氣は引續き良好靜穩である。月は四時頃まで照るであらう。思ふに昨夜の如く又濃霧が起るであらう。今朝は絶えず濃霧中に汽笛を鳴らし續けた。明朝は英國海峡に入るのであるが、又も乗組員にハンモックを與へられず、皆着のみ着のまゝで砲側に眠るのである』

三 日本水雷艇の正體

當時英國は勿論、全世界を驚かしたバルチック艦隊の英國漁船撃沈事件は此日誌に記する如く、一九〇四年十月二十一日から二十二日に續く眞夜中、北海ドッガー・バンクの海上に行はれたのであ

る。而して此無法の撃沈が、當夜出漁中の英國漁船を日本水雷艇と見誤まり、狼狽の餘り度を失ひて、自艦アウロラを砲撃大破せしめたことも明白に記入されて居る。北海のドッガー・バンクは有名な漁場であつて、當夜約五十隻の英國漁船が鱈の獵に従事してゐたのである。漁船は何れも燈火を點じ、又は相互に信號用の狼煙を使用してゐた。夜の一時頃、露國艦隊の第一枝隊に屬する軍艦は、彼等に探海燈を照しつゝ通過した。第二枝隊これに次ぎ、後續の第三枝隊亦探海燈を照らし、信號を交換しつゝ近寄つて來た。此第三枝隊の一艦から不意に砲撃を始め、續いて諸艦一齊に發砲し、砲聲打續くこと十分乃至十二分にして、又不意に砲撃を停止した。而して露國艦隊は遭難船の人命を救ふこともせず、又その砲撃の結果をも見定めずして、ずん／＼航進し去つたのである。之に依つて漁船一隻(船名クレイン)撃沈され、船長と三等運轉手は即死し、負傷者六名を出だし、其他に漁船の砲撃を蒙りたるもの五隻に及んだ。二十三日の夕方、難を免れた漁船が英國ハルに歸來して、始めて此變事を傳へた。

遭難漁船隊長の本事件に關する二十二日付の報告は、二十五日に至り一般に發表せられた。

『我等は十月二十二日夜、北緯五十五度十八分、東經五度の地點に於て、漁獵に従事してゐた。時に西南の風稍や強し。十一時半と覺ぼしき頃、風下に數隻の船影が現れた。其一隊は我漁船の舷側を通過し、四隻より成れる他の一隊、我船首を通過せんとする時、忽ち探海燈を照し、突然

砲撃を開始した。砲撃は十五分間繼續した——砲撃の焦點と爲つた漁船クレインは撃沈され、船長、運轉手は無惨の死を遂げ、一名の料理人を除く外、全乗組員は皆重軽傷を負うた。漁船クルの船長はクレインの急報に接し、直に之が救助に務めた。他の漁船三隻は皆砲火を浴び、其内の二隻の如きは、本國に歸航せねばならぬ程の損害を蒙つた——バルチック艦隊の此行爲は、我等を日本人と誤りたるが爲なるや、又は單に我等を其東航の門出の血祭りに供したものなるや、今我等は判斷するに由なきも、彼等は我等の漁船なることを見誤る筈はない』

遭難漁船長の談話は、此報告を補足して、當夜の實況を窺ふに足る。即ち漁船ムールメインの船長は曰く、

『漁船は二十一日午前一時頃、スパーン岬の沖、二百二十哩の地點に於て、漁獵に暇なかりし時、濃霧を通して遙かの方に、數隻の艦影の朦朧たるを認めた。暫時にして探海燈は我漁船を照し、艦隊の全部通過し終るや、突然砲撃を開始せられ、艦隊に最も近き漁船は損害甚しく、我ムールメインも亦船床に砲弾を蒙り、漁船ミノの如きは損害莫大ならん。砲撃は二十五分間にて終り、艦隊は英國海峡の方向に航行し去つた』

又漁船マグビーの船長は曰く、

『金曜日(二十一日)の夜、漁船隊四十隻は北緯五十五度十五分、東經五度六分の地點に來りし

に、濃霧深くして咫尺を辨ぜず、我漁船隊長は信號の狼煙を上げて、漁獵地點を知らせてゐた(此狼煙が約十分後に起りたる悲劇の導火線と爲つたのではあるまいか)暫時にして大小無數の檣燈の近づきつゝあることを認めた。我等は豫てバルチック艦隊が此航路に在るを知つてゐたので、恐らく同艦隊ならんと思惟した。彼等は相互に信號を交換しつゝ、容赦なく探海燈を浴せかくると約十五六分にして、俄然、彼等に最も近き我漁船に對して砲門を開いた。最初、我等は之を空砲ならんと思ひ、一漁船の水夫長の如きは、其時尙ほ平然として、二尾の大魚をバルチック艦隊の舷側で取つてゐた程であつた。——然るに數分後に至つて、其空砲に非ざるを知るや、全員忽ち恐怖と變じ、全速力を以て逃げんと試みるに至つた。如何に狂暴を以て知られた露國艦隊であると云へ、我一隊は武装なき單純の漁船であつて、何等に敵意を有するものでないことは、之を知らない筈はない。——彼等が砲撃の動機、那邊にありたるか判斷に苦しむ所である。砲弾の速力とボート中に残りたる砲弾に依つて察するに、彼等は速射砲を使用したらしい。——砲弾の形状は宛然大なる胡瓜の如く、其尖端は銅を以て造られてゐた』

一九〇四年十月下旬から約二箇月に亙つて、英露間の平和を脅かし、フランスの斡旋に依て辛じて事なきを得たバルチック艦隊の北海漁船撃沈事件(或はドッガー・バンク事件、或はハル漁船撃沈事件とも云ふ)の發端は即ち之である。

四 對露宣戰の危機

事件の始めてロンドンに報ぜらるゝや、最初は殆ど之を信するものはなかつた。然るに諸方面より續々報告が到來し、事實の愈々確めらるゝに及んで、上下を擧げて一大驚愕を以て襲はれた。露國艦隊が斯くの如き狂暴の行動を敢てした上に、遭難者を救ふことも爲さずして航行し去つた人道無視の蠻行に對して、全英國の人心は極度の激昂を呈し、當時在野黨たる自由黨の機關にして、平生平和主義のクロニクル紙すら、『露國政府の取る可き方法は、二十四時間内に相當の辯明を爲し、十分の賠償を支拂つて深謝す可く、然らざれば我は最後通牒を發するの外はない』と極論するに至つた。日露戰爭中露國の演じた無法の行動にして、英國を怒らしめたものは他に多くあるけれども、本件に至つては、民心の激發する所、或は英國も亦露國に對して最後の手段に出づるの外なき險惡な事相を呈したのであつた。デヴァンポートに開かれた本事件協議會に於て、英國著名の法學者サー・フレデリック・ポロックさへ『本事件が果して新聞の報ずる通りであるとすれば、當然開戰の行爲と云ふ可く、露國政府は四十八時間内に謝罪するか、然らざれば最後通牒を發するか、何れかに依つて決せらるゝばかりだ』と演説した程の情形であつた。それから一週間に亙つて英國朝野の政治家は交々露國を難責して容赦せず、曾て自由黨内閣の首相にして上院に於ける同黨の領袖たるロ

ーズベリー卿は、之を以て『言語道斷の狼藉』と評し、植民大臣リットンは『是れ虐殺の意志に出たものか、然らざれば放心なる不注意に出たもの』と認むる外はないと云ひ、海軍大臣セルポーン卿亦『許し難き狼藉を行ひたるもの』となし、殊に下院に於ける反對黨(自由黨)の首領サー・ヘンリー・キャムベル・バンナーマンの如きは『無辜の漁船に加へられたる大艦隊の此無比なる惨虐の無法を、吾人は何と評す可きや、若し此狂暴の行爲にして苟も公認せらるゝことあらんか、如何なる強烈の言辭を以てするも足らず、又如何なる強烈の報復を以てするも足らぬであらう』と極言し、斯る狂暴の行爲が眞逆かに露國政府に依つて公認せられることはなからんと思へども、然も露國艦隊の行爲は怪我、誤解、若しくは過失の理由を以ては云ひ譯が立たない。露國政府は十分の辯解を爲す可きものと信するが『此艦隊が今後世界を巡航するに就ては、彼等が本件に於て斯く蹂躪したる國際禮讓と文明戰爭及び人道の規則に服従する何等かの保障が、必然確定せられねばならぬ。我國民は現政府の要求を支持するに絶對に一致し、且つ此事變の不幸なる犠牲者に對し、熱誠の同情を表するに一致するものである』と云つたのは、英國國民の決心を最も明白に宣言したものであつた。中には露國艦隊に對する復讐として、若し此際露國の十數隻を撃沈する海軍提督が出たら、英國國民は之を國中第一の英雄と賞揚し、彼の爲に一大銅像を建設するであらうと云ふが如き、過激の言を爲すものをも生じ、甚しきは二十四日の夜、駐英露國大使ベンケンドルフ伯が、急報に接し

て大陸の旅行から歸英し、其倫敦ヴィクトリアヤ停車場に着いたのを發見した暴徒は、大使を途に要して、危害を加へんとした程に、極端なる昂奮状態を現出したのである。幸に警官十數名を狩り出して護衛したので、事なきを得たけれども、暴徒はルール・ブリタニヤを叫びて容易に解散せず、警官は終夜露國大使館を警護するの止むなきに至つた。さすがに翌日の各新聞は、皆是等暴徒の輕率なる行動を非難し、英國國民の體面を汚すものであると戒めたのである。併し露國大使は翌日外務大臣を訪問して、其個人的遺憾の意を表したのであるが、大臣を外務省に問はずして、其私宅に訪ねたのは、暴徒の再擧を恐れたに依るものと思はれた。

二十四日、外務大臣ランスダウン卿は國王エドワード七世と長時間に亙る謁見を遂げた後、駐露大使サー・チャールス・ハーディンジを通じて、露國外務大臣ラムスドルフ伯に事件を通知すると共に、此事件に依つて起されたる英國内の憤慨は言語に絶す、殊に露國司令官は、其率ゐる艦隊が無辜無防の漁民に發砲し、之に重大な損害を加へたことを、直に知つた筈であるのに、何等彼等を救護せずして去つた其無情冷酷は、一層英國國民の憤慨を激成したと附言せしめ、『英國政府は十分の陳謝、完全迅速の賠償、並に同様の許す可からざる事件の再發に對する保障を要求せねばならぬ。併し露國政府は必ず至急辯明を提示するであらうが、夫れを受取るまでは、英國政府は以上の要求を正式に提起することを差控へる』と豫告せしめた。事件の報道は其日既に露都に達してゐたのを、新聞

檢閲官が抑へて一般に知らさなかつたのであるが、英國大使は事件を聞知するや、本國政府よりの右訓令を接手する前、露國外務大臣を訪ふて、事態の重大なるを指摘し、調査の結果、露國提督の過失が立證された場合は嚴重に處罰し、且つ完全なる賠償を爲す可きことを求めた。外務大臣ラムスドルフ伯は之を聞いて大驚愕の狀を爲し、固より必要なる保障を與ふ可けれど、之は何か大なる間違ひから起つたのであらうと云つたが、之に附加へて『多分海軍省には報告が來てゐると思ふが、私の處にはまだ海軍省から夫れを寄越さない』と告白した。ラムスドルフ伯の此言は、英國大使をして非常に意外の感を爲さしめた。又この日、英國外相ランスダウン卿は駐英露國代理大使サゾノフを引見したるに、本國より未だ何の訓令にも接してゐないので、單に遺憾の意を表するの外はないが、露艦が漁船を砲撃したのは實際に日本水雷艇がゐるか、又はゐたと推測したに依るのであらうと、彼は附言した。

當時、露國皇帝ニコラス二世はクロンスタットに於て、巡洋艦オレグの檢閲に赴いてゐたのであるが、北海事件の報に接するや、直に露都に歸り、二十五日、外相ラムスドルフ伯をして英國大使を通じて、英國政府に其個人的陳謝の意を表せしめた。

『我陛下の許にはロゼストウエンスキー提督から何の報告も到來してゐないので、ドッガー・バンクで起つた不幸の事件は誤解に依るものと、差當り考へるの外はない。併し皇帝は悲しむ可き人

命の損害ありしことを聞召され、英國皇帝陛下及び貴國政府に深甚なる遺憾の意を傳達せられんことを切望し給ふ。我陛下には事件の生じた事情が明白と爲り次第、被害者に賠償の必要手段を講じられるであらう」

然れども是等の保障は英國政府及び英國公衆を満足せしむるに足らなかつた。ロンドン新聞の大多數は、露國艦隊の航海を停止し、強制的に之を抑留し、露國艦隊司令官を其狼藉に對する責任將校と共に、即時免黜懲戒せよと論じ、英國の對露反感いよ／＼激成せらるゝ一方であつて、英國海軍は遂に動員の豫備命令を發し、海峽艦隊、地中海艦隊及び本國艦隊に對し、必要あらば露國艦隊の南航を遮斷す可く一切の準備を命じたのである。

二十五日の朝、駐英露國大使ベンケンドルフ伯が前記の如く外相ランズダウン卿を其私邸に訪問した際、外相は非公式ながら英國政府の條件として、(一)露國政府の十分なる陳謝、(二)被害者に完全なる賠償、(三)責任者に相當の處罰、(四)同様の事件の再發に對する保障の四點を指示したのであるが、二十六日、露國大使は再び外相を訪ひて、重ねて露國政府の最深なる遺憾の情を傳へ、且つ露國皇帝が被害者に對して十分の賠償を爲すの約言を繰返した。併しランズダウン卿は、之を以て不十分であると答へ、同日再度の會見に於ては、最も明白なる語を以て英國政府の決意を告げた。即ち露國提督は報告を怠り、又露國艦隊を最近港に寄港せしむ可き何等有效の手段も取つてゐ

ない。就ては英國政府は艦隊をジブラルターに集中することを命じ、「若し露國艦隊にして何れにも寄らずして航海を繼續するに於ては、今週の終らざる前、英露は交戦状態に入るであらう」と嚴達したのである。英國外務大臣の此決然たる言は直に其効果を奏した。即ち露國政府はスペイン駐在自國大使をして、同國ヴィゴの領事をフィニステル岬の沖に派遣せしめ、ロゼストウエンスキー提督に、ヴィゴに停船す可き命令を傳へしめたのである。

五 ヴィゴ一港淹留

斯る間に露國艦隊は十月二十三日の夜、英國海峽を通過し、二十四日にはビスケー灣に出た。再びポルトウスキの日記に依れば、

『十月二十四日——多分、ブレストには寄らないと云ふことである。好天氣に乗じて直にビスケー灣を横切るのである、——セールブルに寄港したらしいコレヤ號からの無線電信に依れば、同船は艦隊の漁船砲撃に就ては、何事も聞かなかつたと云ふ。

ビスケー灣に入る。ブレストに寄ることが出來ず、ビスケー灣を直航し、スペイン國ヴィゴに赴く。——我枝隊は先頭が戦艦スワロフ(二萬三千五百一十一噸)、次がアレキサンダー三世(同姉妹艦)次いでポロヂノ(同上)、アリオール(同上)及び運送船アナジールより成る。

二週間前、リバウのアレキサンダー三世港を出発した頃、提督の許可を得たものゝ外は、一通の電信も打つことが出来なかつた。之はバルチック海に我艦隊を待受けて居る日本人に、間諜が豫報することを恐れた爲である。日本人（バルチック海には百人以上もゐたと云ふ）は、我艦隊がリバウでオレーグを待合せるものと想像してゐたらしい。然るに提督はオレーグを待たないで出發したのである。間諜が之を日本人に豫報することが出来なかつたのは、電信を電信局で受付けたけれども、二日間差押へたからである。日本人が無爲であつたのは恐らく之が爲であらう。

夜に入る。霧散じて我枝隊は再び集合した。ヴィゴに達するまでは乗員は着衣のまゝ砲側に寝るのである。余は船室に坐し、考へを轉せんと努めるけれども、煩悶に絶えず、動もすれば縊死せんとさへ思ふことがある。士官室に行つてドミノを手にし、犬と戯れ、頻に時間を消さんとして見たが、凡て無我夢中である。——今夜か又は明朝ヴィゴに着くであらう。運送船アナジールから石炭を軍艦に轉載することを許されるか否か見物である。我戦闘艦には石炭が乏しくなつて来たからである。

十月二十五日——我等はスペインに近付きつゝある。既に燈臺が見える。朝にはヴィゴに着くであらう。リバウを出てから何處の港にも入らないのであるから、皆大助かりである。

第二枝隊（戦闘艦シツツイ（一萬四百噸）、同オスラビヤ（一萬二千六百七十四噸）、同ナワリン

（一萬二百六噸）巡洋艦ナヒモフ（八千五百二十四噸）其他より成る）の司令官フォルカーシャム提督は、英國海峡を通過する時、一手柄をした。即ち英國海岸に近寄り、大膽にも運送船から艦隊に石炭を積込んだのである。我等は我外務大臣の恐怖を想像して此處で皆笑つて居る。（因に我艦隊の派遣には各大臣何れも反對したのであるが、此提督が斷然これを主張したのであつた。）思ふに、我外務大臣は漁船砲撃に就て報告を受取るのであらうが、彼は先づ之に依つて全歐洲と共に驚く可く、次いで英國近海で石炭を積込んだと聞かば、再び驚く可く、最後に我艦隊が中立港ヴィゴに入つたと知らば、彼の驚きや果して如何。

十月二十六日——ヴィゴ灣に入る。陸上との交通は許されないので、三十二頁に互る六回目の手紙を領事の手を経て發送したが、無論郵便切手を持合せないから到着するかどうか心許なし。我々は此處に二十四時間以上碇泊することはなかる可く、スペイン官憲は夫れ以上は許さない。

十二時——スペイン官憲は一分間も此港に碇泊することを許さない。

提督は時を延ばさんとして、同港の港務長に、マドリッドに打電して、破損修繕の爲め五日間碇泊の許可を問合はさんことを求めた。スペイン官憲の禁止に頓着せず、今運送船から石炭の轉載を始めんとする所だ。之がなければ我艦隊は立往生するからである。船首綱（軍艦と石炭船とを連結する綱）の邊りに番兵を配置し、何者も此綱を切斷することを許さずとの命令を下した。さて

此終局は何となるか。

各戦闘艦に接近した石炭船が碇泊して居るが、石炭積込みを許されない。電信は各方面に發せられ、今はマドリッドからの返信を待つてゐる。石炭の積込みは果して許されないだらうか。

提督は電信を受取つた。英國は汽船の砲撃よりも此悲劇の現場に残された我水雷艇が、遭難船を何等救助しなかつたことを憤慨して居るとの報である。併し我水雷艇は一隻も現場にはゐなかつたのであつて、皆セールブルに行つてゐたのであるから、提督は此趣きをロンドン駐在の我大使に返電した。

マドリッドからの返電が來た。即ち政府は石炭積込みを見合はすことを求め、積込量は明日通告するとのことである。提督は信號を揚げて、我艦隊に明朝七時を以て拔錨する準備を爲す可き命令を傳へた。本日提督が上陸した際、禮を厚うして迎へられ群集も大歓迎の意を表した。此事、當地の夕刊新聞に出てゐる。

十月二十七日——我艦隊は返事を待ちつゝ碇泊して居る。是れ全くの恥辱である。露國の買入れた石炭は我艦と舷を接する運送船に在るのに、我は之を積込むことを許されないのである。何者が之を妨げるのかと御身は問はん。淺ましく、乞食のやうな、零落したスペインこそ其者である。勿論その裏面には英國の手が見えて居る。スペイン人は敢て之を隠さうとはしない。

午後一時——各艦は各四百噸の石炭を積入れることの許可が來た。茲に於て、水夫も士官も眞黒に汚れて急ぎ積込みを始めた。眞白の夏服も、帽子の被ひも、何處に在るのか見分けが付かず、一切石炭の塵で眞黒と爲り、顔は煤の如く黒く、齒だけ唯だ白く光つて居る。

十月三十一日——明朝はタンジールに向け出帆すると云ふことである。今日は終日多忙で一筆も取ることが出来なかつた』

右ボリトウスキーの日誌には、二十八日から三十日までの記事が缺けてゐる。其何故であるかは想像するに難くないが、此日誌に徴するときは、露國艦隊はヴィゴに前後丸五日間碇泊して居るのである。而して此五日間の碇泊は、提督ロゼストウエンスキーに取つて、最も多忙の時であつた。

六 ヴィゴより事件報告の電信二通

二十六日ヴィゴに入るや、提督が引見したアソシエテッド・プレス通信員との談話こそ、露國艦隊の辯明として最初に世界に傳へられたものである。提督は先づ北海事件に就て深く遺憾の意を表した後、此不幸なる出來事は全く意外である。其夜の天候は靄深く、午前一時頃、日本船と覺しき二隻の水雷艇が、不意に露艦二箇枝隊の中間に現はれ、水雷を發射するものゝ如く見えたので、露

艦は直に發砲したのであるが、漁船は一隻も認めず、随つて砲撃に依つて損害が與へられたとは氣が付かなかつた。漁船が燈火を掲げて居なかつたことは確かである。併し漁船に損害を與へたことは眞に遺憾とする所であつて、露國政府は必ず十分の賠償を爲すであらうと語つた。アッソシエイト・プレス通信員は次に戰艦アレキサンダー三世の一士官ケレトリ公と會見したるに、公は『運送船アナトールは艦隊の先頭に進んでゐたが、突然八隻の水雷艇に包圍せられ、救を求めたので、戰艦艦隊は前進して是等不明の水雷艇に向ひ、退却せよ、然らざれば其國籍を示せと信號したるも、之に應じないのみか、却つて我戰艦艦隊の間に進航し來り、不意に一怪艇より砲聲を聞いたので、提督は乃ち戰艦用意を命じて之に應砲せしめ、其後航行を繼續した』と語り、右の怪しき水雷艇は恐らく日本船なる可く、提督は日本が英國で之を買入れたことを知つてゐると、眞事しやかに附言した。

ロゼストウエンスキーのヴィゴイからの二通の電信を、二十七日露都に於て外務大臣ラムスドルフ伯から英國大使サー・チャールス・ハーディンジに渡された。

第一信——北海事件の原因は燈火を點せず、暗夜に乗じて我枝隊の先頭艦を襲撃せんとしたる二隻の水雷艇の進來に在り。枝隊が探海燈を照して砲撃を開始したる時、漁船に似たる數隻の小汽船を認めたるを以て、枝隊は是等汽船を避難せしむることに努め、水雷艇の見えざるに至るや、

直に砲撃を止めたり。然るに英國諸新聞は、我枝隊が翌朝まで其地點に水雷艇一隻を殘留せしめたるに拘らず、被害船の救助に従事せざりしとて憤慨すと雖も、當時我枝隊には一隻の水雷艇なく、随つて殘留せられたるものなし。故に恐らく右の小汽船の附近に翌朝まで殘留したと云へる水雷艇は、撃沈されざりしも破損の状態に在りし敵の二艇中の一艇ならん。我枝隊が小汽船を救助せざりしは、是等汽船が執拗に我諸艦の順序を亂さんとしたるを以て、右水雷艇と同類ならんと疑ひたるが故なり。彼等の中の或者は燈火を點せず、又他の者は甚しく時を経て始めて點火したり。

第二信——我艦隊は數百の漁船に會したるも、絶えず周到なる注意を以て迎へたり。唯だ夫れ他國の水雷艇と同航せるものに對しては然るを得ず。是等水雷艇中の一隻は影を失ひ、他の一隻は漁夫の言に依れば翌朝まで漁船の群中に留まりたりと云ふ。漁夫等は之を露國水雷艇と誤信して、被害船を救助せざりしことを憤慨すと雖も、是れ實は他國の水雷艇にして、翌朝まで其僚艇たる他の水雷艇を搜索しつゝ留まりたるものなり。恐らくは破損を修理する爲なるか、又は其共謀者に非ざるものに累を及ぼしたることを恐れたるが爲なる可し。然るに若し其地點に漁船ありて、不注意にも我砲撃の災厄に罹りたるものありとせば、本官は我全艦隊の名に於て、此場合の不幸なる遭難者に對し、衷心より遺憾の意を表するものなり。但し斯る場合に於ては、平時と雖

も軍艦の取る可き手段は、之れ以外に出づること能はざるを如何にせん。

此二通の電信は二十六日の夜露都海軍省に到着し、二十七日の朝、外相より英國大使に傳達されたのである。奇怪なことは、露國提督が此報告を爲すに當り、英國新聞の論評を待ち、且つ其報告中に、是等新聞の論評に對して辯解を試みて居ることである。之が爲にロゼストウェンスキーの報告なるものは、事件後數日を遅延して居るのである。

倫敦デーリー・クロニクル紙のヴィゴ通信員が、露國提督と會見したる電報は、一層具體的である。即ち提督は曰く『北海に於ける砲撃中、旗艦内にて二人の負傷者を出だし、一名は僧侶にして片腕を打落された。諸艦を通じて凡て六弾を蒙つた其中で、巡洋艦アウロラの損害は未だ修理されない。』又曰く『露國艦隊が漁船隊に依つて包圍せらるゝと知るや、諸艦は漁網が推進機に絡まるのを避ける爲に、絶えず機關を止め、又屢々航路を漁船に譲つたのであるが、突然アウロラは前方に二隻の水雷艇が全速力を以て艦隊に突進し來るのを認めためたので、同艦は直に之に探海燈を照した處、附近に二箇の浮流水雷があるのを發見した。忽ち水雷艇に對して砲撃命令を發して、其一隻を撃沈し、他の一隻は遁れて漁船の群中に影を失ふた。暫時にして一漁船が探海燈下に入つたから、直に燈火を四十五度の角度に於て上空に向け、以て全艦隊に對し此漁船を砲撃せざることを信號と爲した。斯くて砲撃は前後九分間にて終つた。』ロゼストウェンスキーは露國艦隊が砲撃後、一水雷艇を

殘して漁船の状況を偵察せしめたとの説を否定して『如何なる英國海軍士官と雖も、敵水雷艇の存在を知りつゝ、僅に一隻の露艦を殘留せしむるが如きことのあり得べからざることを解するであらう』と云ひ、更に漁船隊中に日本水雷艇が確にゐたことを主張して、『豫て日本水雷艇が我太平洋艦隊を途中に要撃するとの情報に接してゐた點よりするも、又その夜二隻の水雷艇が現はれて水雷を發射した音響を聞いた點よりするも、其日本水雷艇たることを信じて疑はない』と斷言し、『現に十月十九日、某國領事が日本海軍の動作に就き露國官憲に内報した所に依れば、右領事は一ギリシヤ人某とて、料理人として一日本船に乗込みたるものから、該日本船がスコットランドの一港を出帆してブレストに着したる後、米國又はスウェーデンの國旗を掲げた事、及び此事實から察するに、此船は多分露國軍艦の偵察に従事するものであらうとの報告に接して居るのである』と附言した。

七 密偵の虚報露國海軍を誤る

當時、日本の水雷艇又は日本の手に雇入れた怪しい船が、露國艦隊を途中の海上に要撃せんと圖り、又は其行動を密偵しつゝあるとの風説が、頻々として行はれてゐたことは、右に摘記したポリトウスキーの日記に徴しても明かであるが、茲に最も笑ふ可きは、デンマークでも此風説を事實として信じてゐたことである。即ち十月廿七日コーペンハーゲン發、アッソシエーテッド・プレス通信

員の報ずる所に依れば、デンマーク海軍省は、日本の雇入れた數隻の船が、英國ハルに在りて、北海の露國艦隊を襲撃せんと圖つたと云ふ報道に接し、海軍當局者は此報道を信用してゐたのみならず、スウェーデン船十三隻が、露國艦隊をバルチック海で襲撃する爲め、日本に雇はれたことをも知つたから、直に巡洋艦一隻及び水雷艇一隻を出動して、是等の船を監視せしめ、以て其露國艦隊に接近することを不可能ならしめた、とさへ云ひ觸らすものがあり、其際、右デンマーク水雷艇を、一露國戰艦が夜中敵艇と見誤り、空砲を發したので、デンマーク艇は機敏に國旗を掲げて、辛くも虎口を遁れたのであるが、水雷艇長は右露艦に赴きたるに、多數の實彈が何時にても發射の用意を整へ、甲板の上に積重ねてあつたのを見て、危機一髪の思ひを爲したと云ふやうなことや、又デンマークの艦隊は、露國艦隊が北海に達するまで警衛したと云ふ如き噂が、頻に行はれたのである。此アッソシエーテッド・プレススの報道に對し、ロンドン駐在の我林(董)公使は、日本が露國艦隊を要撃する爲めハルで汽船を雇入れたとか、又はスウェーデン汽船を雇入れたとか云ふ説を以て、全然無根であるとし、若し是等の汽船を雇入れたとすれば、之に多數の日本人を乗込ませねばならぬ筈であるが、當時ハルには魚類の貯藏法を研究する目的を以て、二人の日本人が滞在してゐた許りであるから、斯る流言は世界を欺く捏造説であるとして、全く取合はなかつた。然るに露國外相ラムスドルフ伯は二十七日(ロゼストウェンスキーの電信を手交したる同日)英國大使に向ひ、露

國政府は、二十名の日本士官が、北海事件の數日前ハルに入込み、露艦襲撃を畫策しつゝあつたことを、豫て諜知して居ると明言したと云ふことであるが、然も之に關する何等の實證も提示されなかつた。

實際に露國艦隊が途中の海上で、日本の水雷又は水雷艇の爲に襲撃されることを豫想して、極端に恐怖を抱き、ロゼストウェンスキー提督以下の將卒が異常に神経過敏であつたことは、既記のポリトウスキーの日記に依つて明白であるが、然るに左記の諸報は一層これを明證するものである。

十月二十七日、ドイツ國ゼーステムンデに入港したドイツ漁船ゾンターグは、北海に於て露國艦隊の爲に二時間半に亘つて砲撃せられ、又他の一隻も同様の難に遭つたと報告した。ゾンターグ船長の談に曰く『十月二十一日我々の船はジャットランドの西岸、ホーンズ・リーフの漁場にゐたが、同日午前五隻の大形露艦が其處を通過したに續いて、其夕方更に九隻の露艦と大運送船が北方に現はれた。夜八時半、我々は突然探海燈に依つて照らされ、間もなく最初の砲彈が直き附近に落下した。露艦は毎分八十發の割合を以て四方に發砲してゐた。九時半頃、右の大運送船が砲火を浴びつつ、我方に近寄り來るのを、探海燈の光に依つて見るに、砲彈は同船に近く頻に落下してゐた。更に南方にも探海燈を認められ、我々を砲撃してゐた露艦の附近に、砲彈の破裂するのを見た。幸に我漁船は無事であつたが、十一時頃には最早や砲聲を聞かなかつた』

二十七日、ハルを發してスウェーデン國ゲフレに到着したスウェーデン汽船アルデバランの船長の言を聞くに、同船は二十一日の夜、スカーゲル・ラックで露艦と覺しき一外國巡洋艦の爲に追跡せられ探海燈を以て照らされた。該巡洋艦は速力を早めてアルデバランを追ひ越し、一彈を發射したが命中しなかつた。茲に於て、アルデバランは國旗を掲げた處、巡洋艦は再び探海燈を照らしかけ、數分を経て同船の周圍に亂射したけれども、一發も當らなかつた。船長は船を止め、乗組員全員と共に船底に避難した。間もなく此外國軍艦は暗中に其影を沒したと云ふ。仍つてスウェーデン政府はゲフレ港の官憲に命じ、右アルデバランの船長及び乗組員を訊問せしめたるに、何れも該巡洋艦が發砲し、且つ其發砲は空砲のみではなかつたことを明言し、船長は砲彈が船の附近の上空で破裂したことをも證言した。其砲は速射砲なりしものゝ如く、砲撃の當時軍艦と汽船との間は半溼を隔てゝゐた。船員等は、彼等を砲撃した軍艦が明にアルデバランのスウェーデン旗を認めてゐたと確信して居る。

二十七日、デンマーク國コーペンハーゲンよりの新聞電報に依れば、ノールウェー汽船スカートの船長は、二十三日、英國海峡で一露艦の爲に砲撃されたことを、ロンドンから報告して來た。砲撃はスカートの其國旗を掲揚するに及んで中止され、續いて十八隻の露艦隊が同船を通過したと傳へてゐる。

其他にも露艦の爲に同様の難に遭つた外國船のあることに徴するも、當時東航の露國艦隊が日本水雷艇の襲撃を豫想して、戦々兢々の極、鳥の羽音にも驚く程の神經過敏の心狀であつたことを想像するに足るのである。而して其神經過敏の心狀を遂に極端に破綻したものが、北海漁船撃沈事件であつたのである。

然らば何う云ふ譯で、ロゼストウエンスキー艦隊が日本水雷艇の襲撃を豫想し、徒に暗鬼を抱いて斯る椿事を出來するに至つたのであるかと云ふに、露國政府から巨額の密偵費を引出した間諜の輩が、手柄顔に無根の虚報を政府に報告した其虚報の爲に誤られたのである。日露開戦の際、東京に駐在した露國公使ローゼン男が後日その實狀を語る所に依れば、

『知識階級は殆ど一致して此戦争に反對であつたが、然も曾てクリミア戦争に於ける我敗北が、農奴解放の途を開いた有益な効果を記憶して居るので、彼等は今度も之に依つて立憲的意味に於ける自由主義の改革を導くに至ることを信じ、假令公然は希望しなかつたとしても、寧ろ其再敗を期待してゐた。自由派の新聞は當時の嚴密なる檢閲の爲に、勿論用心深く筆端を慎まねばならなかつたので、法に觸れない程度で亦同様の態度を示してゐた。ノウオエ・ウレミヤの如き少數の主戦主義の新聞は、敵愾心を煽揚せんとして最善の努力をしたが、殆ど効果はなかつた。否な或點に於て、彼等は無限無量の害悪を爲したのである。即ち海軍兵學校の一教師が、バルチック』

ク艦隊の殘艦殆ど全部を擧げて、之を極東に派遣せしめんとして起した半狂的煽動を支持したのが夫れである。該艦隊の實情を熟知し、又艦隊が喜望峰を迂回し、印度洋、支那海を通過した數箇月の後に於ける其状態を理解し、更に斯る状態に於て日本艦隊に邂逅したなら、我艦隊の持つ機會は勝利に非ずして、僅に逃走の夫れであることを理解し得たものは、何人も此煽動を以て純然たる罪惡と認めるの外はなかつた。如何となれば、夫れは之に依つて戦争の運命を回復する機會の幻影すらなくして、却つて我海軍の哀れな殘餘を確實に潰滅せしむるものであり、又數千の勇士を確實に擧殺するものであるからである。愈々艦隊の極東派遣が確定したことが知れ渡るや、日本は我艦隊が歐洲の海上を去る以前に、何處かで水雷艇を以て之を襲撃することを計畫して居ると云ふ風説が忽ち擴がり始めた。其結果として、日本の幽霊水雷艇の動作を探知する任務を、祕密探偵の仲間授けられた。彼等間諜の任務を編成する爲に大金を給せられたのであるから、彼等は其勝手の處分に任せられた金の費消の申譯の爲に、其間諜的活動の成績を、彼等の雇主たる露國政府に頻々報告したのは無理もない。恐らくは斯う云ふ譯で、不思議な日本船が漁船に化けて、ノールウェーの沿岸や、日本の同盟國たるイギリスの海岸の何處かに匿れ、狭い大ベルト海峡の水上か、又は北海の入口カテガット海とスカーゲル・ラックの邊で、我艦隊を要撃せんとしてゐると云ふ風説を生じたのである。是等の奇怪な報告は、無論我海軍内に恐慌を惹起し、艦隊

が狭い大ベルト海峡を通過する時には、細密の警戒を以て取圍まれたのであつた。斯くて艦隊は全く安全に北海に入つた。一切の危険は之で去つたやうに見えた。處が夜に入つてドッガー・バンクとして知らるゝ洲にかゝつた時、怪しい燈火が其前方に見えた云ふ報告があつた。全艦隊の將卒が神經昂奮の狀で働いてゐた際であるから、是等の燈火は立所に日本の水雷艇であると斷定された。乃ち彼等に向つて砲火を開き、暫時砲撃を續けられたが、最後に夫れが凡て間違ひであることが判つた。日本の水雷艇と思はれたのは、ハル港の漁船隊に屬する純英國のトロローラー船で、其中の一隻は撃沈せられ、他の一隻は破損し、二人の漁夫が殺され、更に若干人の負傷者を出したことが、後に至つて知られた云々』(Baron Rosen, Forty Years of Diplomacy, Vol. 1, pp. 249, 250.)

八 始めて危機を脱す

ロゼストウエンスキー提督が、ヴィゴーから本國政府に電信を以て報告した既記北海事件の辯明は、露國外務大臣ラムズドルフ伯から英國大使サー・チャールス・ハーディングに傳達せらるゝと共に、世界に公表せられた。又ヴィゴーよりの新聞電報に依つて、提督の談話が續々英國諸新聞に傳へられた。然もロゼストウエンスキー提督の辯明は一も英國國民を満足せしむるに足らなかつたのみなら

ず、英國の輿論は之を以て英國の國威に對する大侮辱であるとなし、却つて益々その激昂を加ふるの一方であつた。中にも英國海軍は逸早く活動を開始し、國內のドックに修理中の艦艇に其完成を急がしめ、全地中海艦隊をジブラルターに集め、海峽艦隊のジブラルターに在りしものに急遽出動を命じ、本國艦隊に集合命令を發する等、號令一發すれば立所に露國艦隊を殲滅するの威容を示し、戰機既に動くの概があつた。故に露國にして此際もし一步を誤らんか、英露開戦は殆ど避く可からざる状態であつた。而して英露遂に開戦するに至らんか、フランスは露佛同盟の約に依つて、必然その渦中に投ぜざるを得ない。フランス愈々その渦中に投ぜんか、或は歐洲大戰亂の端を茲に發するに至つたかも知れない。果して然らば北海事件の成行如何は、フランス自身に取つても重大であつて、決して徒に之を傍觀することを得ないものであつた。果然、駐英フランス大使カムボンが二十七日に至つて大活動を始め、外務大臣ランズダウン卿と露國大使ベンケンデルフ伯との間を、頻に往復するのが最も注目を引いた。カムボン大使の活動が、何等かの方法に依つて平和的に事件を解決せんとするの努力であつたことは云ふまでもない。翌二十八日に於て、英國の態度が俄然緩和せられ、其夜首相バルフォアのサザムプトンに於ける演説に依つて、危機の漸く通過したことが明に知られたのは、フランスの斡旋大に與りて力ありしことを想像するに足る。

總理大臣バルフォアは二十八日の夜サザムプトンに開かれた保守黨俱樂部全國聯合會に臨み、北海

事件に關する著名なる演説をなした。此演説は事件が今や平和解決の曙光を認めたことを、英國國民及び全世界に報告するものであつた。

『若し此會合が昨晚開かれたら、余は演説の前置に決して有望な語調を用ひなかつたであらう』と云つた如く、前日までの形勢は全く悲觀的のものであつた。然るに形勢一變して、英露開戦の危機を救ふことを得た次第に就てバルフォアは曰く『駐英露國大使は余が茲に次の意味の聲明を爲すことを承認した。即ち露國政府は北海事件を耳にし、直に其最深なる遺憾の意を表し、露國皇帝亦我陛下に對して同様の親電を送られた。又露國政府は最も十分なる賠償を爲す可きことを約し、且つ事件に責任ある將校の何者なるやを明にする爲め、事件關係の艦隊一部をヴィゴに抑留することをも命じ（此言が後に問題の原因と爲つた）是等の將校及び有力なる證人は、艦隊と共に東航することを禁じられた。而して事件の事實を審査する必要あるに就き、露國政府はヘーグ條約に規定された國際審査委員會に、其審査を託することゝ爲つた。但し之は仲裁裁判と何等關係はなく、單に事實の真相を發見する爲に設けられるものである。（此言は後日イギリスの主張と一致しないものとなる）此審査に於て有罪を決定されたものは、露國政府に於て之を訊問し相當の刑罰を加ふ可く、又露國政府は今後同様の出來事の再演を防がんが爲に注意を怠らざることを誓ひ、其爲め全露國艦隊に對し特別の訓令を發し、以て中立通商の危険を防止するであらう』と。バルフォアは之に附言して

「本件を國際審査委員會に附する爲には、豫め少くとも三段の階程を経なければならぬ。即ち（一）ハルに於ける検屍官の検屍。（二）英國商務省の審査。（三）ヴィゴに於ける露國士官の訊問を必要とする。然も謝罪と賠償とは既に露國政府の約した所であるから、今は唯だロゼストウエンスキー提督とハル漁船乗組員の本件に關する報告の、何れが正しいかを決定すれば足るのである」と云つた。

首相バルフォアの演説の結論は右の言を以て盡されるのであるが、然も彼は此機會に露國艦隊及びロゼストウエンスキーに對し、激烈なる攻撃を加ふることを敢て躊躇しなかつた。

「若し漁船事件にして再び繰返されんか、斯る交戦國艦隊は、凡ての中立國が聯合して當らねばならぬ害敵である。前週金曜日（二十一日）の慘事に就て、吾人が月曜日（二十四日）に得た唯一の報告は、漁船の齎したものに過ぎなかつた。然るに木曜日（二十七日）の朝に至つて、事態は一變した。如何となれば、吾人は始めて露國提督からの反對報告を得たからである。併し我漁夫の報告には多くの悲劇が傳へられたが、小説は絶えてなかつたに反して、露國提督の報告に悲劇は傳へられなかつたが、多くの小説があるやうに信じられる。何れが本當の報告であるかは斷言することを得ないが、露國提督の言中、我國家的名譽に攻撃を加へ、且つ英國が中立國たる義務を怠るものと爲すが如き文句がなかつたなら、余は茲に言及することを敢てしなかつたであら

う。英國のやうな島國では、何れの船舶にても其國籍明白であるから、露國は勿論、全世界の目を掩うて、日本の艦船を匿まふが如きは思ひも寄らざることである。斯かる言ひ掛りに對しては最も強硬に抗議せざるを得ない。併し事の真相は、審査會が開かるゝに至らば、自ら白晝の如くに明瞭になるであらう。而して此審査たる、露國皇帝が最も政治家的態度を以て歓迎せられた所である。余は茲に露國皇帝及び露國政府に對し公平なるが爲に、彼等が曾て危機の重大なるを輕視したことなく、否な此危機を幾分にも輕減せんと努力した一事を附言せねばならぬ。

外交の車輪は元來運轉の遅いものである。恐らく露國外交の車輪は殊に遅いであらう。けれども今度の慘事は月曜日に至るまでは、何事も判らなかつた事、露國政府は直に遺憾の意を表し、賠償を約した事、及び犯罪者の處罰を最初から通告して來てゐる事を忘れてはならない。唯だ一つ困つたことは、此暴行を演じた艦隊が遼遠の極東に向ふものであることであつたが、之は幸に除去せられた。併しもう一つ困つたことがある。即ち露國提督が、交戦國艦隊は中立船に對し、公海を天下の危険地と爲す権利がある如く信じて居ることである。今假に暗夜一汽船又は一運送船が、ジブラルターに於て、此露國第二太平洋艦隊に出會つたとせよ。露國提督の信する所に從へば、彼は其船を撃沈する當然の権利があると云ふのであらう。然も斯の如きは中立國の到底忍び得る所ではない。苟も文明の通商にして其安全を保たんとせば、斯る主義に依つて盲動する艦

隊は、必然殲滅せらる可きものである。併し露國政府が此見解に一致し、且つ命令を發して、今度の如く我國民を痛心せしめ、又激怒せしめた慘事の再演を豫防せんとしたのは、余の喜ぶ所である』

更に『ツイ數時間前までは、満足な平和的解決の可能に就て、極めて不安の感を抱いたのであるが、今や露國政府が眞理と正義を維持することの誠意を示し、露國皇帝亦國際間の事件に於て正義の何たるかを公明に判断された』とて、大に稱揚した後、英國政府は露國が到底讓歩することの出来ないやうな難題を吹掛けたのではない、殊に今日露國の國難に乗じて、無法の要求を強制する考は毛頭ない、英國は單に國際間の親交を律す可き原則、即ち正義と公平に訴へたに過ぎなかつたのであるが、其徒勞に終らなかつたのは、一に露國皇帝の先見の明に歸す可きものである事を指摘し、『世界は現に極東に於ける一大戰禍に萬目を集中して居る際、更に英露の二大強國間に戰端を開くことともならば、此最大の不幸が人類に及ぼす災害はどんなであるだらうか。然も一時の形勢は決して之を絶無とはしなかつたのである』而して英國は此不幸を避けんが爲に、絶えず一切の手段を盡したと云ひ、『事件は既に終結したと云ふのは未だ早い、英國が戦争の不幸を見ることなくして、此紛争の一大難關を通過し得た所の條理と正義の精神が、今尙ほ國際間を支配し、随つて慘禍中の最大慘禍たる歐洲二大強國間の開戦を幸に避けることが出来たと斷言するのは、決して過度の樂觀

ではないであらう』と述べたに續いて、

『若し名譽を墜すことなくして戦争を避け得たとすれば、其解決は一に露國皇帝の盛徳を顯示するものに外ならない。英國は露國と殆ど衝突に瀕したのであるが、露國との親交が毫も損傷せらるゝことなくして維持されんことは、余の熱心なる希望であり、余の眞摯なる信念である。余は余の所言は聊かにも兩國の親善關係を害するが如きことなきやう祈りつゝ、重大なる責任觀念と、非常なる難局の下に、此處に演説をしたのである。最近數日來の出来事は、未だ以て去る金曜日の慘事を完全に解決するには至らないけれども、然も一時殆ど絶望と思はれた絶大の危機を脱することが出来たと信ずるものである。余は最近數日來の交渉の結果を以て、英國、露國、歐洲及び全世界の爲に祝するものである』

首相バルフォアの演説に於て、始めて英露及び全歐洲の人心を安堵せしむることが出来た。蓋し英國は此演説の前日(二十七日)ロゼストウエンスキー提督の報告を受取るや、同日直に駐英露國大使ベンケンドルフ伯に對し、外相ランズダウン卿から左の三箇條の提案を示したのである。

- 一、露國艦隊がヴィゴイを出航する前に、露國は英國漁船に加へた暴行責任者の何者であるかを審査する事、事實を明證する爲に、其證言を必要とする者を凡て殘留せしむる事。
- 二、獨立の國際的法院に於て、直に事實の全審査を行ふ事。而して此審査に従事する委員は、關

係兩國及び他の若干國を代表する高級海軍將校より任命せられ、其審査手續は、國際審査委員會に關するヘーグ條約第九條乃至第十四條に準據する事。

三、露國政府は此委員會で有罪と認められた者の處罰を承諾する事。

ランスダウン卿は此提案を示すに當り、「若し是等の要求が承諾せらるゝに於ては、事態の危急を救ふことが出来るであらう。何となれば、露國政府は既に其深甚なる遺憾の意を表し、十分なる賠償を約し、且つ同様の出來事の再演を防止することを誓つて居るからである」と露國大使に附言した。露國政府は此要求に接して、迅速にロゼストウエンスキー提督に對し、北海事件に關係ある軍艦及び將校を、ヴィゴに残留せしむることを電命し、翌二十八日（即ちバルフォアの演説當日）國際審査委員會を開く提案を、露國からも同様に發議したと云ふ形式で承諾せられた。但し處罰の問題に關しては、露國大使は「審査の結果の明白になるまでは、露國將校を有罪とすることは承認し兼ねる。何人に責任と結果が歸せらるゝにせよ、之を決定するには時日を要するから、今日これを討論することには應ずることを得ない」と答へた。併し同日引續き交渉の結果、國際審査委員會で有罪と認められた者は、露國政府に依つて裁判せられ、適當に處罰さる可きことに一致し、尙ほ露國政府は全露艦隊に對して、中立通商を妨害することを禁じ、且つ同様の事件の再演を戒しむる訓令を發することに同意した。而して此訓令は、露國艦隊がヴィゴ出港前にロゼストウエンスキー提督に與へられた。

サザムプトンに於けるバルフォア首相の演説は、實に以上の交渉の結果を、其交渉の成立した日の夜を以て、全英國民に報告したのであつた。

九 駐英露國大使の苦衷

英露の險惡なる關係が殆ど危機一髪に懸り、若し一刻を遷延せんか、形勢忽ち急轉直下するの危急の事態を最も能く理解し、最も痛切に憂慮したものはフランスであつた。英國遂に日本と共に露國と戦ふに至らんか、フランスは露國との同盟條約に依つて、當然露國の味方として起たねばならない。茲に於てフランス外相デルカッセは、事件の最初より熱心に兩國の間に斡旋し、英露の友邦として、公平なる解決の基礎を發見することに苦心努力したのである。ロゼストウエンスキーの報告を手にするや、問題は單に事實の見解の相違に在ること、即ち漁船擊沈の當夜、現場に日本水雷艇の在否を明白にすることに依つて、紛争は容易に解決せられることに氣が付いたので、デルカッセは直に問題をヘーグ條約に依る國際審査委員會に附して、事實の審査を行ふことを兩國に提案するの決意を爲し、乃ちロンドン駐在大使カムボンと露都駐在代理大使ブウチロンに電命して、英國外務大臣ランスダウン卿、露國外務大臣ラムズドルフ伯に右の提案を通告せしめた。(R. de la Penha,

L' Incident Anglo-Russe de la Mer du Nord, (p. 62-66) 英露兩國政府は共に立所に之を容れ、二十七日の夜、ロンドンと露都より同様の提案が相手國に向つて發せられ、相方の電信が途中で行き交うたのであるが、英國より發したものは、前記三箇條の要求を駐露大使ハーディングをして露國政府に提示せしめる訓令であつたに反し、露國よりしたものは、駐英大使をして英國政府の内意を探らしむる程度の試験的訓令であつた。之は露國外相ラムスドルフ伯が此提案を爲すに就て、當時未だ皇帝の絶對同意を得てなかつたので、翌二十八日午後、之を正式に奏上する積りであつたからである。斯かる間に二十八日の朝、英國の提案は露國外相に提示せられ、午後には露帝が之に滿腔の同意を表せられた。而して露國政府の試験的訓令が、ロンドンのベンケンドルフ大使に達したのは二十七日の夜であつたが、一方露國外相は右英國の提案には答へずして、ロンドン大使に第二次の訓電を發し、露帝の名に於て、左の意味を英國政府に傳達することを命じた。

『北海で起つた一切の事件を、出来るだけ明白にすることを希望し、我陛下は事件を徹底的に審査する爲め、ヘーグ條約の基礎に於て、國際審査委員會に附することを有益と認めらる。仍つて閣下は陛下の名に依り英國政府に對し、問題の此解決法を提示せられよ』

之がベンケンドルフ大使から英國外相ランスダウン卿に通ぜられたのは、二十八日の午後であつた。ランスダウン卿は彼我提案の前後に就ては何等争ふことなく、快く露國の提案を承諾したので、

同日夜、露國大使は本國外相に左の如く電報した。

『本官は閣下のランスダウン卿宛電信を傳達した。英國政府は北海事件全部をヘーグ條約の規定する國際審査委員會に附する提案を承諾した』

事件を國際審査委員會に附して、事實の真相、即ち事件の當夜ハル漁船隊中に日本の水雷艇がゐたか否かの實否を明にすることの英國の提案に對し、露國政府が此英國の提案を知らない顔で、又同様の反對提案を爲したと云ふのは、露國が其體面を維持する爲の拵へ事である。英國の提案が露國外相に提示されたのは二十八日の午前であつて、露國の提案が英國外相に傳達されたのは、二十八日の午後であるからである。併し之は敢て争ふ程の問題ではない。兩國をして此解決に至らしめたに就て、フランスの斡旋最も有力であつたことは公然の祕密であり、フランス外相デルカッセと駐英大使カムボンの努力に依つて、危機を脱することを得たのである。タイムスは翌朝の社説に於て『此デリケートな交渉に於て、満足なる解決を可能ならしめた重要な役目を盡したものがフランスであることは、何の祕密でもない。ロシアの同盟國として、又イギリスの友邦として、フランスはセント・ペテルスブルグに於ても、同様の尊敬を以て傾聽せらるゝ賢明穩健の相談者たる地位に在つた。イギリスの憂慮とイギリスの要求した賠償が、フランス固有の正義觀念と其同盟國たるロシアの名譽に對して有する義侠的尊敬心に、悉く一致したことを知るのは、イギリス人に取つて少か

らぬ満足である」と感謝の意を表した。

然も同時に駐英大使ベンケンドルフ伯が、連日に亘つて、晝夜を別たざる努力も、亦これを認めねばならない。殆ど英國の全新聞が筆を揃へて露國を痛撃し、開戦到底避く可からずと思はしめた最大の難局に當り、且つ大使がロンドン市内を通過するを見るや嘲罵をさへ加ふるものあり、自轉車に乗つた一探偵が、何時も大使の外出に尾行護衛する程の状況であつたに拘らず、ベンケンドルフ伯は常に最も冷静にして、最も親善の態度を失はなかつたのみならず、露國が一切の點に於て惡かつたことを、極めて淡泊にランスダウン卿に承認した其率直の態度は、英國政府に多大の好感情を與へたのであつて、事件の平和的解決を斯く容易にしたのは、之を露國大使の功に歸せざるを得ない。

バルフォア首相が演説した二十八日の夜、ベンケンドルフ大使は始めて人に其苦心を語つた。バルフォア首相の演説までは凡て沈黙を守らねばならなかつたので、多くの誤報が新聞に傳へられ、露國は英國に回答せずなど云ふ記事が續出し、現に同日の朝に於てすら、タイムズ及びデーリー・テレグラフ等の大新聞の街頭ビラに『尙ほ無回答』と記したのが、ロンドン市中に散見してゐた如く、全く事實を誤つたものであつたに拘らず、然も彼はジツト之を堪へてゐたのである。露國の回答が疾に發せられてゐたことは、バルフォアの演説に於ても確められてゐるのである。英國の世論が露々

たる間に、兩國の外交交渉は極めて圓滑に進行してゐたのである。殊に世間の一部には、外務大臣ランスダウン卿が平和的解決は絶望であると云つたとか、又は覆面の脅喝を以て解決を試みんとしたとか、傳へるものもあつたけれども、全然無實の虚報であると大使は斷言した。

『然れども余は英國艦隊がジブラルターに居ることを十分承知して居る。若し我艦隊がヴィゴを出たら、恐らく戦争が始まつたであらう。併し幸に今は萬事能く行つた。唯だ一つの難事は輿論の昂奮である。實際交渉中、雙方から何等要求がましいものは出なかつた。之はもつと早く發表した方が良かったかも知れないが、何事も今夜のバルフォア氏に任せることを適當と考へたのである』

バルフォアは其夜の演説に於て痛くロゼストウエンスキーを攻撃したのであるが、ベンケンドルフ伯の云ふ所に據れば、ロゼストウエンスキーは艦隊全體の責任者ではあるが、此事件には決して責任のある者ではない。英國の輿論は頻にロゼストウエンスキーの首を取らんと叫んでゐたけれども、露國政府は彼を以て漁船に發砲した直接の關係者とは認めない。彼は現場から餘程隔つてゐたのである。此事は露國が確然と指摘し、ランスダウン卿も亦これを承認したのである。

『陳謝と賠償に關しては問題はなかつた。露國が快く之を承認したことは、今週の初めアッソシェーテッド・プレスに依つて報ぜられた通りである。唯だ一の引つ掛りらしいものは、處罰の保證

に關する問題であつた。併し問題が悪化しさうに見えた際、恰もロゼストウエンスキーの報告が出たので、事態が一變した。此報告は明に正直であつた。提督の部下が此間違ひをしたのに多分相違あるまい。彼も部下も固より全能のものではないからである。彼等が漁船砲撃の間違ひをやつたことは明白である。但し彼等が水雷艇を見たと思つたのが、間違であるか否かは、證明を待たねばならない。彼等にして全能でないと思つれば、英國漁夫とても亦同様である。英國政府は、露國艦隊の信じたやうに、水雷艇がそんな所に在る可き筈はないと云ふのであるから、雙方の主張は絶対に齟齬するのである。そこで此點を決するのは仲裁々判に依るの外はない』

事件の平和的解決が意外に早く其端緒を得たことは、英露の人心に一大安堵を與へ、多大の満足をも以て迎へられた。

十 言葉の誤解から起つた行違ひ

所謂國際審査委員會の何物であるかを、一言茲に説明する必要がある。一八九九年（此事件から五年前）露國皇帝ニコラス二世の主唱に依り、戰爭を防止し平和を維持するの目的を以て、オランダ國ヘーグに第一回萬國平和會議なるものが開かれた。世界各國の代表者が集つて、貴重なる決議を爲した其中に、國際紛争平和的處理條約と云ふのが調印された。即ち國際紛争を戰爭の非常手段

に訴へないで、平和的に解決するの工風を講じたものである。其解決法として周旋、居中調停、仲裁々判等と共に、茲に所謂國際審査委員會が、同一條約中に設けられたのである。凡そ國際紛争の原因は多々にして、其性質の輕重、事態の大小固より一様ではないけれども、往々事實に對する見解の相違から國家間に葛藤を生ずることのあるのは、例へば國境の界論等に屢々見る所であつて、然も能く實際の事實を調査する時は、忽ち其爭議を解決することが出来るのである。斯う云ふ事實問題から起つた國際紛争を平和的に解決する爲に、其問題たる事實の真相を専ら審査せしむる機關として、ヘーグ條約に設けられたものが、即ち國際審査委員會 (International Commission of Inquiry) である。條約第九條に左の如く規定されて居る。

『締約國は名譽又は重要な利益に關係せず、單に事實上の見解の異なるより生じたる國際紛争に關し、外交上の手段に依り妥協を遂ぐるに能はざりし當事者が、事情の許す限り國際審査委員會を設け、之をして公平誠實なる審理に依りて事實問題を明にし、右の紛争の解決を容易にするの任に當らしむるを以て、有益にして且つ希望すべきことと認む』

但し國際審査委員會は此條文に依つても明なる如く、決して常設の機關ではない。紛争當事國は事實を之に附せんとする時は、雙方から委員を任命して、審査會を組織するのである。其審査會の組織及び權限は、當事國間に特別條約即ち審査條約を以て定め、當事國は自國を代表する代理人を

派遣することを得、また顧問又は辯護人を任命することも出来る。審査は對審の上これを行ひ、委員會は必要に依り證人又は鑑定人を呼出すの職權を持つて居る。審査委員會は公開せらるゝことなく、且つ評議は祕密會に於て行ひ、凡て多數決を以て決定するのであるが、審査の結果たる報告書は之を公開廷に於て朗讀するのである。併し其報告書は單に事實の認定に止まり、何等仲裁判決の性質を有するものではないのであるから、此認定に對し如何なる結果を附するか、即ち此認定に服するか否かは、全く當事國の自由に任ぜられて居るので、拘束力のないものである。國際審査委員會の任務は單に事實の認定に止まる事と、其報告書に拘束力のない事が、仲裁々判と異なる重要點である。國際審査委員會の報告書に拘束力が認められないのは、重大な弱點とせらるゝ所であつたが、併し夫れは國際審査委員會の特色でもある。

北海事件を國際審査委員會に附するの協定が英露間に成立して、兩國の人心大に安堵し、タイムスの如き、バルフォア首相の演説の翌日(二十九日)の社説に於て『英帝國は勿論、全世界が深き安堵と最も熱心なる賛成を以て之を歓迎するであらう』と記した程であるのに、然るに其タイムスが更に翌々日即ち三十一日の社説に於て、忽ち態度を一變し、折角事件を國際審査委員會に附して、平和的解決を期せんとしたものを、露都に於ける英國の敵が密に覆へさんとする陰謀を企て、居ることを指摘し、北海事件は今尚ほ解決せられたのではないと警告したのは、一旦沈靜せんとした人

心を再び驚動せしめたのであつた。

『露都の宮廷内に勢力ある一派が存在して、之が我國に對する最も猛烈な敵對心と、又我國との衝突を急發せしめんとする熱烈な害心とを以て活躍して居ることは、疑ひない事實である。此主戰派は現時稍や君寵を失つたやうであるが、苟も此主戰派にして露國海軍を支配し、且つ宮中最高貴の或者の寵用と支持とを保つ間は、何時その權勢を復活するに至るかも知れない危険がある。而して其巨頭連は遂に或はロシヤ帝國の名譽を挽回することの出來ぬ程の災厄を出來するに至るであらうとさへ思はるゝ自暴自棄的躍起運動に依つて、權勢の復活を企てるかも知れない。否な此躍起運動は、彼等が海軍に於て有する勢力、及び艦隊の將校を自由に賞罰する實力に鑑みる時は、容易に之を行ふことが出来るかも知れないのである。是れ吾人が此悲惨なる事件を以て、吾人の希望通りに確實に解決せられるものと過信して、安心することの出來ないとする一理由である。天氣豫報は晴天であるけれども或は再び大に曇るかも知らない。我條件の完全に應諾せらるるまでは、即ち露國艦隊將校の無罪を再び主張されて居るから、彼等が裁判に附せられて愈々處罰せらるゝまでは、危機に應ずる一切の準備命令を取消すことは、我國に取つて輕舉であり又早計である。如何となれば危機の存在は決して妄想ではないからである』

此タイムスの社説の最後の數行は、事件を審査委員會に附するに就て、英國の提出した何等かの

條件に對し、露國宮廷内に有力な反對のあることを想像せしむるものである。又その條件なるものが、北海事件の責任者を裁判に附し、之を處罰することに關するものであることも想像し得る所である。而して此社説は十月三十日の夜を以て執筆せられたものであるが、實際の事實に於ても、英露の交渉は實に三十日を以て、再度の危機に瀕したのであつた。

蓋し審査委員會の組織及び範圍に就ての交渉は、何等の困難なくして進行したのであるが、茲にロシアの容易に承知しない事情は、英國外相が右委員會に於て北海事件の責任を明にすると共に、其罪責の程度を審査報告することを強硬に要求した點であつた。英國政府は更に三十一日を以て提案を示し、審査委員會は『北海事件に關する一切の狀況、殊に事件の責任の歸する所、並びに其責任者と認められた者に對する罪責の程度を審査報告す可き事』の同意を促したのである。之に對し露國政府は、此提案を以て自國將校の罪過を豫斷するものとなして反對し、『審査委員會の任務は、單に事件の責任を決定するに止まるのだから、委員會の立證あるまでは、ヴィゴイ殘留將校の責任又は有罪を承認することは出来ない』と拒絶した。タイムスが露國は英國の條件を應諾せず、露國將校の無罪を固守して居ると論難したのは、即ち此事實を云ふのである。併し幸にして此争論はロシアの讓歩に依つて一先づ解決することが出来た。此争論は畢竟言葉の誤解から起つたものであつた。即ち英國は、審問の爲めヴィゴイに殘さるゝ露國將校は、責任ある者でなければならぬのであるから、

責任ある所即ち罪責の歸する所であると云ふに對し、ロシアはヴィゴイに殘さるゝ將校は、單に事件の證人たる者に過ぎないのであるから、之に責任又は罪責を豫斷することは不當であると反對するのであつた。併し十一月四日に至つて、露國外務大臣は英國の提案を全部承諾することを回答した。然るに何ぞ知らん、此争論が一週間後再び英露の問題たるに至らんとは。

十一 ヴィゴイ抑留者の數に不満

斯る間に又々英國の人心を興奮せしめた一問題が起つた。それは去る二十八日の夜、サザムプトンに於けるバルフォア首相の演説中に、『露國政府は……事件に責任ある將校の何者なるやを明にする爲め、事件關係の艦隊一部をヴィゴイに抑留することを命じた』とあつたに拘らず、ロゼストウェンスキー提督麾下の全艦隊は、僅に四名の將校を證人として殘した許りで、十一月一日ヴィゴイを出港し南方に去つたことを知つたからである。バルフォアの演説を其言葉通りに信じてゐた英國の公衆は、露國艦隊のヴィゴイ出港を以て、英國との公約を大膽に蹂躪したものとなし、民心再び大に激昂すると共に、不穩の風説滿都に充ち、殊にジブラルターよりの新聞電報が、同地に在る海軍中將チャールス・ベレスフォード卿の率ゐる海峽艦隊が、ロゼストウェンスキーの艦隊をヴィゴイに引き返へさす爲に、戦闘準備を整へて出動したと傳へ、甚しきはベレスフォードは既に露國艦隊を撃沈した

とさへ報ずるものがあつたので、人心の動搖は一時極度に達した。露國大使ベンケンドルフ伯が外務大臣ランズダウン卿を訪へば、英國政府の最後通牒を受けたのだと傳へ、首相バルフォア、ポーツマス鎮守府司令長官サー・ジョン・フィッシャー大將、海軍大臣セルボーン卿、海軍情報部長バットンベルグ公等が密議するを見ては、開戦の謀議を開始したと報じ、露國大使がバッキンガム宮殿に英國皇帝を伺候すれば、退去の暇乞に拜謁したのだと風説する等、流言蜚語、殆ど停止する所を知らざる程の不安な状態であつた。其實、露國大使が英國皇帝を伺候したのは、皇帝から大使が事件解決の爲め日夜の苦勞をいたはり、平和的終結に満足の意を表されたのであつて、バルフォア首相が海軍の巨頭と密議したのは、國際審査委員會の委員の人選を協議してゐたのであり、又露國大使が外相を訪問したのも、委員會の條件を折衝してゐたのであつたにも拘らず、外間では揣摩臆説盛んに行はれ、道路相傳へて開戦の危機既に切迫せりとなし、『一般公衆は明朝目が覺めれば、ロゼストウェンスキーが海底に打ち沈められたと云ふ快報を聞くであらうとの確信を以て、皆々寢床に入つた』と、當時アッソシエーテッド・プレス通信員は皮肉な報道をして居る。斯る險惡な人心の激動に鑑み、英國外務省は左のステートメントを發表して興奮を沈靜せしめんとした。

『露國艦隊がヴィゴを發するに先立ち、露國提督に對し、艦隊の極東航行中、中立船舶に危害又は不便を加ふることを豫防する目的を以て、訓令が發せられた。又露國との協定に従ひ、露國將

校四名はヴィゴに残留せしめられた。兩國政府は現に提議した審査を託す可き國際委員會に關する條件を討議中である』

然れども此ステートメントは興奮せる人心を鎮撫するに十分の効果はなかつた。英國の輿論はロゼストウェンスキーの艦隊をヴィゴに抑留せしめなかつたことに非常に不満であつて、僅に四名の將校を留めて全艦隊が去つて行くのは、露國に事件の審査を眞面目に行ふ誠意がないものとして、再び對露攻撃が猛烈に起りかけたのである。外務大臣ランズダウン卿が十一月九日ロンドン市長就任披露晚餐會——毎年十一月九日はロンドン市長の交代する日であつて、其夜ギルドホールに於て開かる、就任披露晚餐會は、朝野多數の名士、外國大公使列席し、此機會に總理大臣又は總理大臣に代はる可き閣員から、時の最重要問題に就て政府の所見を發表することを慣例とし、此夜の演説は内外に最も注目せらるゝものである——に臨みて、北海事件に關して爲した演説は、實に英國に於ける此人心の興奮を沈靜せしめんと努めたものであつた。ランズダウン卿は極東に於て日露國民の間に進行しつゝある戦争の災害の慘憺たるを見るにつけ、『政府當局者たるものが冷靜を失し又は一時の人氣を博さんとして無益の戦争を引起し、之に依つて其國に苦惱と慘禍を與へたとすれば、之が悔恨に増す恐る可き懲罰はないであらう。然るに今夕この目出度い席上に於て、余は我國の平和が破れざるのみならず、余の豫想する限りに於ては、今後も亦然らざることを諸君に告げること

が出来る。我國は戦争を避くるの幸運を得たに止まらず、嚴正の中立と賢明な國際的處置に依つて、交戦區域を局限することに貢献した。尤も我國も全然不安を免かれたと云ふのではない。最近數日來この國民に未曾有の激動を與へた事件に直面した。十月二十一日の北海事件は英國人に對する攻撃であつて、英國旗に對する侮辱であつた。若し之が故意に出たものであつたならば、其結果は余の熟考を要しない所であつたらう。此事件は悲しむ可き、又一言の申し開きも立たない大過失であつた。併し最近英國政府の接受した證據に徴するに、本件の事實に關して露國政府が誠意に於て信する所と、英國政府が想像する所との間に相違があつたことが、明白にされたことを茲に附言せねばならない。併し兩國政府は各々その主張の正當であることを自信するものであるから、此事情の下に與へられた唯一の手段を採用するに決し、事件を獨立公平なる國際法廷に附することを協定した。而して之に關する主要問題の協定を遂ぐる事、即ち之をヘーグ條約の下に附議するの條件は英國の承諾する通りのものである事を決するに就て、何等の困難も見なかつたとて、國際審査委員會に言及し、之に關して種々の不正確な記事が新聞に現はれて居ることを訂正せねばならぬと爲し、委員會の任務を大略説明した後、『茲に世間に唱へらるゝ非難に就て、極めて重要な點が残つてゐるので、余は之に關して一言せん』とて、『諸君の御承知の通り、露國將校若干名を審査委員會に出頭せしむる爲め、ヴィゴイに抑留してあるが、其抑留した將校の數が少いと云ふので、之を驚くも

のがあることは周知の事實である。併し是等の將校を選定するの責任は英國の負ふ所でないことを、吾人は強硬に主張するものである。其責任は露國政府の負ふ可きものであつて、政府の信する所に依れば、之を露國政府に免することは一大失策である。併し一兩日來英國は露國政府から右抑留將校は本事件に實際に關係した者であることの明確な保證を得、且つ若し國際委員會の審理の結果、他の將校も亦有罪であることが明白とならば、是等他の將校も適當に處罰せらるゝことの追加保證をも得た』と大に辯明し、更に英國は十分なる遺憾の表意、十分なる賠償の約束、事件再發に對する保障、有罪者處罰の誓言を得たと附言した後、ランスダウン卿は列席者に向つて、『之れ以上を得ることが可能であるか』と假問した處、滿場一人も之に應ずるものなく、彼の演説は極めて冷淡に遇せられた。其夜の外務大臣の所説は、恰もロシヤの爲に頻に辯疏するものの如くに聞え、頗る不評判であつたと稱せられる。即ちランスダウン卿の演説も亦露國艦隊のヴィゴイ出港に對する國民の誤解を一掃するの效果はなかつたのである。而して此誤解は實に先のバルファアの演説から起つたのであつた。

十二 問題となつた英文協定草案の佛譯

ヴィゴイに於ける事件關係者の査問は三十日より連日續行せられ、其結果、責任者としてクラド大

佐以下四名の將校が同地に抑留せられ、全艦隊は極東に續航して差支へないことに就ては、英露兩國政府の間に完全な諒解が付いたのであるが、然るに續いて兩國政府間の審査委員會設置の條件に關する交渉に就き、又々難問題に遭遇した。

十一月十二日、駐露英國大使サー・チャールズ・ハーディンジは、露國外務大臣ラムスドルフ伯から委員會に關する兩國協定の英文草案の佛譯と稱するものを受取つた。其際、ラムスドルフ伯は協定條約前文を訂正した外、英文案第二條の用語を多少變更したと附言した。英國大使は其佛譯なるものを一見するに、英文條約前文に爭議をヘーグ條約に規定されたものに『類似する』(analogous) 國際審査委員會に附するとある其『類似する』と云ふ文字を、ヘーグ條約に規定するものに『準據して』(conformément) と訂正し、又第二條中から『罪責の程度』なる文字を削除されてゐたのである。仍つて英國大使は、露國外相は去る十一月四日英國の原案を全部承諾したではないかと、即座に抗議すると共に、本國政府の訓令を待つて返答する旨を告げた。十四日に至つて英國外相より訓令到來し、英國政府は協定の變更に同意することを得ない、飽くまで原案を固執せよと命じた。露國政府が英國案に變更を加へた理由は、國際法の大家マルテンスを首席とする露國法律學者達に本案を諮詢した結果、第二條の原案は國際審査委員會の任務に關するヘーグ條約の規定の意味に反することを發見したと云ふのである。然るに英國外相は英國政府の提案する委員會は、ヘーグ條約

に設けたものと『同一』(identical with) ではない、それに『類似する』ものを意味するのであると指摘した。蓋しヘーグ條約に設くる委員會なるものは單に事實の認定を爲すに止まり、其報告は仲裁判決の性質を有するものではないのであるから、若し北海事件の爭論を露國政府が云ふ如く、ヘーグ條約に厳正に準據した國際審査委員會に附するものとすれば、之をして事件の責任者に對する『罪責の程度』をも決せしめんとするのは、其本來の任務たる事實の認定以上に及ぶのである。即ち露國外相は事實の證明と責任者の罪責とを分離せんとし、斯く英國原案の前文を訂正せんと試みたのである。然るに英國政府は之と全く反對に、事實の證明と共に之に對する責任者の罪責をも明白にすることを期し、委員會の決定を以て仲裁判決と同性質のものたらしめ、露國をして其決定に服せしめんとするのであるから、此國際審査委員會に對してヘーグ條約に認むる以上の權能を與へんとするのであつた。之は先にバルフォア首相がサザムプトンの演説に、國際審査委員を以て仲裁と關係なく、單に事實を發見する爲に設けるものだと言明した所に反するのであるが、然も英國は責任の問題と罪責の問題は、共に事實の問題であるから、國際審査委員會の本來の任務たる事實問題の審査に外ならないと云ふに對し、露國は責任の問題は事實の問題たるも、罪責の問題はさうではないと反駁する等、此爭點は前後十餘日に互つて論議されたのである。併し結局露國は之を以て誤解に出たものとして英國の主張を承認し、十一月二十五日英國大使と露國外相との間に協定

正文を作製調印するに至つた。(R. de la Penha, L' Incident Anglo-Russe de la Mer du Nord, pp. 66-67) 北海事件を審査す可き國際審査委員會の組織及び權限に關する『セント・ペテルスブルグ宣言』なるもの即ち是れである。宣言の要領左の如し。

一、國際審査委員會は五名の委員より成り、其内二名は英露海軍の高級將校より各々一名宛任命し、他の三名は佛國及び米國政府に求めて、兩國海軍高級將校を各々一名宛任命し、第五番目の委員は右の四名の委員の合議に依り選定する事。四名の委員間に合議成らざる時は、オーストリア皇帝に其選定を託す事。(第一條)

二、委員會は北海事件に關する一切の狀況を審査竝に報告する事。殊に責任の所在及び責任が立證せられたる場合、英露兩國の臣民又は他國の臣民の負ふ可き罪責の程度に關する問題を審査並びに報告する事。(第二條)

三、委員會は巴里を開催地とする事。(第五條)

四、委員會は總て多數決に依つて決定を爲す事。(第七條)

斯くして事態は始めて危機を脱し、平和的解決の曙光を認められた。然も事を茲まで運んで來た當局者の苦心は非常なものであつた。前記の如く事件を國際審査委員會に附することの協定が愈々完全に成立したのは十一月二十五日であつたが、二十九日、露都駐在の英國大使ハーディンジに英國

外相ランズダウン侯が送つた電信は、當時の危急なる狀況と之に處した當局者の苦心とを、最も能く明にして居ると共に、尙ほ今後の形勢の變化に多大の不安を感じてゐたことを示すものである。

『夫れは心配な一週間であつた——貴下以上に夫れを能く知るものはない。併し吾々はうまく通過したと自分は思ふ。ブツ／＼云ふものも幾らかあるけれども、うまく通過したと云ふのが、一般の意見である。』

木曜日の晩には和戰の賭は殆ど五分々々であるやうに見えた。貴下が之に處するに分別と機敏とを以てしたことに對し、如何に余が感謝してゐるかを、茲に再言することを許せ。貴下の最初の諸電信は、貴下が我訓令を正確に豫知してゐたことを示してゐるのである。

併し余は尙ほ今後を心配してゐる。今回はロシア人を厄介拂ひしたけれども、貴下にしても余にしても、又ラムスドルフ(露國外相)にしても、ベンケンドルフ(駐英露國大使)にしても、どうも二度目の厄介拂ひは出來まい。余はロシア人等が其愚昧又は片意地から、更に或は其兩方から、も一度何か仕出かすことはあるまいかと云ふ危懼の念を、去ることが出來ない。

之に就て余はベンケンドルフに、書信を以て熱心に通じて置いたが、貴下も必定それをラムスドルフに力説せらるゝことならん。併し不幸にして其處いらの露國海軍々人等は、ラムスドルフの云ふことを聴くものではない』(Lord Newton, Lord Lansdowne, p. 317)

右の電信に木曜日とあるのは、十一月二十四日のことで、事件と國際審査委員會に附する最後の協定の漸く成立した日(二十五日)の前日であつて、英露談判の危機の最も高調に在つた日である。前記ランスダウン侯の電信から一週間を経て、ハーディンジ大使からランスダウン外相に宛てた電信は、一層能く當時の險惡なる情勢を明にするものである。

『前週の木曜日に於ける空氣は、電氣を以て打たれてゐた。刑事被告人の地位から告發人に急變して、ロシア人の頭は全く混亂した。彼等は最も危險な精神状態であつた。彼等は若し我と開戦するならば、バルチック艦隊を失ふことは十分覺悟してゐた。併し彼等は背水の陣を布き、總動亂に臨んで能く一切を犠牲にすることを決心してゐた。其翌日ラムスドルフは此事を余に語り、且つ貴下(ランスダウン侯)にても、又は余にても其日苟も威嚇的一語を用ひたらんか、戦争は必至の勢であつたと告げた。ラムスドルフは云ふに、彼は戦争は大嫌ひであるが、我よりチョットの威嚇でも試みんか、彼は主戦派に讓歩するの外はなかつたであらうと。バルチック艦隊の航海が無謀の暴舉であることは云ふまでもなく、何者も夫れが極東に達するであらうとは、殆ど信じてゐないし、大多數の者は其運命に就て冷淡無關心である。併し一方に印度に進軍の成功することは瞬時も疑はず、之を以て我を反省せしむる容易の手段であると信じて居る。彼等の現時の精神状態では彼等をからかふのは安全でないといふは考へる。故に英國艦隊が露國艦隊に付きまといふのは

(若し事實とすれば)挑戰的でもあり、又中立船に關して與へられた訓令(露國政府がバルチック艦隊に與へた中立船尊重の訓令)に、我國が信用を置かないやうに見えるから、夫んなことはしなうことを祈る』(Lord Newton, Lord Lansdowne, pp. 317, 318)

此ハーディンジ大使の電信に依つて、露國は海上に於てバルチック艦隊を犠牲にするも、對英一戰を辭せず、陸上に於て印度に侵入し、以て能く英國を屈伏せしめんと企圖せる決意の明白なるを見る可く、危機實に一髮に懸つてゐた當時の切迫せる實狀を察し得るのである。

十三 英國艦隊の爲めに包圍さる

十月二十六日以来ヴィゴにゐたロゼストウェンスキー艦隊は、前記の如く北海事件に責任ある四名の將校を同港に残して、十一月一日朝抜錨し、モロッコ國タンジールに向つて愈々出港したのである。ヴィゴに留まること前後六日間、ロゼストウェンスキー提督は北海事件に關する本國への報告、新聞通信員との會談、北海事件責任者の査問、本國政府への請訓又本國政府よりの來訓、ヴィゴ一淹留に關してスペイン政府との交渉等の爲め殆ど連日忙殺された。元來國際法に據れば、交戦國軍艦は中立港に留まること二十四時間以上に及ぶを得ないのであるが、露國軍艦のヴィゴ碇泊は、北海事件責任者の査問を行ふ特別の事由があつたので、其碇泊期間の延長に關し、スペイン政府の承

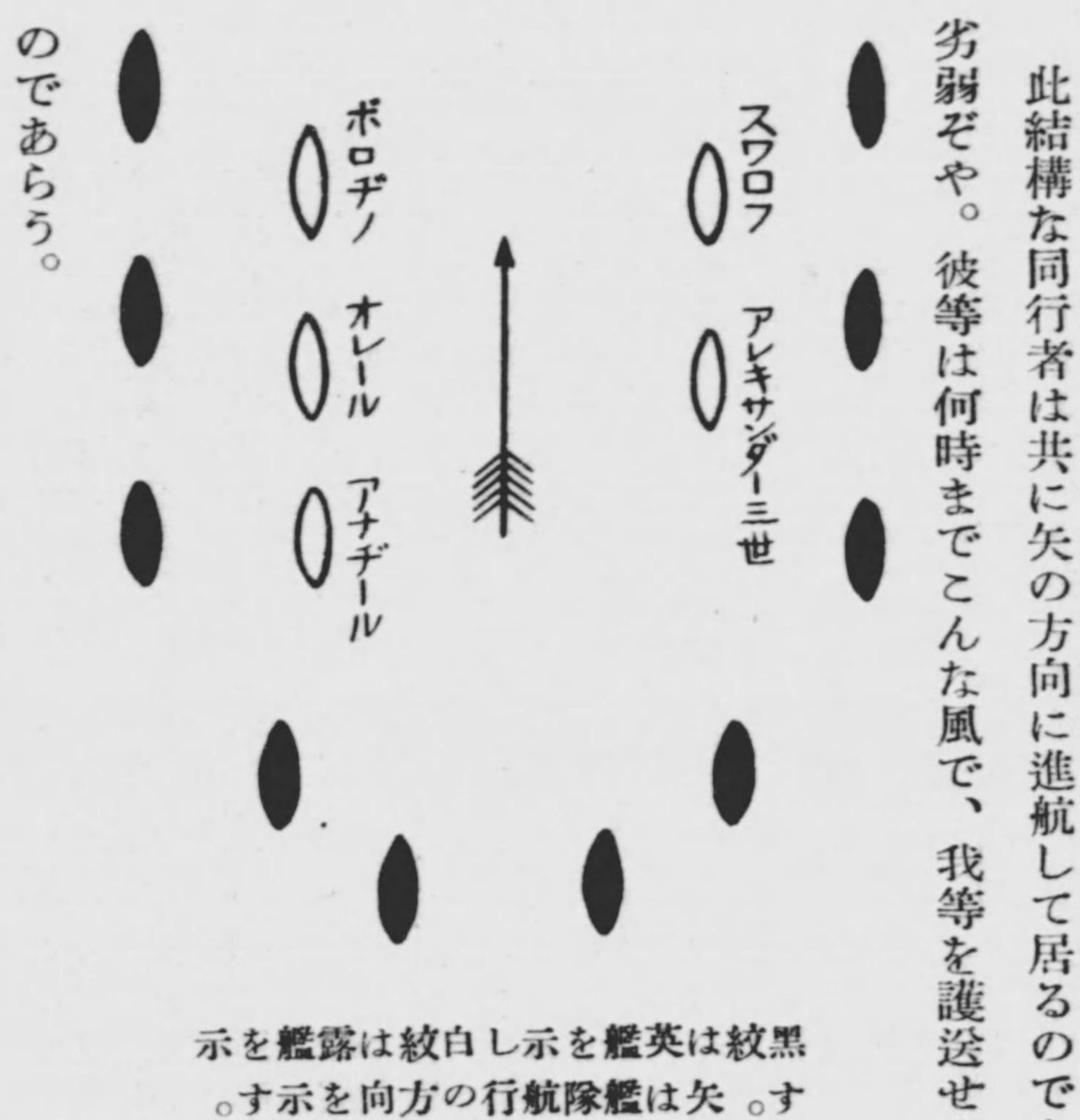
諾を得なければならなかつたと同時に、スペイン政府亦これに關して列國の了解を得ることを必要と認め、其了解の下に露國艦隊は右査問の終了するまで碇泊を許されたのである。其間英國軍艦は屢々ヴィゴの港内港外に出沒し、ロゼストウエンスキーとの間に訪問を交換する等、絶えず露國艦隊の動靜を警戒してゐたが、愈々十一月一日を以て露國艦隊の出航するや、優勢なる英國海軍の一艦隊は、日夜これを追尾しつゝ、恰も露國艦隊を遠巻きにするの隊形を以て南下し始めた。前節に掲げたハーディング大使の電信の中に、『英國艦隊が露國艦隊に付きまとふ云々』とあるは、此事を云ふのである。ポルトウスキーの東航日誌は、此英國艦隊の行動を不安と不快とを以て記して居る。

『十一月一日ヴィゴからタンジールに向ふ途中に在り。昨夜前進の命令が下つたので、今朝七時我枝隊は拔錨してヴィゴ灣を出發した。——今夜十時頃、我艦隊を追尾し來る怪しき船があつた。彼等は今や我等を包圍し、我等と同航路を取つて進んで居る。其數凡そ五六隻である。一時海上全く眞暗となつた時、是等怪しき船は我等に對して頗る侮蔑的態度を示し、或は其全船隊の燈火を滅し、或は我艦隊を追ひ越し、或は追跡し、或は接近し來る等、様々の行動を演じた。今我枝隊は彼等の包圍中に行進しつゝある。此船隊の一隻が探海燈を以て他の一隻を照した際、我等の認めた船形より察するに、彼等は軍艦なるが如し。我等は彼等艦隊の行動、燈火、信號、彼等と出會つた地點等、一切記録す可く命じられた。乗組員には釣床を與へられず、皆大砲の側に眠

つた。夜色稍や明るくなつて星影現はれたるも又屢々密雲に閉された。——今我等を包圍しつゝある船は、英國の艦隊に相違ない。黎明に至らば其影を匿すならん。

十一月二日——英國艦隊は終夜我等に尾行して來たが、今や彼等は我艦隊の兩側に別れて進航しつゝある。——我艦隊が進航を停めた時、英國艦隊は之を以て敵對的示威運動と誤解したものの如く、彼等は迅速に我枝隊の後方に集合して戰鬥隊形を作つた。噫、此惡漢！ 彼等は露國の永久の敵である。狡猾なる海上の勇者として到る所に傲慢無禮を働き、世界は彼を憎めども、皆恨みを呑んで忍んで居る。御身は如何にスペインが憤慨して英人を誹謗して居るかを聞いたなら果して何と感ずるであらう。彼等は鐵拳を固め、殆ど口から泡を吹かんばかりである。若し爲し得べくんば、彼等は英人に對して随分卑劣な手段を試みることをも敢て辭せないであらう。此「海上の王者」が我航海に加へた妨害は果して幾許ぞ。有らゆる妨害は皆英人の仕業である。

夜——英國艦隊は終日我等に隨伴し、日没するや、再び圓形を成して我等を包圍した。併し彼等は燈火を點じて航進し、昨夜のやうな惡戯は演じなかつた。若し何事もなければ我等は明朝三時タンジールに到着するであらう。一時間前ポルトガルのセント・ヴィンセント岬を通過した。此沖は曾て大海戰のあつた古戰場である。——我等に隨伴せる英國巡洋艦隊は其數を加へて今や十隻となつた。我等は全く彼等の包圍中に進航しつゝある。彼我の隊形は次頁の圖の如し。



此結構な同行者は共に矢の方向に進航して居るのであるが、英國艦隊に比べて如何に我艦隊の劣弱ぞや。彼等は何時までこんな風で、我等を護送せんとするのであるか。ジブラルターまでか、或は更に其先きまでか、乗組員は又も服を脱せず再び砲側に横臥した。彼等に取つては堪へ難い苦痛である』

斯くてロゼストウエンスキーの艦隊は翌十一月三日午後、モロッコ國タンジールに到着した。ポルトウスキーの日記は、其後英國艦隊の追尾に就て記してゐない。恐らく英國艦隊は前夜その航路を轉じ、ジブラルターに向つた

十四 巴里に開かれた國際審査委員會

十一月二十五日英露間に協定された審査條約、即ち所謂セント・ペテルスブルグ宣言に依り、北

のであらう。

海事件の國際審査委員會は愈々十二月二十二日を以てパリに開かれた。審査委員の顔觸は、

英國——海軍中將サー・ルウイス・アンソニー・ポーモント。曾て太平洋艦隊司令長官たり、又前年まで濠洲艦隊司令長官であつた。

露國——最初海軍大將カヅナコフを任命したが、病氣の爲め辭任したので、後日海軍中將ドゥバソフ之に代はる。

佛國——海軍中將フルニエー。曾て東京問題に依り清佛交戦に及んだ時、一八八四年佛國支那海艦隊司令長官であつたクルベール中將の麾下に屬し、當時尙ほ一中佐であつたが、選ばれて特命全權の重任を帯び、天津に於て李鴻章と折衝し、講和條約を締結した外交振りは、歴史に傳へらるゝ有名な話である。其後極東に於ける佛國艦隊の司令官を経て本國海軍大學校長に轉じ、更に地中海艦隊の司令官たり。北海事件の國際審査委員に任命された時は、佛國の北アフリカ海軍根據地巡察の任に在つた。旋風と颶風に關する名著及び羅針盤調節機の發明あり。フランス海軍中の名將であつた。

米國——海軍少將デヴィス。米國南北戦争の名將海軍大將デヴィスの子にして、米西戦争に臨んで實戦の經驗あり、其後海軍觀測所長であつた。最初本事件の國際審査委員として米國政府はデューー大將を指命したのであつたが受けなかつた。

審査條約の規定する所に従ひ、右四名の委員は第五番目の委員たるものを協議して、奥匈國海軍中將フォン・スパウンを指命することに意見一致し、且つ佛國委員フルニエール中將を審査委員長に選舉して、正式に審査委員會が成立したので、翌年（一九〇五年）一月九日から愈々委員會を開くこととなつた。

一月九日から二十日までを、審査手續に關する規則の協議に費したのであるが、其審査手續規則は後年（一九〇七年）の第二回ヘーグ萬國平和會議に於て採用せられ、現行國際紛争平和的處理條約中、國際審査委員會の手續規則の大部分は、實に之に據つたものである。續いて二十五日から二月二日までの間に十三回の公開廷を開いて、新聞記者の入場を許し、専ら證人の訊問を行ふた。其訊問の結果と英露の各調査とを基礎として、英露雙方の政府代理人（英國は前在佛大使館書記官オペイルン、露國は在佛大使館法律顧問ネクルドウ）が委員會で主張した要點は、

英國側——（一）一九〇四年十月二十一日の夜には英國漁船隊の中にも、又露國艦隊の附近にも、一隻の水雷艇も、又一隻の驅逐艦もゐなかつた。露國將校が此種類の軍艦がゐたと云ひ、又は接近して來たと云ふのも、又彼等が露國艦隊を襲撃し、又は襲撃せんと企てたと云ふのも、皆誤である。

（二）露國艦隊の發砲を正當とする何等十分の理由を認められない。又露國艦隊は漁船隊に損害を與ふることを避く可き砲撃の指揮及び統制を失ふてゐた。又その砲撃は不當に長時間に亘つて行はれた。

（三）露國艦隊は漁船の負傷者及び遭難漁船の救護を行ふのが當然であるのに、之を行はなかつた。

（四）漁船の乗組員にも又漁船の監督者にも何等落度はなかつた。

露國側——（一）一九〇四年十月二十一日夜の露國艦隊の砲撃は、艦隊司令長官の軍事的義務を合法に遂行する爲に命令され、且つ實行されたものである。

（二）其結果としてロゼストウエンスキー提督にも又その部下にも何等の責任はない。英國側の主張は主としてハル漁船隊の證言を根據としたものであり、露國側は専らロゼストウエンスキーの報告を敷衍したのであつた。即ち英國側は「同夜、漁船隊の間には露國艦隊に屬するものゝ外、如何なる軍艦もゐなかつたし、又それ以前に漁船隊の何者も一隻の軍艦をも認めなかつた。又漁船隊のどの船内にも如何なる軍用材料をも有してゐなかつた。更に當時北海には如何なる日本軍艦もゐなかつたし、漁船隊のどの船内にも日本人は一人もゐなかつた」と云ひ、且つ之を證明する爲にフランス、ドイツ、デンマーク、オランダ、ノールウェイ、スウェーデン及び日本の港に於て、日本が水雷艇の購入又は艤裝したことを聞かず、又當夜ドッガー・バンクの近海に此種の軍艦の

ゐたことも聞かないと云ふ各國政府の證言を添附した。之に對し露國側は日本がヨーロッパの水上で、露國東航艦隊を襲撃する計畫あることの信用す可き情報に接してゐたので、艦隊は北海を通過するに際し、其安全を確保するに適當の手段を執るの必要があつた。露國艦隊が見たと云ふ水雷艇は、露國自身の水雷艇であると傳ふる者があるけれども、露國水雷艇は艦隊の眞先きに二列に分れて進航してゐたのであるから、砲撃の當夜露國水雷艇が漁船の間に存在する筈がない。然るに日本水雷艇と信ぜらるゝ他の水雷艇が現場にゐたことは、疑ふ可からざる證據に依つて支持せられる。即ち『夜半を過ぐるこゝと五十五分の頃、北緯五十五度十八分、東經五度四十二分の地點に於て、露國艦隊の最後枝隊の先頭に立つてゐた旗艦クニヤーツ・スワロフは其行手に燈火を消し、大速力を以て艦隊に接近し來る二隻の小艇の船影を認めた。仍つて全枝隊は直に探海燈を照し、右の怪しき二艇が砲撃距離内に來るや否や、其水雷艇であることが確められたので、艦隊は即時彼等を砲撃した』後間もなく探海燈は漁船を照明し、殊に其若干隻が艦隊の航路の前程に在るのを發見したから彼等が砲射距離内に在つて危害を蒙むることのなきやう一切の注意を爲したけれども、『然も艦隊が現に瀕しつゝある極めて明白なる危険の恐れと、此水雷艇の襲撃に對して、自ら防衛するの切迫せる義務は、假令ひ漁船は勿論、艦隊自身の軍艦を砲撃するの危険が明白であつても、尙ほ且つ發砲の繼續を餘儀なくしたのである。』併し砲撃は水雷艇が影を失ふに至つて止められ、前後十分間以上に

は及ばなかつた。又露國艦隊が遭難船を救護しないで其儘續航したのは、襲撃の不安に依る軍事的必要からであつて、決して冷淡無情に因るものではない。以上の理由に依り『ロゼストウェンスキ』提督は彼に託された艦隊の安全を保護し、其保全を保持する重大な責任を負ふものであることに鑑み、彼が爲した通りに行ふのが、其權利であるのみならず、絶對の義務であつた。即ち彼は中立國の臣民たる害意なき漁夫に危害を加ふる恐れあることは、明に知つてゐたけれども、彼は其艦隊を襲撃した水雷艇を破壊する爲に、其職權内に於ける一切の手段を行ふの止むなきに至つたものである』と抗辯したのであつた。而して審査會に證人として出頭した露國將校は、何れも實際二隻の水雷艇を見たを稱し、露國側は是等證人が海軍高級將校であつて、一切の事實を直接に親しく知つて證言するのであるから、其證據は正確有力であり、又優れたる道德的價值を有するものであることを力説し、更に英國側は水雷艇がゐなかつたと單に消極的に否認するに止まるに反し、露國は専門家に依つて其存在を積極的に證明するのであるから、立證上の確實性は自國側が有力であると自負したのである。

十五 大 國 圖

國際審査委員會は二月十三日以後、慎重なる審査を遂げたる結果、二十五日を以て其報告書を完

成した。

報告書は露國艦隊が本國リバウを出航して北海ドッガー・バンクに至る間、其航行中にも、又投錨中にも、水雷艇の夜間襲來に對して、極端なる警戒を爲し、豫て露國政府は艦隊東航の途中に於て敵が之を要撃する計畫ありとの頻々たる情報を得て居り、敵は多分水雷艇を用ふるであらうとの臆測を抱いてゐたので、其警戒は當然のことであつたけれども、艦隊所屬の一運送船カムチャッカが偶々機關を破損して遙に落伍した時、當夜一スウェーデン船と其他の國籍不明の船に出會つたのを誤認して、カムチャッカ指揮官が水雷艇の爲に包圍攻撃を受けたと無線電信を以て通報したので、さなきだに神經過敏なりし艦隊司令官を驚かしたのが、北海事件の副因を爲したのである。(同夜カムチャッカは機關を破損して落伍した上に、戰鬥力も微弱であつたから、一層戦々兢兢として航進して居る際、八時頃スウェーデン船アルデバラン其他の不明の船影を見て驚き、狼狽して之に發砲したのである。八時四十五分カムチャッカ指揮官は無線電信を以て水雷艇の爲に包圍攻撃を受けたと報告したので、此時、五十哩も隔たつてゐたロゼストウエンスキーは、其枝隊が同様の襲撃を蒙むらんことを恐れ、十時、信號を以て水雷艇の攻撃に對する警戒を嚴重にすることを命じたのである。而して果して其襲撃は一時半に起つたと、露國側は主張するのである)英國漁船隊の状態には何等平常と違つた所なく、彼等は燈火を點じ、慣習に従ひて狼煙の信號を以て網を曳いてゐたのであつて、現に

露國艦隊の他の枝隊は無事に漁船隊の間を通過し、何等怪しきことを認めたと云ふ報告を爲してゐない。初めて騒ぎ出したのはロゼストウエンスキー提督の旗艦スワロフ其者であつて、其直接の原因は漁船隊長の發した綠色の狼煙であつた。然も其狼煙は彼等の慣習に従ひ、漁船隊が風上に右舷を向けて網を曳くことの信號であつた。時に十八乃至二十ケーブルの距離内に一隻の船影が現はれ其船が無燈火であつたのを怪しみ、警戒の當番が、一水雷艇の高速力を以て航進し來るものと誤認し、忽ち之に發砲したのである。以上の事實に徴し、審査委員會過半数の意見は「漁船に加へた砲撃の行爲及び其結果に對する責任はロゼストウエンスキー提督に在る」と云ふに一致したと報告し、更に砲撃の正當であることを主張する露國側の所説に對して、報告書は「委員過半数は、露艦が發砲した目標の何者であつたかを明白にす可き確な材料を露國側は提示してゐないと認める。之に反して漁船は何等敵害行爲を犯さなかつたものと全會一致で認むるものであつて、又委員過半数は漁船隊の中にも、又その附近にも一隻の水雷艇のゐなかつたことを信するに依り、ロゼストウエンスキー提督の發砲は正當ならざるものである。但し露國委員は此過半数の意見に同意することを拒み、發砲を挑發したものは、敵害の目的を以て露國艦隊に接近し來れる怪しき船に相違ないとの所信を陳べた」と記し、此夜半攻撃の目標と爲つたものは、恐らく前進枝隊中の或軍艦が旗艦スワロフより後れて來たのを、スワロフが氣が付かなかつたのであらうと推察した。(英國側は露國艦隊の

最初に認めて砲撃したのは、己のアウロラとジミトリー・ドンスコイであつて、アウロラの如きは數發も命中して居ると有力な申立を爲して居る。併し委員會は左舷に於ける砲撃の時間に就ては報告が不十分なので、何等決定的意見を得なかつたけれども、右舷に關しては露國側の所見よりも、必要以上の時間に互つたやうであると云つて居る。但しロゼストウエンスキーの執つた警戒及び豫て發したる命令が（警戒當番士官は水雷艇の明白且つ急迫の攻撃ある場合には、發砲することを許されてゐたのを云ふのである）戰時特に當時の状況に於ては決して過當のものでなかつたことは、委員過半数の認める所であつて、又彼は事件の最初より最後まで、漁船と認めたものを艦隊から砲撃することを防止する一切の手段を親しく講じたこと、委員會全員は承認したのみならず、更に全員の意見は事件前後の情況に鑑み、該枝隊の蒙る危険に就て不安を感じてゐたのであつたから、ロゼストウエンスキー提督が漁船を救護することなく、依然艦隊の航進を續けたのは止むを得なかつたことである。併し同時に委員會の過半数は、艦隊がドーヴァー海峡を通過する際、最寄りの接海國官憲に向け、漁船隊の附近に發砲した事、國籍不明の船が救護の要ある事を知する注意を怠つたのは遺憾であるとの意を表明し、報告書の最後に於て、然も右の判定は決してロゼストウエンスキー提督又は艦隊乗組員の勇氣又は人情の缺乏を非難するの意味ではないと附言した。（R. de la Penha, L'Incident Anglo-Russe de la Mer du Nord, pp. 177-186）

即ち報告書に云ふ所を要約するに、（一）北海事件を引起した根本の素因は、ロゼストウエンスキー以下露國艦隊將卒の精神状態に歸せらるゝのであつて、本國出發以來日本水雷艇の襲撃を恐怖するの念、片時も去らず、殆ど風聲鶴唳にも驚くの實狀であつたことは、先に引用したポルトウスキの日記に徴しても、明に想像せられた所である。

（二）斯る精神状態で航行して居る内に、武装の劣弱なる運送船カムチャッカが機關を破損して艦隊から遙に落伍したのであるから、一層同船は其心細さと恐怖心を加へたのである。事件後、カムチャッカは艦隊と共にモロッコのタンジールに入つたのであるが、同船の無線電信技師オランダ人クイなる者が同地から發した書面を、阿姆斯特ダム發行のテレグラフ紙（十一月十九日）に掲げられたのを見るに、カムチャッカはデンマークの北端スカーゲンで石炭積込み中、日本の購入した四隻の水雷艇が最近デンマーク沿岸を發したと云ふ無線電信を受取つた。カムチャッカはスカーゲンを出た時、巡洋艦二隻に依つて護衛されたのであるが、其夜、濃霧の爲め護衛軍艦を見失つた。次の夜は天氣清明なりしも、八時を過ぎた頃、四隻の怪しき船が高速力で航進し來るのを認めた。そこで發砲用意の號令が下り、カムチャッカは是等怪しき船に航路を變ず可きことを警告する爲め數發の空砲を發した處、彼等は之に應ぜず、愈々接近し來るので、カムチャッカは之に猛烈な砲撃を開始した。其時二隻の水雷艇が砲火を横切つて去つたのを見た。之はデンマーク海岸を距る百二十哩の北

海々上の出来事である。クローイは探海燈の下に明に二隻の水雷艇を見たと言ひ、其水雷艇は露國の軍艦ではなかつたと明言し、其内の一隻は水雷を發したけれども、カムチャッカが位置を變へたので損害は蒙らなかつたが、其水雷艇は忽ち速力を弛めた、多分カムチャッカの砲火に依つて破損したのであらう。第二隻も水雷を發したとのことであるが、自分は見なかつたとクローイは附言して居る。他の二隻の水雷艇は何時の間にか其影を隠した。クローイはロゼストウェンスキーの艦隊を襲撃したのが彼等であると信じて居る。カムチャッカが水雷艇の包圍攻撃を受けたと艦隊に無線電信を以て報じたのは即ち此事を云ふのである。然も怪しき水雷艇なるものが、其一隻はスウェーデン船アルデ balan であつて、他の一隻がドイツ漁船ゾントグであつただらうと思はれるのは、其地點と時刻に於て、曩に掲げた兩船長の報告と一致するからである。又前に引用したポリトウスキーの目誌中にも、カムチャッカの無線電信のことを記して居る。

(二)報告書は事件の直接の原因を成したものを漁船の擧げた綠色の狼煙であると云つて居る。豫て日本水雷艇襲撃の不安を以て襲はれて居る處に、遠く落伍したカムチャッカから、其常に恐怖せる日本水雷艇の包圍攻撃を受けたと云ふ無線電信に驚かされて居る其脚下から、不意に夜暗を破つて異様の狼煙を揚げられたのであるから、ロゼストウェンスキーの驚愕狼煙は察するに餘りある所である。日本水雷艇夜襲の恐怖が、提督以下、全艦隊將卒の先入主觀となつてゐたのであるから、周

章の極、枯尾花も幽靈と見たのは怪しむに足らない。但し旗艦スワロフが敵水雷艇と思つて亂射した目標が、己の僚艦アウロラとジミトリ・ドンスコイの二艦であつて、英國漁船を打つたのは其逸彈であつたのか、又は漁船を敵艦と見誤つて砲撃したのが、的を外れて味方の二艦を射たのであるか、其點は報告書に明にされてゐない。十二月五日露都で海軍省から發表されたロゼストウェンスキーの追加報告なるものに據れば、『旗艦スワロフが發砲を停止した後、忽ちジミトリ・ドンスコイとアウロラの探海燈が戰艦隊の左方に照されて、ジミトリ・ドンスコイは夜間信號を揚げたので、戰艦隊の最後方の諸艦が味方の船艦を砲撃する危険があつたから、發砲停止の一般信號が旗艦から發せられ、命令は立所に行はれた。全砲撃は十分間以内であつたが、無線電信に依つて、アウロラに命中したものの五弾、内三發は七十五耗砲彈、二發は四十七耗砲彈であつたことが報ぜられた。アウロラの牧師一名重傷を負ひ、下士一名輕傷を負うた。牧師はタンジールで遂に死去した』と云ふことである。此ロゼストウェンスキーの追加報告は露國艦隊が味方の軍艦を砲撃したことを世界に始めて自白したのであつたが、此報告に關して翌六日(十二月)の倫敦タイムスは極めて皮肉な、そして露國に辯明の餘地のない攻撃的社説を掲げた。曰く『アウロラの受けた損害が、同艦の探海燈を照す前に加へられたことは明白である。露國海軍の砲術は此戦争に於て、辛うじて其名譽を保つてゐる。然も是等五發の砲彈がアウロラを直指して打つたのでなければ、同艦に命中